

# 白村江の戦

— 七世紀・東アジアの動乱 —

夜久正雄 著

国文研叢書15



扶余・百濟塔（この第一層に唐は紀功碑を刻印した）

国文研叢書

No. 15

白村江の戦

——七世紀・東アジアの動乱——

夜久正雄 著

社団法人 国民文化研究会

## はしがき

唐と新羅しらぎの連合軍と、日本と百済くだらの連合軍が、西暦六六三年、韓国の錦江河口で戦ったのである。「日本書紀」の天智天皇紀てんちに書かれた数行の敗戦の記事を読んで、白村江はくせんこうといふはるかなる百済の大河の河口で戦はれた水軍の激戦に想ひをはせた。

「日本書紀」は日本人の書いた歴史である。そこには勿論日本人の見方が出てゐる。それなら新羅や百済はこの戦たたかひをどう見てゐたのだらう。さう思って「三国史記」(百済高句麗、新羅三国の歴史)を開いてみた。そこにはたしかに韓国の人の見方があって、自づから「日本書紀」とはちがった世界の感触があつた。

その感じは、隋ずい・唐たうの側からの見方を知りたいと思つて、「隋書」や「旧唐書」などを開いてみたとき、決定的なものとなつた。朝鮮半島の北から滿洲まんしゅう、北支那きたしな、蒙古もうこへ、あるいは海を渡つて山東半島さんとうはんとう、黄河流域こうがりがういぎの洛陽らくよう、長安ちやうあん(西安)へと、唐軍の行動をたどるうちに、七世紀東アジアの世界がひろびろとひらけて来て、目がさめるやうな感動があ

った。

こゝ二、三年来、達識の方の中にこの白村江の戦について述べられる方がある。滝川政次郎博士の「日唐戦争」(「皇学館論叢」昭和四十六年所載)と村尾次郎博士の「白村江の戦」(「軍事史学」昭和四十六年所載)はその研究の双璧であらう。桑原寿二先生は、中華民国との断交の危機に、天智天皇の智恵に学べと述べられたが、白村江の戦をさしたものである。最近は鈴木仁氏著「白村江」(学生社版)が出て、白村江戦役後の日本に唐新羅連合の強力な謀略があったことを述べられ、奈良時代の政治をすべてこの謀略によるものといふ大胆な解釈を發表された。私はその説を早急に信ずるものではないが、さういふ解釈をしたくなるほど、当時の日本が生ま生ましい国際関係の波動の中にあつたことは、戦役の直前直後の歴史をたどること、推察することはできる。それは今日の国際関係と少しも変わらないのである。

新羅の英雄武烈王が王位に即くまへ金春秋と言つてゐた頃、大化改新で有名な高向玄理にとまはれて人質となつて日本に来たが、その彼が、やがて唐の太宗皇帝に会つ



てその信任を得、遂に百済を滅すに至る。それに対して、大化改新の国博士高向玄理は、遣唐使の総裁となつて高宗皇帝にまみえたが、その直後、唐朝で死去する。

高句麗征討にあらはれる唐将契苾加力は、モンゴル系の勇将で、漠北から唐に内附した契苾部の酋長である。突厥（北アジアのトルコ民族国家）や吐蕃（チベット）と戦つて功を建て、高宗皇帝の高句麗親征の先駆として、恐らくはモンゴル系騎馬部隊を指揮したであらう、鴨緑江を渡つて平壤攻撃に出現する。

百済討滅の宿志を果した唐将蘇定方は、やがて高句麗攻撃軍の総指揮官である。

唐の東アジア進攻の主将ともいふべきは李勣で、名相房玄齡、魏徵、褚遂良たちの平和政策を論破した。

かうした隋・唐の東アジア進攻に対して、まづ「日出づる国」日本が独立を宣言し、（六〇七年）つゞいて新羅が、高句麗・百済の故地を収めて朝鮮半島から唐軍を追放する（六七五年）。

各国名將の活躍、戦闘、戦略の転換、名臣の諫争、皇帝君主の興亡、愛情と復仇——かうしたドラマを東アジアの全域にたどるなら、この戦史は恐らく優に十巻をこす大口

マンとなるだらう。

たまたま、これを書いてゐるうちに、日本と中華人民共和国との間に国交が樹立し、中華民国との国交が消滅することを日本政府が北京で宣言するといふ、異常な事態となった。これは私には国辱と思へた。

これにくらべて、七世紀の日本が情誼にもとづいて百済を援けた白村江の戦は、不幸、敗れはしたが、筋を通した義戦だった。その結果、日本の独立は承認され、新羅も唐と戦って半島の独立をかちとるに至ったのである。

最初私はこの本を文字通り戦史にしたかった。しかし、結果は、史論風のものになってしまった。文章の力が及ばなかったのである。

たゞ、うれしかったのは、これを書いてゐるうちに、目がひらけ、亜細亜の歴史と世界とが見えてきたことである。とりわけ、これからのアジアを考へるうへに、東アジアの基礎的な国際関係の樹立した七世紀の歴史は無関係ではない。

参考になる絵だとか彫刻とか遺蹟写真などは、朝鮮三国のものは比較的にあつめ易かったが、隋・唐のものについては、充分な調査ができずに終ってしまった。主として

「東洋文化史大系」(昭和十三年)の「隋唐の盛世」から借用するほかによい方法が見つからなかったのである。戦前の写真でうつりがよくないが、中国大陆に行ったことのないわたしには実にありがたいものだった。それをながめながら、われわれの祖先が相手にした唐の偉大さをかきまみる思ひもした。

国内の遺跡の写真図版なども、小柳陽太郎、広瀬誠両氏をはじめ、いろいろな方に御厄介になった。韓国関係のものは一昨年旅行した時のものや絵葉書などを利用していただいた。また最近梶村昇氏が行かれたのでその写真ものせさせていただいた。

地図は、自分で書いた略図もあるが、新旧とりまぜて既刊のものを利用させていた。本書の性質上、写真、図版等の出典を洩れなく註記するわけにもいかなかったが、原著者の方々につゝしんで謝意を申し上げたい。特に戦役関係地図では軽部慈恩博士遺著「百濟遺跡の研究」から借用させていたとき、犬養孝博士の「万葉紀行」からも二葉の略図を拝借した。は、に、わ、の、写、真、は、ち、よ、う、ど、国、立、博、物、館、で、は、に、わ、展、が、開、か、れ、陳、列、は、に、わ、の、写、真、集、が、出、た、の、で、そ、れ、か、ら、複、写、さ、せ、て、い、た、と、く、な、ど、既、知、未、知、の、方、々、か、ら、蒙、つ、た、恩、恵、は、は、か、り、知、れ、な、い、も、の、で、あ、る。

用字法については、前著「古事記のいのち」にならって当用漢字、歴史かなづかひに拠ることとした。正漢字を使ふことをさせたのは印刷の都合と若い読者を顧慮したからである。漢字音のかなづかひは現代かなづかひとした。

外国の地名、人名は主として漢字音で読んでそのふり仮名をつけた。これも問題であるが、地名や人名を読めないままにして読書するのはいやなもので、私なりの読み方をつけたのである。私は元來歴史の専門家でないうへ、とくに朝鮮史や中国史は勉強をはじめたばかりなので、さういふ読み方などんでもない間違ひをしてゐるのではないかと思ふ。これもわかり次第訂正したいので、大方の御指摘をお願いしたい。

日本史上の重大事件を、東洋史上の重大事件として書くといふことは、私にとっては冒険であつた。浅学のそしりを覚悟して、敢てこの試みを活字にしてもらつたのは、大きく言へば、専門分化の弊害を打破して、生きた歴史・生きた学問を回復したいといふ願ひからなのであるが、誤りは誤りとして正さるべきは当然で、切に識者の補正を仰ぎたい。

出版に當って毎々のことで恐縮であつたが、国文研叢書の中にとりあげていただいた

ので、小田村寅二郎理事長はじめ皆さんの御厄介になった。

校正その他について国武忠彦氏の御協力を得、図版や写真の多い本書の印刷については、奥村印刷の諸氏に御苦勞をおかけした。書中をかりて関係の諸氏に深く謝意を申し上げます。

そして最後に、たゞひとつ残念なことは、一緒に韓国の扶余<sup>ふよ</sup>まで行って同じ思ひに白村江を眺めた桑原暁一さんが四十八年五月急逝されて、この本を見てもらへないことである。本が出来たら最初の本を御霊前にさし上げたい。

昭和四十八年十二月八日

著 者

# 目次

表紙写真……扶余・百濟塔（この第一層に、唐は戦役の紀功文を刻印した）

はしがき……………1

登場人物……………12

主要舞台（関係地名参考地図）……………31

掲載写真四十一葉 地図十四葉

第一章 前史——御船征西、始めて海路に就く……………1

(一) 白村江の戦（六六三）……………2

(二) 大伴部博麻（六九三）……………9

(三) 御船征西（六六一）……………13

(四) 難波津出航（六六一）……………17

(五) 渡津海の豊旗雲（六六一）……………26

(六) 熟田津に船乗りせむと（六六一）……………34

(七)	朝倉の宮(六六一)	39
(八)	伊吉博徳の記録(六六一)	47
(九)	齐明天皇崩御(六六一)	60
第二章 隋・唐の東アジア進攻		
(一)	隋の煬帝の高句麗遠征(六一二、六一三)	68
(二)	唐の太宗の高句麗親征(六四四)	74
	附 百済王・新羅王に与へた太宗の詔	
(三)	房玄齡の諫争(六四八)と太宗の薨去(六四九)	93
(四)	高宗の百済討滅(六六〇)	99
(五)	唐から見た日本	114
第三章 百済の滅亡		
(一)	百済滅亡の歴史	130
	百済の滅亡	129



(一)	「三国史記」……………	133
(二)	「百濟本紀」義慈王二十年(六六〇)……………	140
(三)	新羅の側から……………	150
(四)	百濟と日本……………	164

第四章 白村江海戦…………… 171

(一)	齊明天皇紀の凶兆……………	172
(二)	百濟遺臣の蜂起(六六二)……………	178
(三)	契苾加力(六六二)……………	182
(四)	御船還りて海に就く(六六一)……………	187
(五)	須臾の間に御軍敗る(六六三)……………	195
(六)	熊津・就利山の会盟(六六五)……………	208

第五章 戦後…………… 213



(一)	大唐の鎮將の使節至る(六六五) .....	214
(二)	国防——防人、烽、水城等 .....	218
(三)	近江遷都(六六七) .....	221
(四)	高句麗の滅亡 上(六六八) .....	225
(五)	高句麗の滅亡 下 .....	233
(六)	敗戦の余波——鎌足の死(六六九) .....	235
(七)	新羅の半島征覇 .....	238
	——安東都護薛仁貴对新羅文武王の論争(六七二)	
(八)	天智天皇崩御(六七二) 壬申の乱(六七二) .....	256
(九)	新羅文武王(六八二) 唐高宗皇帝の崩去(六八三) .....	263
(十)	天武朝(六七三—六八六) 持統朝(六八六—六九七) .....	266
(十一)	平和克復——遣唐使、長安に入る(七〇二) .....	269
附	七世紀の日本・朝鮮半島三国(百濟・高句麗・新羅)・隋唐の対照略年表 .....	277

## 登場人物

大化改新 六四五  
百濟滅亡 六六〇  
白村江の戦 六六三  
高句麗滅亡 六六八

〔註〕 隋唐ならびに三国の人名は日本  
における漢字音で仮名を附した。

## 日本の部

聖徳太子 (五七四—六二二)

用明天皇の皇子、推古天皇の皇太子。摂政として冠位十二階を制定、憲法十七条を親筆せられ、隋と国交を開き「日出る処の天子」の国書を送る。勝鬘、維摩、法華三経の義疏を講説ならびに述作せられた。これは日本最初の個人的著述である。また晩年に国史を編纂された。これも日本最初の国史で、そのまゝの形では伝はらなかったが、古事記の原型と思はれる。これを要するに太子は、大陸文明を摂取して日本の文明の基礎を確立された文化史上の英雄である。六二二年全国

民哀悼のうちに薨去、御年五十。

高向玄理たかむけのくろまろ（一六五四）

小野妹子を大使とする遣隋使に

従って隋に留学（六〇八）。帰国

（六四〇）して、大化改新の際、

国博士となり（六四五）、八省百官

を定めた（六四六）。同年、新羅

に使用して金春秋きんしゆんじゆ（後の武烈王）

を人質として帰国した（六四七）。

また孝徳天皇白雉五年（六五四）遣唐押使げうし（総裁）として渡唐し、高宗皇帝に面接して質問に答

へるところがあったが、その直後、大唐で客死した（六五五）。玄理は「げんり」ともいふ。

齊明天皇さいめい（五九四—六六一）

皇極天皇（第三十五代）が重祚じゆうそして齊明天皇（第三十七代）と申し上げる。女帝。舒明天皇の



御物・聖徳太子と二王子像

皇后。天智天皇（中大兄皇子）天武天皇（大海人皇子）間人皇后（孝徳天皇の皇后）の御母。齊明天皇の七年西征して筑紫の朝倉の橋の広庭宮（福岡県）にて崩御。御年六十八。

中大兄皇子・天智天皇（六二五—六一六）

七一

舒明天皇と齊明天皇との皇子。皇極天皇の末年に中臣鎌足とはかつて蘇我入鹿を討ち、父の蝦夷をも討って蘇我氏を倒した。つゞく孝徳天皇の大化元年、皇太子として維新政治を指導し、齊明天皇の御代には摂政として、西征の軍を興した。天皇崩するや称制の政治を行ふ。白村江の敗戦後、北九州、瀬戸内海、大和の国防を施設し都を近江の天津に遷し、そこで崩ぜられた。御年四十六。

大海人皇子・天武天皇（一六八—一六六）

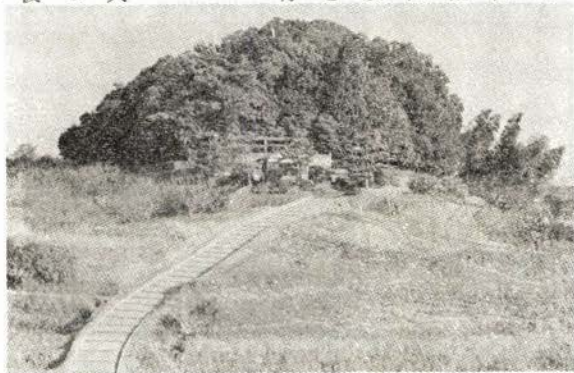


朝倉の橋の広庭宮遺蹟

第四十代の天皇。中大兄皇子の弟。兄皇子のアポロ的  
に対しディオニソスの性格と言はれる。額田女王ぬかたの女王をめぐって兄皇子と対立されたらしくもある。兄皇子の即位  
後、皇太子となられたが、吉野に逃避。やがて壬申の乱  
により大友皇子（弘文天皇）と戦ってこれを破り、皇位  
につく。都を大津の宮から飛鳥に移し、いはゆる皇親政  
治を布き、国力を充実し、国防を強化する。八色の姓を  
定め、位階を改定し、近江律令を改修し国史の編修を行  
ふ。古事記は天皇の勅語の旧辞とつたへられる。

中臣なかとみの（藤原）鎌足かまたり（六一四—六六九）

中大兄皇子の最高ブレイン。孝徳天皇、斉明天皇、天  
智天皇三代に仕へ、内大臣、大織冠に昇る。当代最大の  
政治的实力者であった。白村江戦役前後の政治は多く彼  
の謀計によるものであらう。天智天皇の八年薨す。藤原



天武・持統天皇陵（松隈大内陵）

氏の祖。談山神社に祀られる。年五十五。

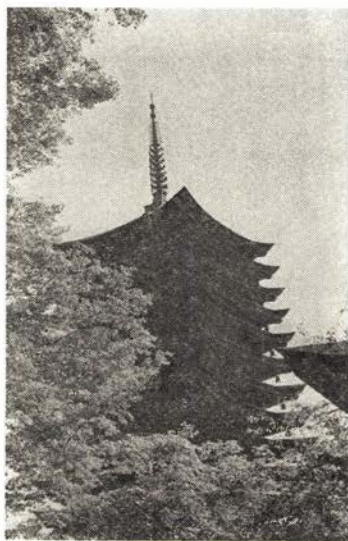
伊吉博徳（一七二一？）

齊明天皇五年第四次遣唐使の副使として渡唐し、唐朝廷に抑留されて同天皇の七年に帰国。

「伊吉博徳書」は当時の記録で「日本書紀」にたびたび引用された。後、唐・新羅との外交に活躍する。

阿曇比羅夫

日本水軍の総指揮者であつたらしい。天智天皇の朝、百濟救援軍の前將軍を命ぜられ、蝦夷、肅慎との戦ひで戦果をあげた後將軍阿部引田比羅夫たちと渡海したが、白村江の戦ひに敗れた。



藤原鎌足をまつる談山神社・十三重塔  
（桜井市多武峯）



朴市田来津（一六六三）

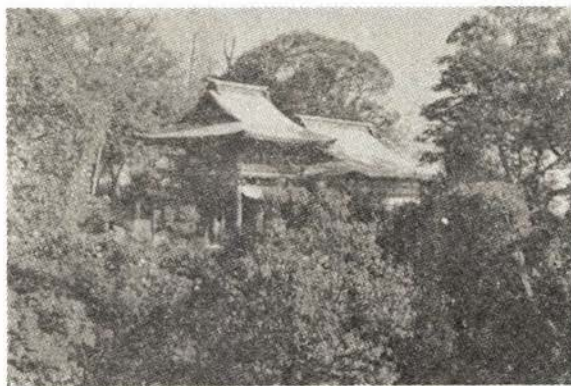
齐明天皇七年、百济王子豊彰（ほうしょう）を送って百済に到着。百济派遣軍の將軍。百济の復興につくした。百済軍は彼の議を用ひずして拠点すを周留城しゅうりゅうじょうから避城さきに移した。白村江の戦ひで壮烈な戦死をとげた。

大伴部博麻（おほともべのほかま）

白村江の戦に従軍して捕虜となったが、身を奴隷に売って友人の帰国を助けた愛国者。持統天皇の四年、三十年ぶりに帰国した。いはば白村江戦争（日唐戦争）の「横井さん」である。

額田女王（ぬかたのおほきみ）

はじめ大海人皇子の妃として十市皇女（といち）を生み、後、天智天皇の妃となる。齐明天皇の西征にした



志賀海神社・福岡県志賀島，宗像三神をまつる阿曇水軍の根拠地

がひ、のち壬申の乱も経験するなど、時代の悲劇的運命を経験した大女流歌人。

## 百済の部

義慈王ぎじおおう（？—六六〇）

百済三十一代の王。高句麗と結んで新羅を攻めたが、治世二十年にして唐・新羅の連合軍に首都扶余（泗泚）が攻略され、亡国の悲運に遭ふ。捕虜として唐都に連行され、許されたが、その地で薨じた。唐から金紫光禄大夫衛尉卿を贈られた。

太子隆りゅうふよ（扶余隆）

義慈王の第三王子。百済の滅亡の時父王とともに捕へられて唐に連行されたが、許されて司稼正卿を授けられ唐朝に仕へた。後、百済の熊津都督を命ぜられ、就利山に新羅の文武王と会盟したが、新羅をおそれて唐に帰った。唐で歿した。洛陽で墓碑が発見された。

楷陌かいぼく（—六六〇）



百済の將軍。黄山の役に新羅と戦つて奮戦、

戦死。近年扶余に銅像立つ。(二四六頁参照)

成忠(淨忠) 義直、興首。

三人とも百済の忠臣、佐平(大臣)。義慈王を諫死す。いま三忠祠が扶余の近くにある。

余豊(豊彰)

義慈王の第四王子。人質として日本にあつたが百済滅亡後、福信・道琛ら百済復興義軍に迎へられて王と為る。後、福信を斬つて、新羅に攻められ、白村江の戦にて敗北。高句麗に逃れた。高句麗の滅亡によって唐に連行されたといふ。



三 忠 祠 (淨忠・義直・興首をまつる)

福信ふくしん（一六六三）

百済の遺臣、百済滅亡後、周留城すわろに拠って抵抗した。王子余豊よまうを日本から迎へたが、隙ひまを生じて、斬られた。その子鬼室集斯は、日本に来て、福信の功により高位を授けられ、学職頭となった。近江の鬼室神社は集斯をまつるといふが、福信をもあはせまつたものであらう。

道琛どうちん（一六六二？）

百済の遺臣、僧侶。百済滅亡後、福信と祖国復興のため奮闘したが、福信と隙を生じ、福信のために殺された。

高句麗の部

宝蔵王ほうざうおう（一六八二？）

高句麗第十八代の王。莫離支まくりし（大臣）蓋蘇文がいそぶんによって立てられたため、唐の攻撃を受けることとなったが、蘇文の輔けを得て、屈するところが無かった。蘇文の死後、その子どもたちの間に権力争ひが起り、その内部分裂に乗ぜられて、遂に亡国の憂目を見ることとなった。滅亡後、許

されて、朝鮮王に封ぜられ、安東都護となった。  
やがて謀反して高句麗復興をはかったが、発覚し  
て、四川の邛州に流された。

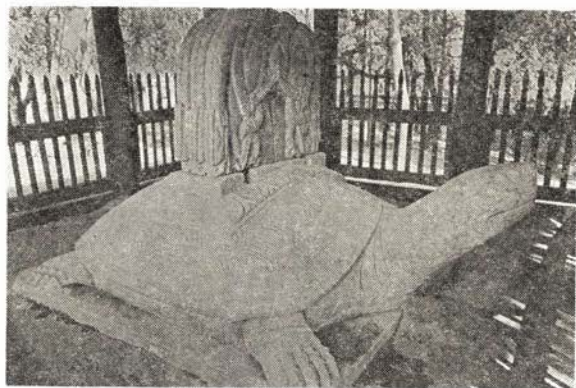
(泉)蓋蘇文(?—六六六)

高句麗の莫離支として活躍。終始祖国の防衛の  
ために戦ひ、遺言してその子たちの協力を願った  
が、その子の男建、男生らが争って国を滅ぼすに  
至った。

## 新羅の部

真徳王(在位六四七—六五四)

新羅第二十八代の女王。



新羅・太宗武烈王陵石碑の亀扶と篆額

太宗・武烈王（金春秋）

（六〇三―六六一）

第二十九代の王。即位前金春秋時代に、百済を攻略しようとして、高句麗に至り、謀るところあったが不成功、つゞいて人質として日本に來た。後、唐に行き、遂に唐との連合をなしとげ、百済を討滅した。

金庾信（五九五―六七三）

百済の名将。金春秋の盟友で、金春秋を推して王とするに力あり、数次の戦闘に功をたてた。新羅勃興の大功臣である。近年慶州に銅像が建てられた。

文武王（金法敏）（六二六―六八一）



金庾信將軍銅像（慶州市）

第三十代の王金春秋の子、父とともに唐朝に仕へたが、帰国して太子となり父のあとをついで新羅王に封ぜられた。白村江の戦役で、日本軍を破り、就利山しゅりさんで百済の王子隆と会盟したが、高句麗滅亡後、復興軍の叛乱に乗じて、唐兵と戦ひ、遂に百済、高句麗の故地を収め、大同江以南を統一した。

金仁問きんじんもん（六二九—六九四）

武烈王の第二王子。唐朝に仕へること二十年、唐と新羅との間に立って調停の役を果たした。將軍でもあった。唐では輔国大將軍へ累進し、唐で歿した。新羅最高の太たい大だい角かく干かんを追贈された。



新羅王陵古墳

## 隋・唐の部

煬帝ようだい（五八〇―六一八）

隋の第二代の皇帝。父文帝を殺して即位。統一国家の威力を発揮して大運河を作ったが、大宮殿を作って奢侈に耽り、三次にわたる高句麗遠征に失敗して、遂にその臣に殺された。その治世の大業八年に日本との国交があり、国書の交換があったらしい。

## 唐

太宗たいそう（李世民）（五九六―六四九）

唐第二代の皇帝。父李淵（高祖）をたすけて唐朝を建て、その治世はいはゆる貞観じょうがんの治で、唐の



隋の煬帝（唐の閻立本「歴代帝王國卷」より）

盛代をきづいた。高句麗遠征は志をとげる  
ことが出来なかったが、西戎、北狄、南蛮  
を降して当時の唐を世界国家とした。名臣  
房玄齡、杜如晦、褚遂良、魏徵らが輩出し、  
名将李靖、李勣らが出て、国威を張った。  
その陵を昭陵といふ。史書「晉書」は太宗  
皇帝の親撰である。

### 高宗（六二八—六八三）

唐第三代の皇帝。太宗の第九子。外戚長孫無忌に擁立された。治世の初年は前代を継いで国威  
を張り、新羅と結んで百濟を滅し、白村江の戦に日本を破り、遂に高句麗を滅して三韓を支配下  
に収めた。しかし皇后の則天武后の勢力が増加し、朝廷の内部が乱れるに至った。殊に晩年は武  
后に庄せられて力を喪ってしまった。その陵を乾陵といふ。現在発掘中といふことである。

### 魏徵（五八〇—六四三）



唐の太宗



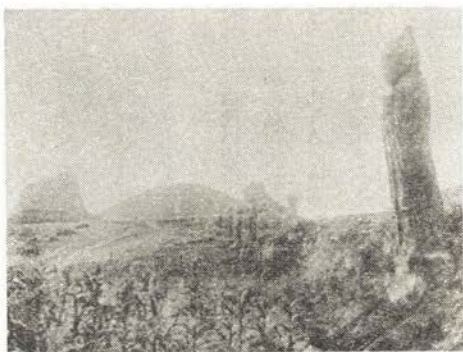
房玄齡を唐の草創の名臣とし魏徵ぎしちゆうを守成の名臣とする。太宗に仕へて守成の功があつた。房玄齡、褚遂良もよすいりやうたちとともに高句麗親征に反対したが、遂に李勣りせきら主戦派の力を食ひ止めることができなかつた。初唐の代表的詩人でもあり、文学概論を試みたりした。勅により「隋書」を撰進した。また梁・陳・北齊・北周の歴史編纂の総裁となつた。

房玄齡ぼうげんれい（五七八—六四八）

唐の草創の名臣。太宗の貞観の治を輔け宰相たること十五年。太宗皇帝の高句麗親征を諫める辞を遺して逝く。皇帝親撰の「晉書」その他史書編纂にも大功があつた。

李勣りせき（一六六九）

李靖りせい（五七一—六四九）と並んで唐の名将。太宗に仕へて北狄経略に功をあげ高句麗討滅は十



唐・高宗の乾陵



数年をかけた李勣の畢生の事業であつたが、遂に成功した。太宗の昭陵に陪葬。その墓前に雄大な碑がある。高さ約五メートル・幅二メートル弱で、碑文は高宗の御製御書といふ。

蘇定方（五九二—六六七）

唐の大將軍。貞觀の初、李靖に従つて突厥を討つて功あり、後百

濟攻略の大將軍となつて成功。義慈王はじめ王子將士を捕虜として凱旋。つゞいて李勣に従つて高句麗を滅す。前後三国を滅し皆その主を生擒にした。

薛仁貴（六一四—六八三）

太宗以来高句麗の遠征に従ひ、高句麗滅亡後、平壤に留り右威衛大將軍、檢校安東都護となつ



李勣墓前の紀功碑

て戦後処理に当る。新羅文武王との往復書簡あり、当時の東アジアの形勢を語る。

劉仁軌りゆうじんぎ（六〇〇？—六八五）

蘇定方そていほうの百濟討滅後、熊津の都督劉仁軌りゆうじんかんが百濟の遺民に囲まれて危かつたのを救援した。後、仁軌と力を合せて、百濟復興軍を潰滅せしめた。熊津・就利山じゆりさんの会盟の辞は名文の誉高く、仁軌の作といふ。後、左僕射兼同中書門下三品さんぽん（総理大臣相当）を拜し、政事をつかさどった。

劉仁願りゆうじんがん

百濟征討の時の唐将。百濟滅亡後、熊津の都督となって戦後処理に当る。白村江戦役後日本にも使を派遣して交渉するところがあつた。後、高句麗征討の時期に遅れて姚州ようしゅうに流された。

褚遂良ちよすいりやう（五九六—六五九）

魏徵の推薦により太宗の書道顧問となり王羲之わうぎしの書の収集を助けた。同時に唐初の書家としても第一流で「雁塔聖教序」「房玄齡碑」「孟法師碑」等の名筆をのこして、今日でも楷書の模範の一とされてゐる。また諫議大夫かんぎを兼ねる輔翼の名臣の一人で、太宗の高句麗親征に反対して李勣

と争論し上表諫言した。

この議は容れられなかったが、太宗は遂良の諫言を重んじ、死するに臨み、国家の後事を長孫無忌と遂良とに託したほどである。つづいて高宗に仕へたが、皇后廢立のことで極諫して容れられず、こ

の時も李勣と合はず、左遷され、愛州の刺使ししにおとされ、永徽六年不遇のうちに歿した。年六十三。

### 契苾加力

モンゴル系契苾部けいひつかの酋長しゅうちやうの子として生れた。後、唐に内附して、將軍となり、突厥との戦闘に功を建てた。高句麗遠征の將軍となつて奮戦し、遂に平壤攻略の機を掴んだ。卒するや、輔国大將軍并州大都督を贈られ、昭陵に陪葬された。



褚遂良筆孟法師碑拓本

則天武后（六二三—七〇五）

高宗皇帝の皇后。美貌で、太宗に召されて才人となった。太宗歿後尼となったが、また召されて高宗の後宮に入り、六五五年皇后となる。外戚長孫無忌（ちようそんむぎ）の派閥を倒して政治の実権を握り、顯慶五年高宗が病むと、武后が代って万機を決裁した。六八三年高宗が歿するや、唐の宗室を滅ぼし、九〇年国号を周とかへ、

聖神皇帝と称した。七〇五年歿、八十三才。



則天武后

## 主要舞台

主要地名

日本

大和、難波、稻見、明石、大<sub>おほく</sub>伯海、熟<sub>にぎた</sub>田津、那<sub>なのおほつ</sub>大津、朝<sub>あさくら</sub>倉、壹<sub>い</sub>岐、对<sub>つしま</sub>島、大<sub>おほつ</sub>津、吉<sub>よしの</sub>野  
高安

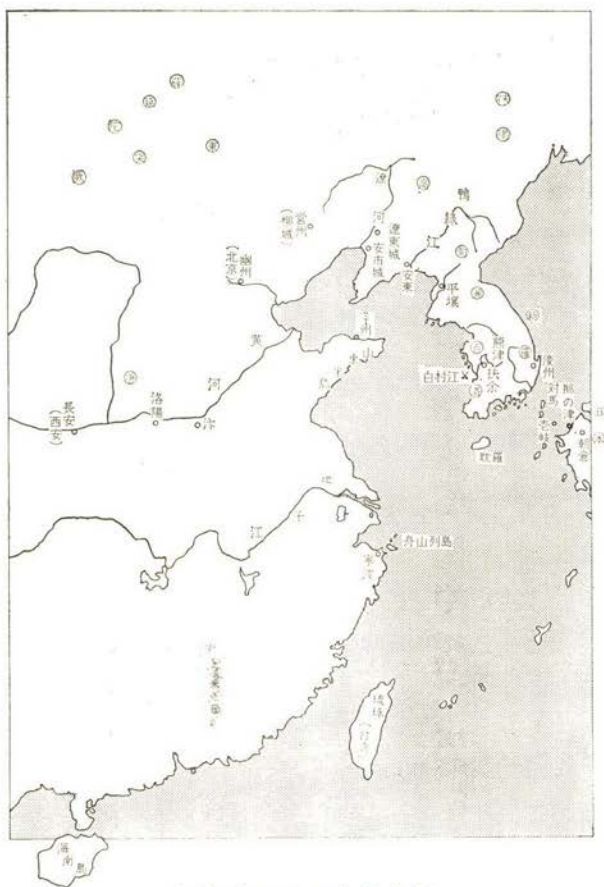
三韓（地名は主として日本における漢字音の訓みによる）

百济

熊<sub>ゆうしん</sub>津、泗<sub>しび</sub>泚（扶<sub>ふよ</sub>余）、周<sub>す</sub>留、任<sub>にんぞん</sub>存、避<sub>へ</sub>城、炭<sub>たんけん</sub>硯、白<sub>はくば</sub>馬江、黄<sub>こうげん</sub>原、白<sub>はくせんこう</sub>村江（伎<sub>き</sub>伐<sub>ふ</sub>浦）

新羅

鷄<sub>けいりん</sub>林（慶<sub>けいしゅう</sub>州）南<sub>なんかんじょう</sub>漢城



唐初東アジア参考略図

高句麗こくり

平壤へいじょう、浪江ばいこう、鴨綠江おうりよくこう、新城しんじょう、遼東りょうとう、丸都がんと、安市城あんしじょう

唐とう（隋ずい）

長安ちやうあん、洛陽らくよう、幽州ゆうしゅう、柳城りゅうじょう（營州えいしゅう）萊州らいしゅう、山東半島さんとうはんとう、契丹きつたん、契苾けいひつ、薛延陀せつえんた、高昌こうしやう、吐谷とよく

渾こん、吐蕃とばん

白村江の戦——摘要

- (1) 聖德太子遣隋使(六〇七) 大化改新(六四五) 百濟滅亡(六六〇) 白村江の戦(六六三) 高句麗滅亡(六六八) 壬申の乱(六七二) 粟田真人遣唐使(七〇二)

(2) 基本文献資料及び金石文

- 「日本書紀」(七二〇) 「続日本紀」(七九四) 「古事記」(七一二) 「万葉集」(七五九) 「大織冠伝」(七五七) 「隋書」(六三五) 「文館詞林」(六五八) 「三国史記」(一一四五) 「三国遺事」(一一〇六一八九) 「旧唐書」(九四五) 「新唐書」(一〇六〇) 「資治通鑑」(一〇八四) 「冊府元龜」(六三五) 大唐平百濟塔碑、劉仁願紀功碑、隆墓碑銘、李勣碑等

(3) 要旨

- (一) 隋・唐の東アジア侵攻と百濟の滅亡 (二) 齐明天皇七年御船征西、始めて海路につく (三) 百濟遺臣の蜂起と白村江の海戦(六六三) (四) 熊津・就利山の会盟(六六五) (五) 戦後



## 第一章 前史

——御船征西、始めて海路に就く——

- |                |             |
|----------------|-------------|
| (一) 白村江の戦      | (四) 難波津出航   |
| (二) 大伴部博麻      | (五) 渡津海の豊旗雲 |
| (三) 御船征西       |             |
| (六) 伊吉博徳の記録    |             |
| (七) 朝倉の宮       |             |
| (八) 熟田津に船乗りせむと |             |
| (九) 齊明天皇崩御     |             |

## 第一章 前史

——御船征西、始めて海路に就く——

### (一) 白村江の戦

「白村江」。これは「日本書紀」に出てくる古代朝鮮の百濟くだらの地名で、昔は「はくそんこう」と音で読んでゐたが〔「東洋史辞典」平凡社・「日本歴史辞典」等〕戦後は「はくすきのえ」と訓よんでゐる（丸山二郎「定本日本書紀」岩波日本文学大系本「日本書紀」等）。「はく」は「白」の漢字音、「すき」は「村」の朝鮮語音といふ。「日本書紀」に「意流村」を「州流須す祇き」（日本書紀神功皇后卷）と訓む例があるので、それにならつたものだらう。「の」「え」は勿論もちろん日本語で、「え」（江）は、入江の意味である。したがって「はくすきのえ」といふ地名は、

中国、朝鮮、日本三国語から出来てゐる不思議な地名といふことになる。しかし、それは「日本書紀」に出てくる地名で、「日本書紀」だからさうよんだので、中国、朝鮮でさう読んだのではない。中国側の史書の「唐書」では「白江口」といふ。

「白江」は、現大韓民国・忠清南道と全羅北道との間を流れる熊津江（錦江）の下流「白馬江」であるといふ。百済の都扶余は錦江の中流にあつた。

そこで、「白村江」は、「白江口」すなはち「錦江」の河口の入江とみられる。

これでよからうと思つてゐたら、今西竜博士は「白江考」（百済史研究）所載未定稿―昭五六、六〇といふ論文で、詳細な考証を行ひ、「白村江」は、錦江河口より南の辺山半島のさらに南、東津浦のあたりとした。

さうなると、どうなるのかわからなかつたが、軽部慈恩博士の遺著「百済遺跡の研究」（昭和四十六年十月刊）は、綿密な实地踏査に基づいて今西説を批判し、「白村江」を百済語でコマルナルと訓み、熊津江（久麻奈利―「日本書紀」）、白馬江、伎伐浦（三國史記）すべて、百済語でコマルナル（「大きな部落のある所を流れる河」と訓んで、錦江及び錦江の一部分の名であることを明らかにした。



白村江戦役参考図

「要するに百濟当時における白江は今の錦江の下流にあって扶余より海に注ぐまでの間の名称であった。即ち公州より下流、今の扶余までを熊津江あるいは熊津といい、それより下流が白江で、別に同様に、白村江、伎伐浦、只火浦といい、その江口を白沙という文字で書いたということが出来る。さらに後世この江はその流域に部分的に多くの名称が生じたが、その大部分はこの江の原名『コマルナル』から生じたもので、泗沘河、白馬江、古城津、古省津、古多津等は皆それである。なお、この江の全流域にわたる名称は古く熊津コマルナルの文字を以て表わされた時代があり、これが後世、津の字を

略して中国流に一字名として熊江コムガンと呼ぶようになり、さらに高麗期に至って純中国式の名称に変えることが流行して『コムガン』を錦江コムガン (금강) (Kumgan) と改め、今日この江の名称となった。』(前掲書八七頁)

したがって「白村江」は朝鮮語でコマルナル、漢字音でハクソンコウと訓んだわけですが、当時日本で「はくすきのえ」と訓んだのかどうか、すこぶるあやしいが、それはともかく、ここで、日本(倭国)、中国(唐)、朝鮮(百濟・新羅)の三国(新羅と百濟とは敵対関係だった)が戦ったので、三国の言葉を混じて、ハクスキノエとしやれたのかもしれない。戦後の銜学のなせる訓みのやうに思ったが、飯田武郷たけさと(二八二八—一九〇二)の「日本書紀通釈」もかう読んでゐるから、問題は暫く措くとして、この文章では旧訓の通り白村江ハクソンコウと読んでおかう。

ここで、西暦六六三年、天智天皇の称制二年の秋八月、大戦争があつた。すなはち、日本と百濟くだらの連合軍が、唐と新羅しらぎの連合軍と戦つて、大敗したのである。「日本書紀」によると次のやうになる。

「天智天皇の称制しやうせい(註・即位の式を挙げずに政務を摂ること)二年、秋八月十三日。新羅しらぎは、

百濟王（余豊）がその賢臣福信を斬ったことを知って、直ちに侵入して百濟軍の中心地であった州柔城（註・周留城）を取る計略を立てた。百濟王は新羅の謀計を察知して諸將に語った。——『今聞く大日本国の救援の將、慮原の君臣が、健児万余を率ゐて、必ず渡海して来るとのことである。わが諸將軍たちよ、爾前に計略を練ってほしい。我は自ら出向いて、白村（註・錦江下流）において、日本軍を迎へたい。』と言った。

十七日。新羅の將軍は、州柔城に到着して、これを包囲した。大唐の軍將、戰船一百七十艘を率ゐて、白村江に陣列した。

二十七日。日本の軍船の先鋒と、大唐の軍船と合戦した。日本は負けて退却した。大唐はさらに陣を堅めて守った。

二十八日。日本の諸將と百濟王と、氣象を無視して、『我等が先を争って攻撃すれば、彼は自然退くだらう』と相語った。そこで、戦列の乱れた伍、中軍の卒を率ゐて進んで、大唐の堅陣を撃った。大唐、すなはち、側面より日本の軍船を夾撃包囲して戦った。須臾之際（ときのみ）に、みいくさ敗る。水中に入って溺死する者が衆かった。船は、舳艫を廻旋（回転）することができなかつた。日本の將軍朴市田来津は、天

を仰ぎて誓ひ、齒を食ひしばりて嘔り、数十人を殺した。そしてここに戦死した。この時、百済王豊璋は、数人と船に乗って、高麗（高句麗）に逃亡した。」

これが白村江戦役の、日本側における唯一の記事ともいふべき「日本書紀」の文章である。

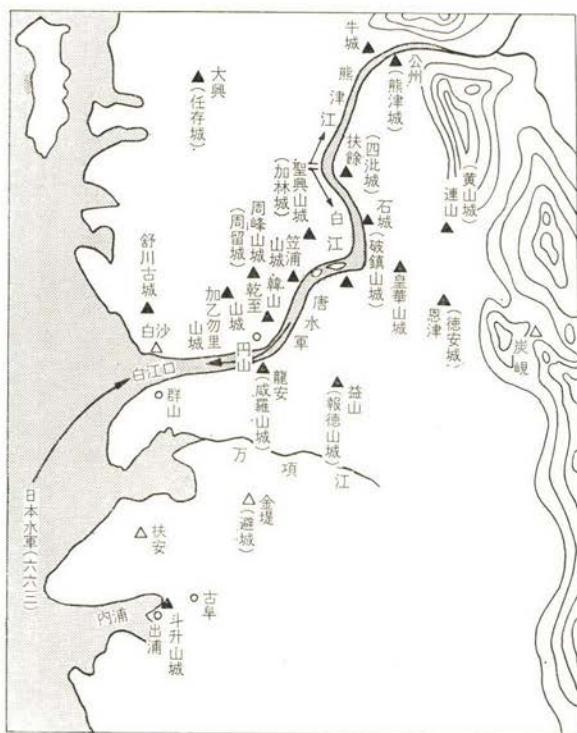
「旧唐書」（唐の歴史）には、唐将劉仁軌伝に、唐の水軍が、

「倭兵と白江の口（註・錦江河口）に遇ふ。四戦、捷ち、其船四百艘を焚く。煙焰天に漲り、海水皆赤し。賊衆大潰・余豊（註・百済王豊彰）身を脱れて走る。」（原漢文・訓読）とある。軽部博士の復原地図によると図のやうになる。

日本軍はこの年三月編成の三軍で、総数二万七千と書かれてゐる（「日本書紀」）。「三國史記」（百済、新羅、高麗三国の古代史）の「新羅本紀」には「倭船千艘」と書かれてゐる。

かくて、神功皇后の三韓征討と呼ばれる四世紀末の朝鮮進攻以来約三百年におよぶ半島経略は終つて、以後、日本は、半島に対する武力介入を断念し、自衛一本槍の軍備に転換し、天智天皇の近江遷都から、壬申の乱となり、国内の大動乱を経てやがて飛鳥の藤原京、平城・奈良、平安・京都の平和的文化国家の建設に終始することになる。白村





白村江戰役地圖（輕部慈恩著「百濟遺蹟の研究」に拠る。）

江の戦といふのは、日本の古代史に大転換をもたらした戦である。

(二) 大伴部博麻

私がこの白村江の戦に注意させられたのは大東亜戦争敗戦後のことで、「日本書紀」を読んでみて、持統天皇の条に、かういふ記事をみつけた時からであった。

持統天皇（文武天皇の皇后であつたお方）の四年（西紀六九〇年）、冬十月二十二日乙丑の日に、大伴部博麻といふ人に詔があつた。大伴部とあるから、武人の名門大伴氏に属して兵士を職とした人であらう。階級は旧軍隊の軍曹とか兵曹とかの下士官級と思はれる。この人は、筑後の国の上陽群郡の人で、兵士となつて出征し、捕虜となり、三十年後のこの年に帰国したのである。陽群郡は八女郡で郡内に八女止の地名もある。

その詔を現代語に訳すと、

「斉明天皇の七年（西紀六六一一年）百済を救ふ戦役に出征した博（博麻）は、唐の軍隊のために捕虜にされた。その翌々年天智天皇の三年におよんで、土師連・富村、氷連・

老、筑紫の君・薩夜麻、弓削連・元宝の子の四人が、唐の日本に対する計略を知って、それを日本の朝廷に奏聞（報告）したいと思った。しかし、衣服・食糧が無いので帰国できさうもなかった。その時、大伴部博麻が、土師富杼たちに語って言ふには、  
『私は、君たちと一緒に、日本の朝廷に還りたいと思ふが、衣糧が無いので一緒に帰ることができない。どうか、私の身を奴隷に売って、君たちの帰国のための衣食の費用にあててくれ』と。かくて富杼たちは、博麻の計略にしたがつて帰国し、唐の軍略を天朝に通報することができた。汝は、その後ひとり他国に留った、今に三十年である。朕は、汝が朝廷を尊び国家を愛して、自分の身を売ってまでして忠誠心を実行したことをうれしく思ふ。故に、務大肆（従七位相当）の位を賜ひ、合せて純五匹・綿一十屯・布三十端・稲一千束・水田四町歩を賜ふ。なほ其の水田の所有は曾孫まで及ぼせ。また三等親以内三族の課役を免除して、汝の功績を顕彰する。』  
と、仰せ出されたのである。

この記事のある持統四年は前記の註の通り西紀六九〇年であるから、詔の中の「百済を救ふ役」すなはち白村江の戦役への出陣の年——齐明天皇七年（西紀六六一年）から、た

しかに三十年経ってゐる。二十歳前後で兵士として出征したと思はれる博麻は五十歳前後になってゐたはずである。

いまこの話を書けば誰でもすぐ横井庄一さんのことを心に浮べるだらう。たしかに、千年をへだててこの二人の兵士は大戦の最後を飾ったのである。たゞ私がこの話を読んではっとしたのは、十数年の昔で、ちょうどその頃、——昭和三十年頃だったらうか、南の島から思ひもかけぬ帰還兵があつたからであつた。大東亜戦争が終つて十年のころのことだつた。そして二十年経つた今でも、死んだと思はれた日本人が、中共などからひょっこり帰ってくることもある。戦乱の中で親に別れた子どもが中国で成人して、死んだとばかり思つてゐた親のもとに帰ってくることもある。まだ帰れないでゐる日本人さへあるといふ。戦争は何十年の後まで人の運命にも心にも濃い影をおとしてゐるのである。その影と光とを一人で具現したのが、大伴部博麻であり横井庄一さんである。

「日本書紀」の博麻の記事は、短い記事で、白村江戦役後三十年の持統天皇紀四年の中に、前後の記事とは関係なく、思ひがけない事件のやうにして書き残されてゐるが、この記事が国史の中に書き残した時代精神は、戦争をおもふ深い感慨を潜めてゐたにち

がひない。さういへば、博麻の犠牲で帰国することのできた四人の中の筑紫の君・薩夜麻は、名前からして筑紫の国造級の人物らしいが、「薩野馬」としてその名が天智天皇十年（六七二年）十一月の（唐からの）帰国者の記事の中に見える。戦役出征以後八年である。これを見ると博麻が身を売って薩夜麻を還したことはまぎれもない真実で証拠さへあったのである。

持統天皇の詔みことのりには、一身を犠牲にして国のために尽した大伴部博麻といふ一兵士に対する深い熱い同情がある。持統天皇御自身、大海人皇子（後、天武天皇）のお妃として西征の御船に従ひ、筑紫の博多で草壁皇子を誕生なさるといふ、非常の御体験を持つてをられるのだから、当然と言へばそれまでだが、それが戦後三十年のことである。私はそこに白村江の戦役後の時代精神のほひを嗅かいだ。すると、日本古代史における決定的な敗戦であったこの白村江の戦ひが、同じく敗戦であるといふ点で、大東亜戦争と似てゐるところがあると思はれてきて、何かかう心がひきつけられるのである。

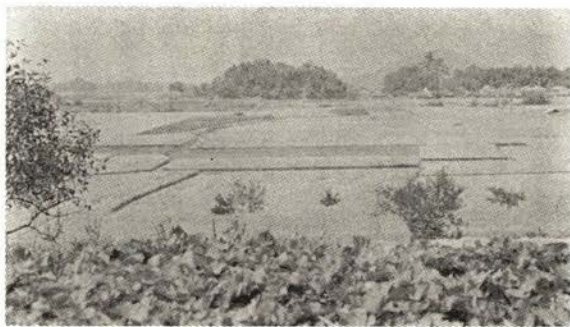
（最近「日本思想の系譜」で元田永孚もとたながさねの「幼学綱要」（明治十四年）を読んだ。そして第二「忠節」の項の逸話の最初に、この大伴部博麻の話が出てゐるのを知っておどろい

た。「幼学綱要」は、明治天皇のお考へによつて、元田永孚ながざねが編纂したもので、スマイルズのセルフ・ヘルプ「西国立志伝」に範をとつて作成した東洋倫理逸話集と言はれる。明治十四年のことである。私が驚いたのは、その年代のことではなくて、要するに、元田永孚やその頃の人たちは、白村江の敗戦をよく知つてゐたにちがひないといふことである。大伴部博麻を「忠節」の項の冒頭にかかげたのは、深い意味があつたのだと思ふ。しかしこの「幼学綱要」はやがて忘れられて、「忠孝」は旧時代の道徳とされるやうになるが、それとともに「白村江の敗戦」も近代の日本人から忘れられてしまつたのである。

### (三) 御船西征

「齐明天皇七年、春正月の丁酉の朔壬寅、御船西に征きて、始めて海路に就く」  
(岩波書店刊日本古典文学大系「日本書紀」の訓による) は、「日本書紀」の名文の一つで、これが白村江戦役の開始を告げる文となつた。





齊明天皇・後飛鳥岡本宮蹟

「齊明天皇」は第三十七代の天皇で女帝である。第三十五代の皇極天皇と同じお方で、第三十六代の孝徳天皇のあとを受けて再び皇位にお即きになった。「七年」といふのは、齊明天皇が即位なさってから七年目の意味で、「春正月丁酉朔壬寅」は、陰暦一月六日、太陽暦で二月十五日頃になるといふ。西暦六六一年のことである。「御船西征」とは、天皇の御乗船が百済救援の途に上った、文字通り御親征で、仲哀天皇・神功皇后（四世紀末か）以来の壮挙であった。「始めて海路に就く」は、前年十二月二十四日に天皇は後飛鳥岡本宮から難波宮に行幸なさってゐたので、いよいよ御乗船が出航したことを意味する。事実を簡潔に叙述してかへってその重大性を暗示するのが名文の名



文たるところである。かくして、神功皇后（四世紀末か）以来、短かく言へば継体天皇（五〇五年即位）以来、多年の懸案であつた朝鮮問題を一気に解決しようとして、文字通り国家の総力を挙げて西征の途に上つたのである。

時に女帝斉明天皇は御歳六十八。政戦両面の総指揮を執つたのは皇太子中大兄皇子で、御歳三十七。孝徳天皇元年（六四五年）皇太子となつて以来国政を総理して大化の改新を断行し、いま母帝斉明天皇に奏請して御親征を仰ぎ、皇太子としてこの西征に加はつたのである。皇太子として国政を執ること十七年に及ぶ、身分から言つても実力から言つても、経歴から言つても、すべて第一級の政治的統率者であつた。

次に大海人皇子。御生年が不明なので御歳は不明だが、中大兄皇子と同じく斉明天皇のお子さまであるから、皇太子より五、六歳の年少であらう。後の天武天皇で、中大兄皇子——後の天智天皇のアポロ的性格に対し、ディオニソスの、熱情的性格であつたと言はれる。当然この西征に加はつたにちがひない。大海人皇子の名はこの年の記事には見えないが、妃の大田姫皇子の名が出て来るので、皇子の存在が確認できる。

妃の大田姫皇子は、中大兄皇子の女で、臨月に近いお身体で船上にあつた。父皇子の

中大兄皇子が三十七歳であるから、二十歳たらずであらうか。

万葉初期の女流歌人となった額田女王ぬかだのおほきみが、同じく船中にあつたことは、あの有名な「熟田津にきたづ」の歌によつて知られる。井上靖の「額田女王」(昭和四十四年)は、当時すでに女王が大海人皇子のお妃で十市皇女の母であつたとしてゐるが、はっきりしたことはわからない。

天皇・皇太子・皇太弟、そのお妃の方々が西征の船団にあつたとすれば、その他の將軍・大臣等がすべてこれに従つたとみられるから、少数の留守居を除いて、大和朝廷は、朝廷を挙げて西征の行にのぼつたと推察される。

なほ、この戦役の歴史にはつきり名をとどめてゐる皇族、將軍たちの名を挙げると、皇族では伊勢王いせのおほきみ、將軍では阿曇比羅夫連あづみのひらふのむらじ・河辺百枝臣かはべのももえのおみ・阿倍引田比羅夫臣あべのひきたのひらふのおみ、物部連熊ものべのむらじくま・守君大石もりのおほいし・狭井連檳榔さみのむらじあじまき・奏造田来津はたのみやつこたくつ・上毛野君稚子かみつけのぬのきみわくこ・間人連はしひとのむらじおほふた・大蓋こせのかみさきのおみ・巨勢神前臣こせのかみさきのおみ・三輪君根麻呂みわのきみねまろ・大宅臣鎌柄おほやけのおみかまつか・廬原君臣いははらのきみおみ、みな將軍たちである。

中の、守君大石もりのおほいしは、前々年十一月の有間皇子ありまのみこの事件に連坐して、上毛野国に流されてゐた。既に許されて、この壮挙の將軍に拔擢せられたのであらう。阿部引田臣あべひらたの比羅夫ひらふは、

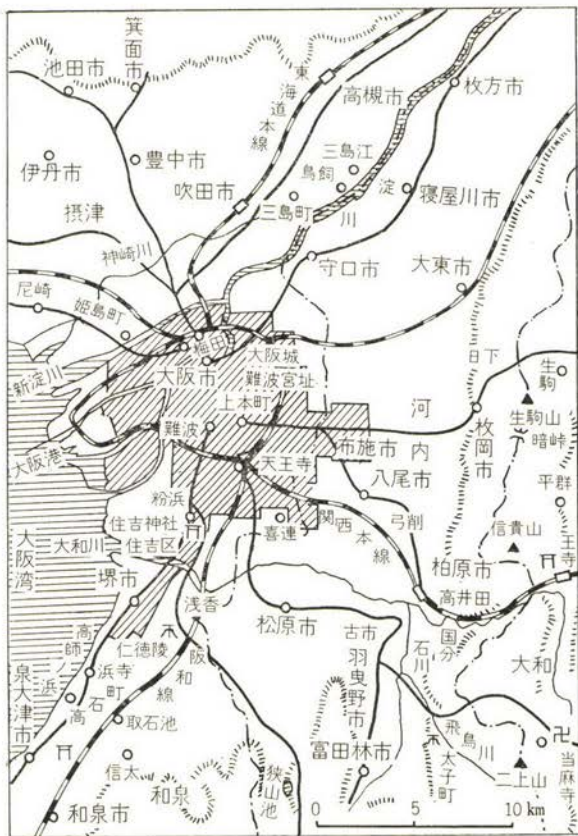
数年来、肅慎みしはせ、蝦夷えぞと戦つてゐた歴戦の勇将である。

当時の大臣は蘇我連そがのむらじ、内臣うちのおみは中臣鎌足なかとみのかまたり、この年の記事に名は見えないが、いづれも随行したものであらう。「鎌足伝」には鎌足が長津宮の皇太子中大兄皇子の側近にあつたことが記されてゐる。政戦両面にわたる参謀総長格であつたにちがひない。

#### (四) 難波津出航

天皇が難波なにはで本拠とされた宮居みやゐは有名な「難波宮」で、孝徳天皇の白雉三年（六五二年）遷都のあつた難波長柄豊碕宮なにはのながらのとよさきのみやである。後年、あの有名な長柄の橋の架けられたあたりであらうか。淀川よどがはの河口に近く、水陸交通の要衝で、秀吉の大阪城もこのあとの近くに築かれた。宮趾みやぢはいま発掘がつづけられてゐる。難波の港は「御津」と言つて、宮居みやゐの近く、難波江なにはえに面してゐた。天皇の御乗船はこの御津みづから出航したのであらう。

難波の御津みづの南方には住江すみのえの御津みづがある。これは大和川の河口で、近くに聖徳太子の建てられた護国の四天王寺してんのうじがある。また、神功皇后の三韓進攻の際、み名を現はされた



犬養孝氏「万葉紀行」より

水神、上筒・中筒・底筒の男神三神をまつる住吉神社もすぐ近くである。

船団は二手にわかれて一部はこの住吉の御津からも出航したのであるまいか。難波の宮にあった斉明天皇以下皇族官僚武将たちの中には、ひそかに聖徳太子創建の四天王寺に詣で、あるいは新羅征討のまもり神をまつる住吉神社に参拝した人たちもあったにちがひない。さうでなくても四天王寺の僧侶や住吉神社の神主たちは、遠征の成功に心からの祈りをささげたであらう。

御津を出る乗船の上から、雄大な仁徳天皇御陵を、またはるかに生駒山をふりかへり見ながら、一行は大阪湾を西へ向つたのである。

その日出航した将兵の数はどのくらゐであつたらうか。また軍船の数はどのくらゐであつたらうか。どちらも数が記されてゐないが、先例によつて少しは想像できる。

先づ将兵の数であるが、「日本書紀」によると、継体天皇紀の毛野臣の百濟救援の渡海の軍勢が「兵六万」とあり(五二七年)、欽明天皇紀に任那滅亡の直後(五六二年)「天皇、大將軍大伴連狭手彦を遣はして、兵数万を領めて高麗を伐たしむ」とある。次の出兵は、推古天皇八年(六〇〇年)二月で兵数「万余」、十年(六〇二年)「来目皇子を撃新羅將軍とな

し……軍勢二万五千を授け給ふ」とある。次に推古天皇三十一年（六三三年）「数万の兵を率ゐて以て新羅を征討ちたまふ」とある。

右の記録によると、最多六万最少万余である。齊明天皇の親征軍が最少以下とは考へられないが、外地での戦闘は二年後に行なはれたし、筑紫でまた兵を集めたであらうから、この時の兵数は、約二万とでもいったところであらう。二年後に玄海灘を渡海した兵数は二万七千と記されてゐる。

兵船の数についても同じで、筑紫で新しい渡海の船団を組むのであらうから、この時の出航の船の数は見当がつかない。しかし、前年の記事に、「是の歳、百済の為に新羅を伐たむと欲し、乃ち駿河の国に勅して船を造らしむ」とあるので、それなりの造船計画があつたことが知られる。

外征にどれくゐの兵船が従ふのか。これも「日本書紀」によつて、先例を見ると、欽明天皇十五年の救援軍は兵数一千、馬一百疋、船四十隻とある。しかし、これは救援のために送られた軍勢で主力となつたものではない。齊明天皇の御代は、三韓の問題とともに蝦夷の問題をかかへた時代で、四年夏四月、「阿部臣、船師一百八十艘を率ゐて蝦



夷を伐つ」とあり、五年にも同じ記事がある。六年には、三月、同じく阿部臣を遣はして「船師二百艘を率ゐて、肅慎国を伐たしむ」とある。

白村江の海戦について言へば、天智天皇元年に百七十艘をもって玄海灘を渡ったことが記され「大唐軍將一百七十艘を率ゐて白村江に陣烈（列）す」と言ひ「旧唐書」には「倭船四百艘を焚く」とあり、「三国史記・新羅本紀」には「倭船千艘」とある。これは敵国・勝利者側の誇張で、白村江の海戦そのものは、両軍のそれぞれ二、三百艘以下の兵船で戦ったのではなからうか。

さう見てくると、この日の難波の出航は、軍勢万余、船師百艘をこえると見られようか。国の総力をあげての出航である。中に天皇の御乗船は、それなりに美しく飾られて、この一挙に多年の懸案を解決しようとする朝廷の決意を物語ったであらう。

当時の出航の様子は、勿論記するところがない。しかし、この時から約百年後の天平勝宝七年（七五五年）「相替りて筑紫に遣はさゆる諸国の防人の歌」が「万葉集」に残されてゐて、わづかながら当時の面影を伝へてゐる。

八十国は難波に集ひ船飾り我がせむ日ろを見も人もがも（足柄の下の郡の上丁、丹比部國人）



はにわ女子頭部



はにわ武人



(国々の防人たちはいま灘波に集まって出航の準備の船飾りをしてゐる、私が船飾りをして出航する日も近い、その日の私の凛々しい姿を見ってくれる人がゐてくれればなあ！——故郷の父よ、母よ、はらからよ、村の人々よ！ やがて私は勇しく出てゆく、見ってくれる人はなくとも)

難波津なはづに装よそひ装よそひて今日けふの日いや出いでて罷まからむ見みる母ははなしに(鎌倉の郡の上丁、丸子連多麻呂)

(灘波の港で船の装備をつよけつよけていよ／＼今日といふ日に出航するのだ、見る母はみないが。)

難波津に御船下すゑ八十楫貫き今は榜ぎぬと妹に告げこそ（茨城の郡の若舎人部広足）

（装備した官船を難波の港に（浜から）おろし船腹につけた数多くの楫をあやつって今榜ぎ出した、と妻に告げてほしい。）

おし照るや難波の津より船装ひ吾は榜ぎぬと妹に告げこそ（信太の郡の物部道足）

（堂々たる灘波の港から船の装備を飾って私が榜ぎ出た、と妻に告げてほしい。）

常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して附けて妹に知らせむ（同）

（故郷の常陸の国さしてゆく雁がゐたらなあ！ 雁は手紙を運んでくれるといふから、わがこの恋ひの思ひをものに書き記して雁の足につけて妻に知らせたい。）

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は（火長、今奉部与曾布）

（今日から私は一身の上を顧慮して生命を惜しむことなく大君の御楯として出発する。）

白波の寄そる浜辺に別れなばいともすべなみ八遍袖振る（足利の郡の上丁、大舎人部弥麻呂）

（白波の打寄する浜辺に別れてしまへば、いつまたあへるか、どうにもしかたのないものだから、何遍も何遍も別れの袖を振って別れてゆくのだ。）

津の国の海のなぎさに船装ひ発し出も時に母が目もかも（塩屋の郡の上丁、丈部足人）

（津の国の海のなぎさに船を装備していまこれから出航してゆく時、母が見てゐてくれたならなあ！）

大君おほきみの命みことかしこみ愛うつくしけま子こが手て離はなれ島しま伝つたひゆく(助丁すけぢやう、秩父ちちぶの郡の大伴部小歳せとし)

く。  
〔天皇さまのお召しの言葉をうけたまはりかしこまて、愛する妻の手をはなれ、船に乗って島伝ひに旅行〕

防人の歌にふれたので、その時代的背景について多少の説明を加へてみたい。前にも述べた通り、この防人の歌が集録されたのは、天平勝宝七年（七五五年）で、白村江の戦役（六六三年）から約九十年を経てゐる。防人たちにとって、白村江の戦は遠い昔物語であつたらうか。当時の人は、教養が低かつたから、歴史など教はらなかつたらう——さう考へるのは、現代人の傲慢と言つてよい。何故なら、さう考へる人のなかで、それこそ何人の人が、この防人の歌のやうなすぐれた歌をよめるだらうか。防人の歌は、実に世界の奇蹟である。どこの国に、西暦七五五年代に、かくも多くの兵士たちの詩を残した国があつたらうか。これにはその兵士たちの名さへ残されてをり、妻の名さへも残されてゐる。そしてその数十首——約八十首が、みなすぐれた歌であつて、さすがに今日これを添削する馬鹿はゐないといふほどの表現力の所産であることから言つても、防人たちが歴史を知らなかつたとは言へない。この人たちの祖父は、白村江に従軍した

人であるかも知れないのである。白村江の戦役は、東国にも語り伝へられてゐたにちがひない。しかも、天平勝宝七年といふ年は、どういふ年であらうか。それは孝謙天皇御治世の二年（七五五年）である。二年前の四年（七五二年）九月には、盧舎仏開眼供養の儀式があつた。そして二年経つた七五七年には、太宰府の防人に坂東の兵士をあてることをやめ、西海道の兵士をあてたといふ。その二年後の七五九年（天平宝字三年）には、新羅征討の準備のため太宰府の警戒を厳にし、また諸国に船五百艘を造らせたとある。

前述の、難波から筑紫へ向つた防人たちは天平勝宝七年、七五五年の交代によるもので、果して彼らが二年間で西海道の防人によって交代させられたのかどうかわからないとしても、その防人たちが、四年後の新羅征討の話を全く予感しなかつたわけでもあるまい。また、この新羅征討は不発に終つたが、筑紫の人心の緊張は自から防人たちを通じて東国まで知られてゐたにちがひない。七五五年の防人たちは文字通り国防の第一線に向つたのであり、その自覚を持ってゐたにちがひない。だからこそ、あのやうな歌が生れたのである。そして、それより百年前の兵士たちの緊張も、同じ性質のものであつたらう。いはんやこのたびの壮挙は、老女帝斉明天皇自ら軍を率ゐて西征の途に上らせ



瀬戸内海航行参考地図

らるるものである。

(五) 渡津海の豊旗雲

少くとも百艘をこえる兵船はさらに幾つかの船団に分れて、難波の港を出航して行った。

難波津をこぎ出でて見れば神さぶる生駒が岳に雲ぞたなびく

(難波の港を漕ぎ出て、海上からかへりみると、神々しくそびえる生駒山には雲がたなびいてゐる。——別れを惜しむごとくに。)

ゆこ先に浪なとゑらひしるへには子をと妻をと置きてともきぬ

(前途には浪の音がさわぎ、かへりみればわが家に子どもと妻とを置いて出発してきたのである。)



西征天皇明天齊

七五五年交代の防人中のまたある兵士は長歌  
 さへ詠んだが、百年前の六六一年の出航には、  
 多くの兵士はまだそのやうに、感動を自由にあ  
 らはすすべを知らなかったらう。船うたや、故  
 郷の民謡である東歌などをうたつて、心を遣つ  
 たであらうか。

足柄あしがらのみ坂さかたまはり 願かへりみず

我われは越くえゆく。

荒あし男をとこも 立たしや憚はばる 不ふ破はの関 越くえて

わは行く。

馬うまの蹄つめ 筑紫つくしの埼さきに 留ちまり居ゐて

吾われは齋いははむ。

諸もろは 幸さいくと申まをす 帰かへり来くまでに。



御乗船は、太陽曆二月十五日やゝ春めいて来た茅渟の海（大阪湾）を渡って、敏馬（神戸市の東方の海岸）を過ぎ、灘、武庫、和田岬を過ぎて、明石の大門（明石海峡）にむかった。明石海峡をすぎれば、大和の国とも別れである。後年、人麿の歌った感激は、この人々の感激でもあったらう。

ともし火の明石大門に入らむ日やこぎわかれなむ家のあたり見ず

（やがて明石海峡に入ってゆくが、その日には、故郷の大和の家も見ずに、漕ぎ別れてゆくのだ。）

なぐはしきいなみの海の沖つ浪千重にかくりぬ大和島根は

（名も美しい稲見の海の沖に立つ浪また浪のかなたにかくれて見えなくなってしまった、大和の国は。）

大君の遠のみ門とあり通ふ島門を見れば神代しおもほゆ

（大君の遠い朝廷である筑紫の国の太宰府とゆき通ふ内海の過ぎてゆく島々の間を見ると、この島々を造りなした神代のごしがしのばれる。）

船はやがて、加古川の河口をすぎた。洋々たる幡磨灘を南に見て、船は、家島の北に入り、幡磨の国・楯保川の川口の御津に停泊した。日はすでに西に落ちかゝって、豊旗雲がたなびいてゐる。



天皇の御乗船にあつた中大兄皇子は、軍船の舳先に立ち、はるかに西の方を望んで、  
洋々たる前途に想ひをはせられるのであつた。

わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜まさやかにこそ

(海原の沖辺にたなびいてゐる大きな旗のやうな雲に入日がさしてゐる、今宵の月はまさやかに照らすにちがひない。)

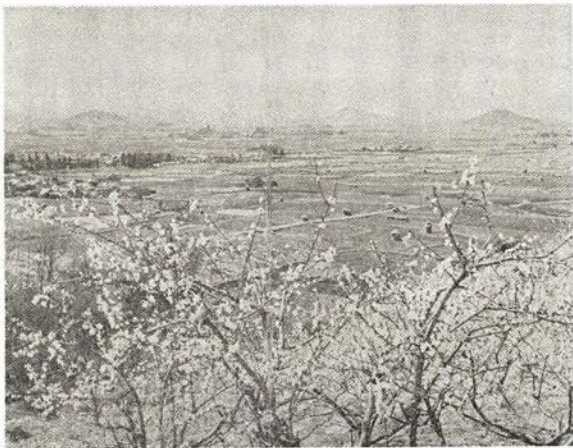
今宵の明月を信じる心は、遠い未来への希望でもあり、明るい決意でもあつた。

西下への寄港地である幡磨の国・御津に停泊した皇太子は、ここでまた不思議な昔話を聞かれた。それは遠い神代の物語で、こんな話であつた。

昔々、神々の時代の物語で、大和の国の三山——香具山・畝火山・耳梨山の三山——の間に争ひが起つた。香具山は畝火山が可愛いと言ひ、耳梨山はまた畝火山を諦めることができな。香具山と耳梨山と相争つて、遂に決闘することになった。この事を聞いた神々は大層心配なさつたが、殊に出雲国の阿菩大神は、大和の山々の争ひによつて国内の平和が破れることを心配なさつて、出雲から船に乗つて出て来られた。ところが、この幡磨国の印南平原まで来られた時、三山の和解が成立したといふこと

を聞いて、そのまま乗って来られた船をひっくりかへして、そこにお鎮まりなさった。これが、印南野の出来た由来で、台地になってゐるのは、阿善大神の御乗船を伏せた形になつてゐるからである。

この話は、幡磨の国に古くから伝はつてゐる昔話で、わかつたやうなわからぬやうな話であつたが、皇太子はこれを聞いて心を動かされた。心を動かされたと言つても、お顔や表情にあらはすお方ではない。もちろん感想を語られたわけではない。しかし一首の長歌が残された。それを讀むと、皇太子が、この昔話から、神話と歴史と現実とを一つにむすぶ人生の真理とでも言つたものに気づかれたことがわかる。しかも、それは、皇太子御自身の問題でもある、額田女王をめぐる、弟君大海人皇子との辛い三角関係といふ、にがい経験をふりかへつてみてのことであつた。歌そのものも無表情で、「渡津海の」歌のゆたかな情感の表現とは似ても似つかぬものである。冷徹とでもいふやうな、鋭く乾いた人生鑑照である。皇太子にはかういふ一面があるらしい。それが最愛のお妃の堅塩姫を死に追ひやつた御性質でもあるし、有間皇子を死に至らしめた御性格でもあつたらう。兄弟で一人の女性を争ふといふ、にがい経験を、肯定するでもなく、否定する



大和の三山（左より香具・畝火・耳梨の順）

でもなく、他人言のやうに歌に詠じて、そこに人生の真実の姿を見つめるといふ諦観と、いま西征の途についた未来への大きな希望とはどういうふうに結びつくのだらうか、——それは私にはよくわからない。しかし、この長歌は、明らかに、聖徳太子の国史編纂以来の日本歴史哲学を宣明したものであって、皇太子の胸中に、神功皇后の遠征が生き生きと脈うってゐたことを推察せしめる。新時代の維新政治の指導者の胸中には、はっきりと大和の伝統が思想として生きてゐたのである。皇太子の

御歌にはふれられてゐないが、幡磨の御津は、神功皇后の遠征の寄港地でもあった。

三山歌  
さんざんのうた

香具山は敵火を愛しと 耳梨と相あらせひき。

神代よりかくなるらし。

いにしへもしかなれこそ、

うつせみも妻をあらせふらしき。

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南國原

御船は、幡磨の御津を出て、赤穂の御崎をすぎ、小豆島の北を進んだ。大伯海である。皇太子中大兄皇子の御長女で大海人皇子のお妃であった大田姫王は、俄かに産気づいて、船中で女兒をお産みになった。大伯海にちなんで大伯皇女と申上げる。

この日、皇孫の御誕生に、全軍は、神功皇后の皇子御誕生のことを思ひおこして、振ひ立ったことであらう。

後日の話になるが、大田姫皇女おほたのひめみこには、この翌々年、娜大津なのおほつ（博多港）で大津皇子おほつのみこがお生れになったが、白村江戦役の戦後、天智天皇六年、幼いお二人の姉弟君をのこしておなくなりになった。持統天皇はこの大田姫皇子の妹君で、当時、同じく大海人皇子のお妃として御西征に随ひ、やはり娜大津で草壁皇子くさかべのみこがお生れになってゐる（六六二年）。一歳違ひのこのお二人の王子が、皇位継承問題の渦中にまきこまれた運命は、このときにはじまるのである。

幼くして母妃を失はれた大伯皇女、大津皇子のお二人は、成人の後、叔母君せぼに当る持統天皇の御代になって、大津皇子が「死を賜はる」こととなる。万葉集に残された大伯皇女の悲歌は、弟君の運命に寄せる姉君の限りない同情を歌はれた絶唱である。

大津皇子の、伊勢いせの神宮かみのみやに竊ひそかに下りて上り来きましし時、

大伯皇女の作りませる御歌みうた二首

わが背子せこを大和やまとへ遣やるとさ夜よふけて暁露あかときつゆに吾わが立ち濡ぬれし（万葉集歌番号一〇五）

（わが弟君を大和の国へ帰すのを送って、夜明の露に立ち濡れたことであつた。）

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

（二人で行ってもさびしさに堪へない秋の山をどんな思ひであなたは一人越えてゆくことであらう。）

西征にしたがったお若い皇太子中大兄皇子、大海人皇子、お妃たち、生れたばかりのそのお子さまがたにこのやうな悲しい運命があらうと誰一人知る人はない。皇孫御誕生に歓呼をあげて船団は西下をつゞける。

（六） 熟田津にぎたづに船乗ふなのりせむと

さて、「日本書紀」にはつゞいて「庚戌かのえいぬ御船みふね、伊予いよの熟田津にぎたづの石湯いはのゆの行宮かりみやに泊はつ」とある。「庚戌」は「かのえいぬ」の日、すなはち旧暦一月十四日であるから、西征の大船団は、一月六日難波大阪出航、八日大泊おほくのうみ海を過ぎ、十四日道後温泉の近くの熟田津に停泊し、行宮かりみやに宿泊することになったのである。

万葉集卷一の名歌

熟田津にぎたづに船乗ふなのりりせむと月待てば潮しほもかなひぬ今は漕こぎ出いでな

（熟田津に停泊して出航の日のために月明の夜を待つてみると、月も潮も船出に都合がよくなっ



た。さあいよ／＼船を漕ぎ出さう。

は、額田女王の作とされてゐるが、万葉集の編者は、特に註を付して、山上憶良の「類聚歌林」(今日残らない歌集)を引用してゐる。それによると、憶良は「日本書紀」の原文を引用して、この歌をもつてこの時の齐明天皇御製の歌なりと論じてゐる。四句切れて休止があつて、結句「今は漕ぎ出でな」の字余りの壮重な調べは、前途の難関に対する重い緊張感のあらはれで、大船団の出航の決意にふさはしい。

「日本書紀」にはこれにつゞく記事に「(三月二十五日)御船還りて娜大津に至る」とある、この「還りて」について、「日本古典文学大系」の「日本書紀」の頭註に「熟田津は寄り道。本来の航路に戻つての意」とある。この「寄り道」とは何のための寄り道か。航路上か、戦略上か、戦備の上のことか、私にはよくわからないが、熟田津は「伊予の湯」(道後温泉)の港であることを考へると、「寄り道」は単なる天皇の思ひつきとは考へられない。「伊予の湯」は、聖徳太子が行かれたといふ伝承(伊予温湯碑文——积日本紀引用・伊予風土記逸文)があり、齐明天皇は夫君舒明天皇に伴つてここに遊ばれたことがある。

(「万葉」左註の「類聚歌林」および「伊予国風土記逸文」)かくて、山上憶良の「類聚歌林」は、こ



の時、この行宮に昔のまゝ残つてゐた品物を齊明天皇が御覧になつて、忽ちたちま「当時を感愛する情を起」されて「歌詠を製して哀傷したまひきといへり。すなはちこの歌は天皇の御製なり」とする。

額田女王が「西征」に参加してこの船団にあつたことは、大田姫皇女の場合から考へても当然のことであるから、この歌が額田女王の作であることを否定する材料は見つからない。また、殊に齊明天皇は、この歌の他にもすぐれた御歌をのこしてをられるので、齊明天皇の作であることを否定する材料も見つからない。万葉歌人輩出以前の草創期であるから、短歌の詠み方の個性によつて作者を判別することはむづかしい。私にはわからない。したがつて万葉編者が、この歌を額田女王の作として万葉集にかゝげ、註として、憶良の「類聚歌林」の齊明天皇作の説をあげた、それ以上の判断が私にできるわけもない。しかし、いづれにしる、山上憶良がこの歌を、齊明天皇七年の西征途上の作と考へたことは事実であるから、この歌が重大な決意を潜めた緊張した情景の表現であるとするのは間違つてはあまい。私はこの作を「楽しげな女官の船遊びの作」とする考へ

(山本健吉、池田弥三郎両氏著「万葉百歌」には反対である。

齊明天皇がこの時、夫君舒明天皇と曾遊の思ひ出に深刻な感慨を催されたといふことは、国運の重大時機に際しての緊張感と表裏するものであった。もしあるいはこの時齊明天皇が、舒明天皇と愛情の思ひ出のためにのみ曾遊の「伊予の湯」に「寄り道」せられたとしても、とがめることはできないはずである。故郷の氏神に詣で、あるいは故郷の父母や愛する人の墓に詣で、あるいは思ひ出の曾遊の地を訪ね、それを記念として出征した兵士のかなしき心に通ずるものを、齊明天皇のお心に感ずることができからである。

沢潟久孝博士は名著「万葉集講話」（昭和十六年）に、この歌の日時を、齊明天皇七年正月二十三日（太陽暦の三月二日）午前二時頃の満潮時とし、「有明の月で、既に真夜中を過ぎて、それこそ漆を流したやうなまっ黒な闇に、半月の光がさしそめた光景になる」と考証してをられる。むしろ悲壮な感さへもさそふ大軍船団の出航の時である。

先年私はこの熟田津のあとをたづねてみた。当時の名は残ってゐないが、万葉学者の間では、松山の外港ともいふべき三津浜みつか高浜たかがこれに当るだらうと言つてゐる。高浜のとなりが三津浜でどちらでもよささうに見えるが、三津浜の「三津」は「御津」の意味

であらうから、熟田津は元来は官船の寄港地であったにちがひない。すぐ前に、興居島ごじまを控へて、見るからに良港である。

ちなみに、今上天皇の名歌、

静かなる潮しほの干潟ひがたの砂ほりて求めえしかなおほみどりゆむし

は「興居島にて」と詞書がある。渡ってみたかったが時間がなくて行けなかった。

ここから伊予灘いよなだを通過して周防灘すほうなだへ出るのか、あるひは島々の間を縫かみって上の関せきへ出たのか、私にはわからないが、要するに瀬戸内海の航路といふのは、島々の間を縫かみってゆくものであることが、行ってみるとよくわかる。だから、潮流が航路に大きな影響を持つ。その代表が壇浦だんのうらの海戦で、潮流が海戦の勝敗を決きめたとさへ言はれるのはこのためである。源平時代でさへさうなのだから、六六一年の当時はなほさらである。額田女王の歌の「潮もかなひぬ」には深い意味がある。瀬戸内海の沿岸の港では、「潮まち」といふ言葉さへある。島と島との間の海流は、瀬戸内海そのものの干満によって、大きく影響されてゐて、潮流に逆さかって舟をやることは、大変むずかしいことである。「月待てば」も同じで、月夜でなくては夜の航海は無理なのである。島影が見えなくなつては、

船を進めることができなくなる。「月待てば潮もかなひぬ今はこぎいでな」には、それなりの実感がこもってゐることが現地に立つてみてよくわかった。

## (七) 朝倉の宮

御船が松山の熟田津を發したのは、前述の通り、沢瀉久孝博士によると、旧曆正月二十三日のことである。そして娜大津(博多港に)到着したのが、三月二十五日である。熟田津から娜大津まで約二ヶ月かかつてゐる。その間のことについては「日本書紀」は何も語ってくれない。

天皇は磐瀬いはせの行宮かりみやに入られた。磐瀬は今の福岡市博多の三宅みやけの地といふ。娜の大津に近い行宮に落ち着かれたのである。「娜」は「那」と同じである。

那の津はいまの博多港で、那の国の港の意味である。海外——つまり中国、朝鮮との航路の発着点で、那の大津ともいはれる。

略図によってわかる通り、志賀島と能古島で囲まれた天然の良港である。玄海の荒浪



西征天皇明齊・北九州参考地図

は、晴れた日にも、志賀の島から海の中道の北岸に寄せて岩礁に飛沫をあげてゐるが、湾内には浪も立たない。

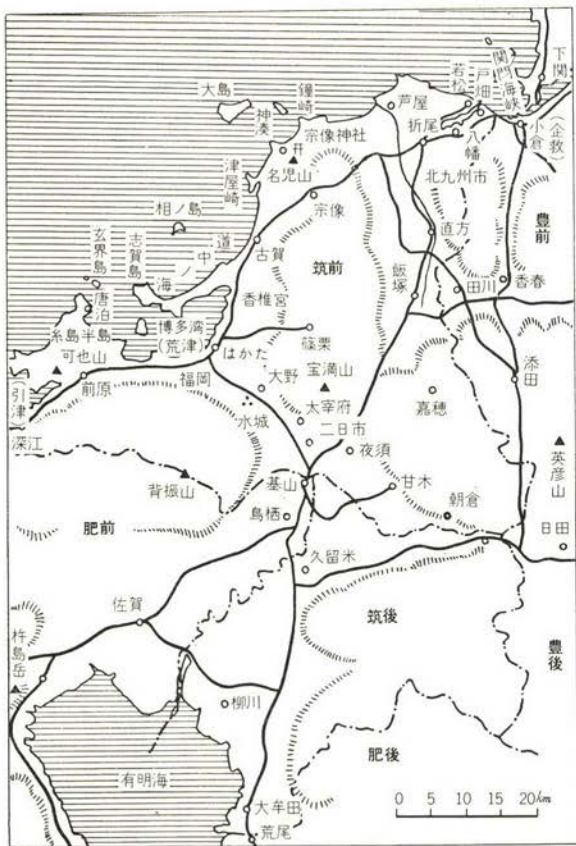
能古島の北端が矢良崎で、万葉に

沖つ鳥鴨かもとふ船の還り来こば  
也良やらの崎守さきもり早くつげこそ

(志賀の白水郎の歌十首のうち)

(沖に浮ぶ鴨にも似た船——わが恋ふる人の乗った船が還って来たら、也良の岬を守る防人よ、早くつげて来てほしい。)

と歌はれたところである。



犬養孝氏「万葉紀行」より





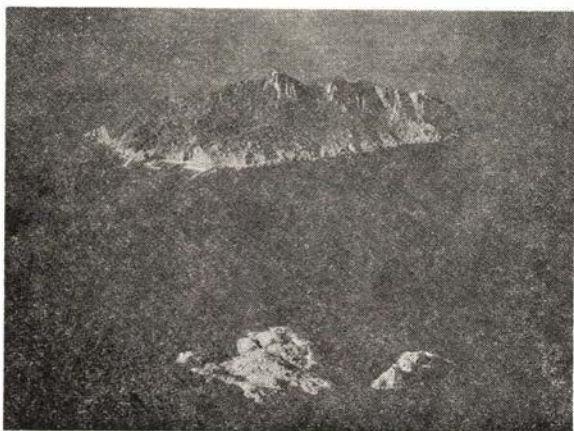
志賀島Ⅱの・図

海外との交通に従事した船舶は、古代からこの矢良岬と志賀島との間を通って那の大洋に出入したものであらう。

志賀島は志賀の荒雄の歌で有名だが、その南端はまた有名な金印の発掘地でもある。東岸の志賀海神社は古来阿曇氏の祭るところで、宮司はいまに阿曇氏を称する。齊明天皇征西の水軍の指揮者と見られる阿曇の連比羅夫なども、この志賀島を根拠地としてゐたのではあるまいか。

志賀島の外側には玄界灘に面して宗像神社がある。それは辺つ宮で、大島に中つ宮があり、遠く沖の島は奥つ宮の所在として古代から神聖な土地とされてゐた。最近大規模な発掘が行なはれて莫大な遺物が発見された。海の彼方へ向ふ船はここで航海の平安を祈った、その祭祀の遺跡と目されてゐる。湾内に面して、北に香椎神宮がある。古く香椎廟と言はれて、仲哀天皇の三韓征討の本営の地があったとされてゐる。





島の神神社像宗

仲哀天皇崩御の地であることはまちがひないやうである。

神亀五年（七二八）大伴旅人おほともたけとら太宰府の長官たちがこの廟に参詣して帰途詠んだ歌が万葉集卷六に残ってあるところを見ると、それから約七十年前の齊明天皇征西の折にも、すでに香椎廟は存在したのではないかと思はれる。少くとも仲哀天皇崩御の地として語り伝へられてゐたにちがひない。齊明天皇七年当時の人々の感慨をさそつたであらう。

神功皇后の三韓征討にあらはれた住吉の社にまつる海神の三神はまた那の津の近くにもまつられてゐて、住吉神社として残さ



那の津地図

れてゐる。神功皇后にまつはる伝説地の宇美も那の津の近くである。太宰府の経営や水城みづきの建設は天智天皇の国防政策であり、観世音かんだいおん寺は天智天皇が齐明天皇を追念して建造に着手なさったと言はれてゐる。いづれも那の津から、齐明天皇の行宮あんぐう、朝倉あさくらにある橘広庭宮への道筋にある。

博多湾の西にある湾

は今津湾であるが、その西岸の唐泊には、聖徳太子の時の撃新羅將軍久米皇子をまつる久米神社がある。久米皇子はこの地に陣歿されたのである。齊明天皇七年をさかのぼること約五十年のことであるから、当時の人々に忘れられてゐたはずはない。

五月九日、天皇は磐瀬の行宮から朝倉の橘広庭宮に遷られた。那の天津から南へ、後の太宰府、二日市温泉をすぎて、約二十キロはあらう。海岸から遠く入って、筑後河の流域である。

「是の時に、朝倉社の木を斫り除ひて、此の宮を作る故に、神忿りて殿を壊つ。亦、宮の内に鬼火見はれぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近侍、病みて死れる者衆し。」

〔日本書紀〕

とある。天皇の側近に流行病で倒れる者があひついたのである。流行病は当時神罰としてうけとられた。

○

何故またこんな奥地まで遷らなければならなかったのだらうか。ひろくと開けた筑後平野の村々をバスでたどりながら、同行の広瀬誠君とこの疑問を話し合ったが、結局

は、那大津は唐・新羅の襲撃があつた場合危険だからだらうといふことになった。あるいは、長期滞留の準備のためであつたかも知れない。この時まで日本は大陸・朝鮮軍の北九州侵入を考へたことはなかつたらう。しかし、今度は、相手が唐・新羅の連合軍である。しかも同盟国百済が亡びたのである。倭が安泰であると保証するものはない。

「日本書紀」には齊明天皇五年九月、百済の達率（百済官位十六品の第二位）某と沙弥（僧）覚従らが、百済の滅亡を伝へてゐるが、相手が唐・新羅連合軍であつたことも知られてゐる。冬十月には、百済の佐平（同前第一位、大臣級）鬼室福信が佐平貴智らを遣はして、唐の俘（とりこ）百人を献じてゐる。そして救援を求めたのであるから、日本が百済救援軍を送るとなれば、唐と新羅との連合軍と戦はねばならないことは充分にわかつてゐたはずである。唐がいかなる大国であるかも、唐の將軍が名将蘇定方であることも、百済王義慈、その妻恩古、その王子隆たちが、大臣たちとともに捕へられて唐の都に送られたことも、情報が入つてゐたのである。

かうした情報を充分に考慮した上で、大本營を那大津から後方に引いたのであらう。遣唐副使伊吉博徳が唐の戦備についての情報を筑紫の朝廷にもたらしたのは、七年の五



橋広庭宮・朝倉宮の蹟

月二十三日のことで、これは朝倉の宮に遷られて（五月九日）から後のことである。

(八) 伊吉博徳の記録

「日本書紀」の齐明天皇七年五月二十三日の記事に、耽羅——いまの韓国の济州島——が始めて王子阿波伎たちを遣はして貢献した、と書いてある。

济州島は朝鮮半島の西南海上に浮ぶ朝鮮第一の島で、日本、南鮮、南中国を結ぶ位置にある。元来、百済の勢力下にあつたが、百済が滅亡したので、日本に接近したのであらう。王子阿波伎といふ日本語のやうにも見える名の王子につ

いては記すところがない。

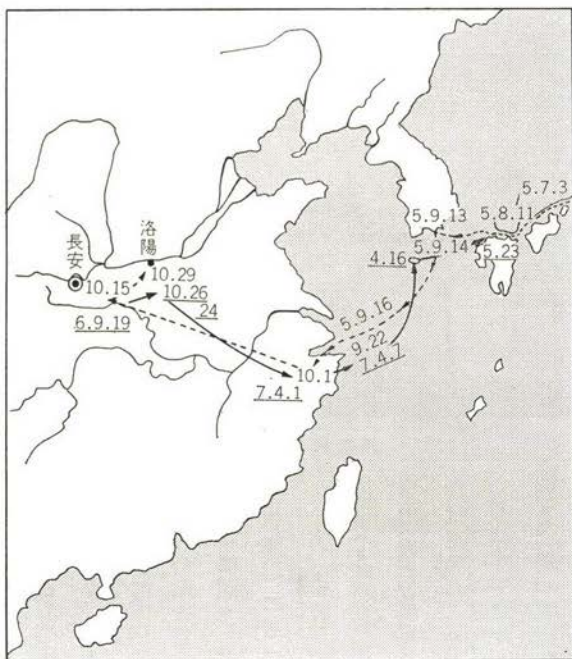
ところが、書紀本文の右の記事は、註として、伊吉連博徳の書をあげてゐる。この伊吉博徳といふ人物は、斉明天皇五年秋七月出発の第四次遣唐使に随行して、七年五月のこの時帰朝した官吏であった。後、しばしば外交的折衝の場に登場し、遣新羅使に任命され、また大宝律令の編纂者に任命され、その功によって田戸を賜はる等、当時の内外の重大時機を身を以て体験した人物であった。伊吉は壹岐とも書かれ壹岐島を領する豪族の出身であらう。博徳は唐風の名である。生年歿年ともに不明であるといふことだが、第四次遣唐使の随行記をのこしてゐて、「伊吉連博徳書」と言ひ、「日本書紀」の記事にとられてゐる。

この「記録」は書紀本文の各所に挿入してあるので、そのままでは一貫した調子がわからないが、各所から抜き出して通読して見ると、当時の一人物の体験記としておもしろく、また当時の国際関係もある程度想像できる。ここに現代語訳をかゝげてみよう。

○

齊明天皇の世に、小錦下（小しょうきんげ）（（二）從五位相当）坂合部石布（さかひぶのいしきよ）（連）・大山下（だいせんげ）（（二）從六位相当）津守（つもうり）の吉





伊岐博徳遣唐往復図

祥(連)等の二船が、吳唐の路(＝南路直行)につかはされた。

齊明天皇五年(六五

九)七月三日、灘波(大

阪)の三津(御津)の浦か

ら出航した。八月十一

日に筑紫(福岡)の大津

(博多港)から出航、九月

十三日、百済の南海岸

の島に到る。島の名は

分明でない。十四日の

弘暁、二船は相従って、

大海に放れ出た。





長安城北門を望む

十五日の日没の時、石布連いしきのむらじの船は逆風に遭あつて、南海の島に漂着ひょうちやくした。島の名を爾加委かみといふ。島人のために滅された。そこで、東漢やまとのあやのがなあたひあり・長直ま・阿利麻ま・坂合部い・連なつみ・稻積いなつみら五人は島人の船を盗んで、逃げて括州くわくしゅう（今の浙江省麗水）に到った。州県の官吏がこれを洛陽（唐の東都）に送った。

一方、吉祥連きさのむらじの船は、十六日の夜半の時、越州えつしゅう（杭州湾南岸）の会稽県かいけいけん（浙江省興紹）の須岸山がんざん（舟山列島須岸島か）に到る。東北の風、風はなはだ急はやし。（会稽は奇しくも魏志倭人伝の会稽東治の地である。）二十二日、余姚県よやう（浙江省余姚）に到る。乗つてゐた大船及び諸調度品をそこに留め置いた。閏十月一日、越州えつしゅうの底もと（州の役所

か)に到る。十五日、馭馬に乗って京(長安)に入り、二十九日、馳せて東の京(洛陽)に到った。天子(第三代高宗)は東の京に在します。

三十日、天子に謁見。天子が訊ね問ひたまふに、

「日本国の天皇、平安にますや否や」と。(日本国の天皇とは言はれなかつたらう。「倭国の王」とでも言はれたのを博徳の記録の上で改め書いたものであらう。)

使人(吉祥連か)謹みて答へ申し上げることは「天地徳を合せて、自づから平安なることを得てをります」と申す。

天子、問ひてのたまふ、

「事を執る卿(大臣)等、さきく侍りや否や。」

使人、謹しみてお答へ申上げるに、

「天皇めぐみたまへば、亦、好在ことを得てをります」と申上げる。

天子、問ひたまふ「国内は平かなりや否や」と。

使人、謹しみてお答へ申しあぐ、「治、天地に称ひて、万民事無くすごします」と。

天子問ひたまはく「此等の蝦夷の国は、何れの方に在りや」と。

使人、謹みて答へまうさく「国は東北に有ります」と。

天子問ひたまはく「蝦夷は幾種か」と。

使人謹みて答へ申す「種類は三種あります。遠き者を都つ加留かると名づけ、次を鹿蝦夷あらかみしと名づけ、近きを熟蝦夷にぎやみしと名づけます。今ここに連れて来ましたのは熟蝦夷でございます。毎年、本国の朝廷に入貢します」と。

天子問ひたまはく「その国に五穀ありや」と。使人謹みて答へ申さく「無し、肉を食ひて生活します」と。

天子問ひたまはく「その国に家屋ありや」と。使人謹みて答へ申さく「無し。深山の中に於て樹の下に住みます」と。

天子重ねて曰はく「朕、蝦夷の身体と顔の異様なを見て、とてもおもしろいとおもった。使人らは遠く来て疲れたであらう。退出して館に居れ。後また逢はう。」と。

十一月一日、唐朝に冬至を祝ふ祝典があった。祝典の日にふたたび天子に見えた。参朝した諸外国人の中で、倭国の客が最も優秀であった。しかし、その後、出火の騒動があったため、忘られてしまって、検証されることはなかった。

十二月三日、(留学僧)韓智興(倭国人)の倭人である西漢大麻呂が我ら倭国からの使節を讒した。ために使人らは罪を唐朝に獲て流罪に決した。先づ智興を三千里(流刑最重刑)の外に流した。使人の中に伊吉連博徳——私が居て、事情を奏上した。そこで、罪が許された。

右の事件が終つて後、勅旨があつた。曰く、

「国家(唐)、来らん年に必ず海東の政あり。(すなはち朝鮮征討の軍を挙げる。)汝等、倭国の使者は東帰してはならぬ。」と。

遂に、西の京(長安)に監禁して、別々に幽閉した。戸を閉し周囲を囲つて、東西することを許さなかつた。困苦すること年余にわたつた。

翌庚申の年八月、唐が百済を平定して後、九月十二日、使者の本国に帰るを放された。同月十九日、西の京より出発、十月十六日、東の京洛陽に至つて、はじめて阿利麻ら五人と会ふことができた。

十一月一日、將軍蘇定方(百済征討の將軍)らのために捕虜とされた百済の王(義慈王)

以下、太子隆りゆうら諸王子十三人、大佐平沙宅千福たいさへいさたくせんふく・国辨成こくべんじよう以下三十七人、合計五十数人の百済の人士が、朝廷に差出された。たちまち引率されて天子の前に出された。天子は恩勅して、天子の現前にして釈放なされた。

十九日、使者らを慰勞され、二十四日、東の京より出発した。

辛酉の午（齊明天皇七年）正月二十五日、越州に到り、四月一日、越州より出発して東に帰る。七日、櫻岸山せいがんざん（須岸山か）の南に到る。八日の鶏鳴の時、西南の風に順ひ、船を大海に放つ。海中に進路を見失ひ、漂蕩たひよひ、辛苦した。

九日八夜にして、やつのことで耽羅たむら（済州島）の島に到った。そこで、島人王子阿波あは岐きら九人を勧誘して、使者らの船に載せて、帝朝みかどに献らんとした。

五月二十三日、朝倉の宮の朝廷に奉った。耽羅の人の入朝は、此の時にはじまる。

以上で記録は終つてゐる。多少説明を加へよう。

博徳つものりら、津守吉祥つものりきさのむらじ（連）を主班とする遣唐使に謁見を賜つた唐の天子は、前記の通り第

三代高宗皇帝であつた。この時、高宗は種々の質問を出してゐるが、これより七年前第三次遣唐使が謁見した際にも、東宮の監門・郭丈拳かくじょうけんをして、「悉く日本国の地理及び国初の神の名」を問はしめたと、「日本書紀」に書いてある。

この第三次遣唐使は、孝徳天皇の白雉五年、大化改新政治の指導者である高向玄理たかむけのくろまろを押使おしし（大使の上位にある総裁）、小錦下河辺臣麻呂しようきんかへのおみまろを大使とする堂々たる陳容であつたが、玄理はじめ数人が唐で死ぬといふ悲劇的な遣唐使であつた。

郭丈拳の問に対して、「皆、問に随ひて答へつ」とあるから、ありのまま答へたのであらう。高宗の永徽五年で、「唐録」といふ書物に、この年「倭国使者が虎珀と瑪瑙を献じた」とあり、

「高宗、之を劓撫きつがし、仍て云く、王の国、新羅・高麗・百済と接近す。若し危急あらば、宜しく遣使して之を救ふべし、と。」

とある。あとの方の意味は解しがたいが、高宗は、当時すでに太宗以来の高句麗の征服にとりかゝつてゐたので、倭国に対する関心が深かつたにちがひない。永徽五年といふ年は、新羅の女王金真徳きんしんとくが薨じて、高宗は詔して、その弟金春秋きんしゆんじゆうを立てて新羅王とし



た年である。やがてこの金春秋きんしゆんじゆうが高宗と結んで百済を滅し、日本を敗る。しかも金春秋は孝徳天皇大化三年、高向玄理の要請によって人質として日本に来たことが「日本書紀」に見える。五年、金多遂きんたすいと交代したらしいが、書紀には「春秋は、姿顔しがん美しくして善みて談笑す」とあるから、美貌の快男子として日本人に親しまれたのであらう。高向玄理は、新羅の人質を要請する使者として新羅に行き、金春秋を連れて帰国してゐるから、二人の間に面識のあったことは言ふまでもない。

高向玄理は小野妹子を主班とする遣隋使に随行した留学生である。「東天皇、西皇帝に白す、云々」の国書を隋の煬帝ようたいに奉呈した時の一行の中にゐて、後、舒明天皇の十二年帰国、大化改新には僧旻みんと二人、国博士となり、この二人の指導のもとに八省・百官の制が設けられることになった。当時の政治・外交上の最高顧問の地位にあつたと思はれる。僧旻みんは病に死し、玄理は、遣唐押使となつて唐に到つたのである。単なる文化の移入が目的であつたとは思はれない。外交上の折衝が目的であつたであらう。具体的にはわからないが、東亞細亞の緊張緩和が渡唐の目的であつたであらう。

さう考へてくると、この遣唐使に対する高宗の質問の重大さもわかるし、その間に答



へた彼らの返答の重大さも想像できる。しかも、そのあとにすぐつゞけて、「押使高向玄理、大唐に卒ぬ」とある一文は、何か無気味な事実を語るやうに思はれる。

新羅の人質となって日本に來た金春秋が、唐の後援を得て新羅王となり、その金春秋を人質に連行したと見られる高向玄理が遣唐押使として唐において客死したのが、同年であるといふことは不思議な因縁である。

これで、大化改新のブレインとなった、僧旻、高向玄理すでに無く、南溟請安も病死したらしい、といふわけで、唐朝の廷臣に直接面識のある外交通がなくなつたわけである。

博徳らが高宗に謁見したのは、高宗の顯慶四年閏十月三十日のことといふから、唐の百濟征討のことは決定してゐたにちがひない。

高宗の永徽六年、百濟が高句麗とともに新羅の北境を侵略したため、新羅王金春秋は唐に救援を求め、唐は程名振・蘇定方をして高句麗を攻略させたが、致命的打撃を与へることが出来なかつた。

その頃から、政策的転換が計られたらしく、唐は新羅と連合して先づ百濟を討ち、高

句麗を挾撃する態勢を作らうとした。これが唐の百濟征討の戦略で、博徳らを唐に留めたのは、この計略が百濟の同盟国ともいふべき倭国日本に洩れること、そして百濟に洩れることを恐れたのであらう。「唐書」によるとこの戦略転換を奏上したのは、劉仁軌であるといふ。

高宗の戦略は成功して百濟は滅亡し、遣唐使は幽囚を解かれるが、帰国する遣唐使に百濟王らの洛陽における処遇を見せたのは、唐の日本に対する示威運動にはかならない。百濟の義慈王は終始親日政策を採ったが在位二十年で亡国捕虜の悲運を嘗めた。その王子豊は人質として日本にあったので、父義慈王はひそかに望みを日本に託したかも知れないが、その年洛陽に薨じた。亡国捕虜の悲運に堪へられなかつたのであらう。王とともに洛陽に連行された王子隆は、唐朝に仕へ、後百濟を管理する唐の役人となったが、結局百濟をも追はれてふたたび唐朝に戻った。そして洛陽に薨じたのである。近年墓誌が洛陽で発見された。

博徳の記録には、義慈王および王子隆たちが、高宗の面前で釈放されたと書いてあるが、「資治通鑑」の「唐紀」には、高宗が則天門の楼上から百濟の俘に臨み、これを釈

放したとあるので、戦勝国の天子が敗戦の王に苛酷な扱ひをしたことが知られる。唐將蘇定方が泗泚城(扶余)を攻略して彼らを捕虜にした時に、勝利の宴に引き出して戦勝の將士の盃に酒をつがせた、といふから、王らの苦惱は推察できる。義慈王が屈辱を甘受したのは、その妃や王子たちの安全のためであったかも知れない。しかし釈放されて、幾くもなくして薨じたのは、恐らくは心痛のあまりであったらう。あるいは自殺であったかも知れない。

幸か不幸か、博徳は、この義慈王の死を知らなかった。彼らの釈放を見て、五日後には洛陽を出発したからである。

博徳が百濟滅亡の模様を報告したのは、斉明天皇の七年、朝倉宮においてであった。宮廷は、伝染病の蔓延でごった返してある時であったし、百濟の滅亡は既に知られていたので、目新しい情報ではなかっただらうが、日本の朝廷にも親しかった義慈王たちの唐朝での扱ひについて直接見聞した人たちの話を聞くのはやはり大きな衝撃であったらう。また唐と結んで百濟を滅した新羅王が、かつて人質として来朝した金春秋であることを知る人にも、深い思ひがあったにちがひない。耽羅の王子を連行したのが、せめ



含元殿復元図（中華人民共和国出土文物展より）

てものことであった。

唐都長安の遺址及び含元殿（大明宮主殿）復元図の写真を載せた。長安の都は東西約九・七キロメートル南北八・二キロメートルで、平城京・平安京の四倍の面積をもつ大都市であったから、藤原宮（持統天皇皇都）さへもまだなかった頃の遣唐使にとって、唐の東の京（洛陽）及び西の京（長安）のすがたは、驚異であったにちがひない。

太宗が百済王義慈を楼上から引見したといふ洛陽の則天門はいま見ることはできないが、長安城の北門などによって想像することができる。

(九) 齐明天皇崩御

秋七月二十四日

「天皇、朝倉宮に崩りましぬ。」

当時の人々は、斉明天皇をもつて、遠くは神功皇后、近くは推古天皇の再来と信じたに違ひない。斉明天皇と皇太子中大兄皇子とのお力によって、年来の懸案たる百済救援が成功するに違ひないと信じたであらう。天皇の崩御を記すたった一文のこの簡潔な記事が、かへつてこの短文の背後にある無限の想ひを伝へるやうに思はれる。さういへばこのあたりの「日本書紀」の記事は実に簡潔である。しかし、この、記事が短かくて簡単であるからといって、事件が小さいといふわけではない。深刻な悲痛な体験はかへつて言葉を喪はせるものである。当時の人も、「日本書紀」の編者も、この戦役については多く語りたくなかったのではなからうか。それほどこの体験は深く悲しかったのである。天皇崩御につゞく書紀の記事を現代語訳すると次のやうになる。

「八月一日、皇太子は天皇の御遺骸をお連れして前の磐瀬の宮にお還りになった。この日の宵の頃、朝倉山の上に、鬼がゐて、大きな笠を着て、じつと喪儀を見てゐた。衆人は皆怪しんだ。」

いま筑後川が大きく湾曲して朝倉山との間に関をつくつてゐる恵蘇の宿に、恵蘇八幡

宮といふ神社がある。この八幡宮の裏山に古墳があつて、土地の人は中大兄皇子が母帝  
齊明天皇の御遺骸を安置したところと伝へてゐる。

河音高く流れる筑後川の川岸に立つこの御陵は、遠く筑後平野をのぞんで、北の方は  
かに海の彼方、半島に対するかのやうである。中大兄皇子は母帝をしのんで、ここに  
宮をいとなまれ、幾月か服喪せられたといふ。そして、天智天皇の御製と伝へる

朝くらや木の丸殿まるどのにわが居れば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ

(粗末な丸木建ての朝倉の御殿に私がをると、名を名のつて通つてゆく男がをるが、あれは誰だ  
らう?)

はこの時の歌であるといふのである。

しかしこの和歌は、神楽歌と歌詞が同じで、鎌倉時代初期の「新古今集」に載つてゐ  
るので、後世の附会であらう。中大兄皇子の御歌としては、後世風であつて、信じがた  
いし、また当時の国民的緊張感を伝へるものでもない。

たゞ不思議なことは、「日本書紀」に拠ると、齊明天皇のおなくなりになられたのが  
七月二十四日で、御遺骸を那の天津おほつの磐瀬いはせの行宮かりみやにお遷し申上げたのが八月一日である。



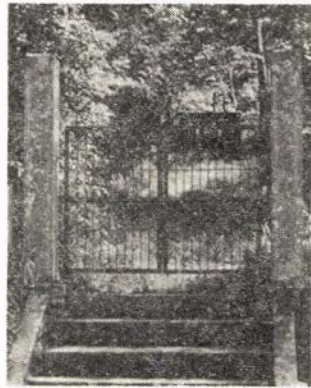


朝倉宮跡より筑後河を臨む

その間約五日にすぎない。さうすると、八幡宮裏の古墳はどういふ意味なのか。しかし、現地に立って、筑後川の河音を聞き、楠の大木の梢高く姿の仏法僧が怪しき声をあげて飛び交っているのを見たりすると、齐明天皇の殯の宮がここにあったといふことを否定する気にはならない。また地形的に言ってここのなら、仮想敵の侵入軍を破ることもむづかしいことではないやうに思はれるからである。

かくして、齐明天皇七年正月、難波の御津を船出して、西征の途につかれた六十八歳の女帝は、半歳後の七月二十四日に、北九州の、筑後平野の行宮で、あっといふ間におなくなりにな





齊明天皇陵伝承地

往來は、思はぬ疫病を筑紫の朝廷にもたらしたのであらう。軍務御多端の皇太子は御看病の時間もなかつたのではあるまいか。ましてや従軍二万の将士は夢かと思つたであらう。

「冬十月癸亥朔己巳に、天皇の喪、歸りて海に就く」が「春正月丁酉朔壬寅、御船西征、始めて海路に就く」を結ぶのである。

「冬十月七日、天皇の御遺骸は歸りて海に就く。皇太子はひとところにいづまでも停

泊して、天皇をおしたひ申上げた。その時、声に出して和歌をおよみになった。

君が目の恋しきからに泊ててみてかくや恋ひむも君が目を欲り

(なき母天皇さまにお目にかゝってゐたいばかりに。かうしていつまでもひと所に停泊してゐるが、いつまでもかうしておしたひしてをられようか。母君さまにお会ひしたいからといって。)

嘆きのお声の聞えるばかりの御歌である。皇極天皇、孝徳天皇、斉明天皇(皇極天皇重祚)とつゞくこの時代は、大化改新と半島における大戦争との動乱の時代であった。

この時代の指導者であった皇太子中大兄皇子は、老令の母天皇を西征途上の北九州の行宮で喪はれたのである。

「二十三日、天皇の御遺骸は還りて難波(大阪)に泊した。

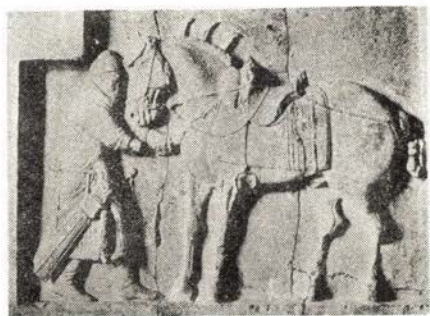
十一月の七日、天皇の御遺骸を以て、飛鳥の河原に仮葬した。この日から哀号をはじめて九日に至った。」

と書紀は記してゐる。そしてこれが斉明天皇紀七年「春正月御船西征始めて海路に就

く」にはじまる七年記事の最後の文となったのである。

## 第二章 隋唐の東アジア進攻

- (一) 隋の煬帝の高句麗遠征
  - (二) 唐の太宗の高句麗遠征 (一)(二)(三)(四)
  - (三) 房玄齡の諫争と太宗皇帝の薨去
  - (四) 顯慶五年、高宗の百濟討滅
- (四) 唐から見た日本



唐の太宗皇帝の昭陵（陵墓）玄武門にある六駿石碑の一、唐初の代表的彫刻である。

(一) 隋の煬帝の高句麗遠征

第一章は、齊明天皇七年（六六二）の天皇親征・百濟救援軍の出動について、主として「日本書紀」に拠って述べたのである。「日本書紀」は西暦七二〇年の完成で、事件当時から八〇年ほど経ってゐる。また「日本書紀」は、ある程度当時の中国の書物や朝鮮の書物を参照してゐるので、史実の記述について海外の資料とさう矛盾することはなささうである。ただ、一つ一つの事件の受け取り方が外国の歴史とちがふが、それはいふまでもないことである。おほともべのはかま大伴部博麻のことなどはもちろん、伊吉博徳の記録についても、齊明天皇の親征そのものについても、唐や朝鮮三国の歴史には記すところがない。したがって「日本書紀」は、漢文で書いて中国の人に見せようとしたものであったとしても、当然のことながらあくまで日本人の書いた歴史である。第一章は、言ってみれば、当時の日本人の体験した戦役前史なのである。対手国の唐や新羅や同盟国の百濟や高句麗はそれぞれこの戦をどう受けとめてゐたのであらうか。

なかんづく、百済の滅亡を救ふために出発した日本軍に対して、敵国であった唐や新羅はどのやうな戦略をもってむかへうたうといふのであらうか。

滝川政次郎博士は最近の論文（昭和四十七年「皇学館大学紀要」所載）において、この白村江の戦闘を中心にする戦争を、「日唐戦争」と呼んでをられる。正にその通りで、この戦争に関する限り、主役は日本と唐とであった。しかし、唐からすると、高句麗の征討がその主目的で、百済の征討も倭国・日本との戦ひも、その手段であったとみられる。

まづ、唐の側から見てゆかう。それには、前代の隋の高句麗遠征から説かなければならない。

## 「隋書」

隋帝国の歴史を記したのが「隋書」<sup>ずいしよ</sup>で、唐の名臣、魏徵<sup>ぎちゆう</sup>の撰<sup>せん</sup>である。これは唐第二代の皇帝・太宗の勅を奉じて貞観十年（六三六）成った中国の正史の一である。

中国の歴史は、王朝の興亡の歴史である。日本などと違って王朝ごとに国号<sup>こくごう</sup>が異なるので、「史記」にはじまる中国正史の二十五史は、「漢書」<sup>かんじよ</sup>とか「後漢書」<sup>ごかんじよ</sup>とか、「隋書」<sup>ずいしよ</sup>

とか「唐書」とかいふのである。「隋書」は、つまり隋の歴史で、「本紀」「列伝」「志」とから成つてゐる。「本紀」といふのは帝王一代ごとの編年体の通史で、「列伝」は通史に登場する人物の伝記、「志」は、天文・地理・礼楽・政刑などの事項の記述である。完璧な史書は、「表」(年表・系譜等)がついてゐるが、「隋書」には「表」はない。そして、この「隋書」の「本紀」と「列伝」とを書いたのが、魏徵で、「志」は後の追加である。「本紀・列伝」は各巻ごとに巻頭に「唐特進臣魏徵上」(唐の特進三公の次の位、魏徵たてまつる)と記されてゐる。文字通り魏徵が書いたと信じてよいであらう。

魏徵は唐の名臣で、太宗の信任の最もあつた人物であつたから、隋を滅して建てた唐の立場から書くので、叙述が隋朝の天子およびその臣僚にきびしいことは予想される。その点、多少割引して読む必要があるだらう。

しかし、貞観十年(六三七)と言へば、隋の煬帝の高句麗遠征(六一二、六一三、六一四)から、二十年ほどしか経つてゐない。魏徵はつまり現代史を書いたので、遠征軍一三万八千などといふ数字に多少誇張のありさうなところは割引しなければなるまいが、史実の記述にさうあやまりがあるとは思へない。



「隋書」によると、隋第二代皇帝煬帝は、大業八年(六二二)、九年(六二三)、十年(六二四)と、三回にわたって高句麗遠征の大軍を發した。第一回の遠征軍は、こんな有様であった。(中央公論社「世界の歴史・唐とインド」塚本善隆著三二七頁より)

○

「進發基地には涿郡(河北省)が指定され、全国から一一三万八千の兵があつめられた。山東半島では三〇〇隻の船を急造し、河南・淮南・江南は兵車五万台の供出の命をうけた。兵以外の軍役勞務者の徵發は二三〇万という数にのぼった。その大半は地理上の關係から山東地区から徵發されたのだから、この多数の勞働力をとられた農地に明日の不作荒廢がくるのは必然であった。

とくに山東東萊の海辺で行なわれた造船工人は悲惨のきわみであった。昼夜兼行の水中作業で腰から下が腐爛して蛆が生じ、一〇人に三、四人も死んでいった。陸上運輸勞務者もこれにおとらず悲惨であった。旧曆五月六月の炎暑の輸送に休養も与えられず、人も牛馬もつぎつぎに路上にたおれた。『死者相枕し、臭穢路にみつ』と書かれている。

こんな残忍な人民酷使をあとにして、六一二年春、煬帝の高句麗親征軍は涿郡を出発した。一〇〇万の大軍の進行は倍以上の輜重部隊をともなつて、長さ一千里にも達したという。煬帝は、軍はすべて朕の命令下に行動せよと命じたが、こんな大行軍に命令がそのつど徹底するものではない。一輸送官が、自分のいくところを忘れてしまつて、駱駝につんだ水箱に魚を飼つて自分のご馳走にしたといふ笑い話もある。

海軍は勝手に平壤に進攻して伏兵にあい、四万の精銳はわずかに数千をのこすのみという惨敗を喫してのがれさつた。一方、陸軍は遼河の線で高句麗軍の頑強な抵抗をうけて六ヶ月も進みえなかつた。やつと遼河をわたつたが、行軍の困難にたえかねて携帶食糧はすてられ、食糧輸送はとだえた。疲労と食糧欠乏で戦意をうしなつてゐる隋軍の弱点をみぬいた高句麗軍は、平壤近くまで誘導戦術をつづけたのち、一挙に隋軍の退路を絶つて四方からおそいかかつた。

隋軍はただ夢中になつて逃げた。一昼夜に四五〇里も逃げてやつと鴨綠江までたどりついた。三〇万五千の軍隊は遼東まで引きあげたときは、わずか二千七〇〇人になつていたといわれる。

こんな大失敗にもこりず、六一三年（大業九年）第二次高句麗親征を行なったが、遼河を渡ったところで内地に反乱がおこり、洛陽危急の報に、帝は急遽引きあげてしまった。

翌大業一〇年、第三次討伐をくわだてたが、今度は軍に飢餓と悪疫がおこって混乱におちいり、加うるに内地各地に反乱がおこり、煬帝は民軍蜂起のなかに衰亡の急坂をくだりはじめたのであった。

魏徴は、さらに煬帝紀の最後に「史臣曰く」として批評を加へ「文字が出来てからこのかた、今にいたるまで、宇宙崩離し、生霊塗炭、身を喪ひ国を滅す、未だかくのごとく甚しきものあらざるなり」と言っている。

なほ「隋書」によると、ただ一人、耿詢といふ占師らしい人物が、煬帝に直諫してあやふく斬られるところであったと「列伝」に書いてある。「資治通鑑」は、「本紀」にこの話を書いてあるが、「隋書・本紀」にこのことは無い。煬帝の高句麗遠征を諫言するものが一人もあなかったことを憤った魏徴が、人づてに聞いた逸話をあとになって書き

加へたのではなからうか。魏徴は「諫議大夫」となった人物である。

それはともあれ、魏徴は、煬帝を目して史上最大の暴君と批評した。だから彼は高句麗遠征には絶対反対だったらう。その魏徴の死んだのが貞観十七年である。

太宗の高句麗遠征の議の興ったのは、翌貞観十八年のことであった。

## (二) 唐の太宗の高句麗親征

### (一)

隋の煬帝が高句麗遠征に失敗して、国内が混乱状態になったのを再統一したのは、李淵すなはち唐の高祖であった。

高句麗は唐の高祖に朝貢したので、唐と高句麗の関係は一時平穏であった。そして百済も新羅も朝貢したので、高祖は武徳七年（六二四）春正月、高句麗の王建武を遼東郡王とし、百済王扶余璋を帶方郡王とし、新羅王金真平を樂浪郡王とした。新羅の領土は

朝鮮の東部であるから「楽浪郡王」はちよつとをかしいが、要するに三韓分治の方針を示したものであらう。「郡王」は「親王」の次位といふが「国王」よりさらに直轄的傾向が強く感じられるが、実際には「海東三国」の抗争に手を焼いた高祖は、度々使を遣つて和解をはからせたが、成功しなかつたのである。三国はそれぞれ王子や大臣を唐に遣つて唐との修好に努めたので、三国間の争ひはつづいたが、唐との問題は起らなかつた。

つづいて李世民（太宗）が即位したが、太宗は李勣・李靖の両名将の力によつて東西突厥を平定して、文字通り大唐帝国を出現させた。

貞観十六年、トラブルが発生した。高句麗の大臣蓋蘇文が建武王を弑して建武の兄弟の子・藏を建てて、王とした。高句麗の王は、高を姓とするから、この王を高藏王といふ。

「旧唐書」の「列伝」によると、蓋蘇文が大臣となって専横なので、建武王は諸大臣と謀つて蘇文を誅せんとした。ところが、事洩れて、蘇文の知るところとなり、反対に蘇文がクーデターを起して、反対派百余人を殺し、王宮にかけ入つて、建武王を殺し、

その甥の藏を立てて王とした。そして、自分は莫離支まくりしとなった。これは中国の兵部尚書兼中書令のやうな職だといふから、軍務大臣兼総理大臣にあたるだらう。

当時、百済は璋王しょうが死んで義慈王ぎじの時代となつてゐたが、王は新羅を討つて四十余城を奪ひ高句麗と結んで、新羅の唐朝への道を絶たつた。そこで新羅の善徳女王ぜんとくは唐の太宗に救援を求めたのである。

太宗は司農丞相しのうじょうしやう（農林大臣相当か）里玄奘りげんしやうを遣はして告諭こくゆした。しかし、それでをさまるわけではない。

翌十七年は、唐と韓三国との交渉に暮れ、貞観十八年に至つて、高句麗親征の議が真剣に取りあげられたのである。

太宗は、蓋蘇文がその君を弑し、專横で人民を苦しめるを以て、出師弔伐しゅしちやうばつ（弔ひ合戦の出兵）せんとし、侍臣に意見を問うた。

名臣褚遂良ちよすいりやうが親征に反対した。魏徵ぎちやうが生きてゐたら同意見であつたらう。

ところが兵部尚書（軍務大臣相当か）の名将李勣りきが太宗皇帝に賛成した。主戦派の代表である。

勣が言ふには、

「近ごろのことでありますが、延陀えんだ（北方の部族）が国境を侵犯しました。その時陛下は追撃をしようとなさいましたが、魏徴の言を容ゆるれて止められ、遂に機会を失ってしまいました。あの時若し陛下が御計略の通りになさいましたら、延陀は一人も帰ることを得ず、五十年間辺境は無事でしたとせうに」と。

太宗曰く、

「誠に卿きやうの言のごとし。魏徴によって計を誤った。しかし、朕ちんは一計の当らざるを以てこれを尤とがめようとするものではない。後に良算がある。機を失ったまゝであるわけではない」と。

「隋書」を書いて煬帝の高句麗遠征の非を鳴らした魏徴が主戦派・李勣の槍玉にあがってゐるのがおもしろい。帝は勣の言によって、遼河を渡る戦略を立てた。褚遂良ちよすいりやうは翌日じようそ上疏して諫止かんしした。長文の文章が掲げられてゐるが、結局、太宗は遂良すいりやうの言を納いれなかつた。何となくこのあたり、文官派と軍人派との争ひのやうにも見えるが、はっきりとはわからない。李勣も、永徽律令の制定に参画してゐるくらゐだから、決して単なる



武弁ではない。かくて、「旧唐書」本紀は次の通りである。

「貞観十八年（六四四）十一月庚子、太子詹事（東宮事務所長）英國公（國公は郡王の次位）・李勣に命じて、柳城を出で、遼東（遼河の東）道行軍総管（指揮官）とし、礼部尚書（礼部長官）・江夏郡王・道宗を副とし、刑部尚書（刑部長官）・郎国公・張亮を平壤（高句麗の都城所在地）道行軍総管とし、海軍を以て萊州（山東半島）を出で、左領軍（十六衛の一）常何、瀘州都督（長官）・左難当を副とし、天下の甲士を発し、十万を召集して、並びに平壤に趣き、以て高句麗を伐つ。」

唐初の名將に、李靖と李勣とがあつた。この時、李靖は、太宗に召されて意見を問はれ、老骨に鞭つて従軍することを願つたが許されなかつた。かくて李勣が高句麗征討の指揮者となつた。

皇太子は定州に留鎮し、京城の留守は名相房玄齡が命ぜられた。

貞観の治を以て知られる唐の英主太宗の親裁のもとに、名臣名將を各部署に配して、唐は全力を以て高句麗に当らうとするのである。

隋にしても唐にしても、何故かうも高句麗討伐に執念を燃やすのか、そのところがはっきりわからないが、隋・唐の大帝国は、高句麗の征討を以て完結するといふ考へが、隋・唐の皇帝、臣僚の頭にしみついてゐるとでも考へるほか考へやうが無い。東夷高句麗を討伐することを以て世界国家が完成するのである。

高句麗も当時は強大であった。領土は北朝鮮から遼河辺までのびてゐて、北方同族の靺鞨まつかつと結び、いつでも西へ南へ、侵攻する勢を見せてゐた。蓋蘇文は「唐書」では散々だが、「三國史記」の「高句麗紀」では大唐の攻撃にも屈せぬ救国の猛将である。蘇文の生きてゐる間は遂に唐は高句麗を滅ぼすことはできなかった。百済の義慈王ぎじは、新羅の四十城を奪つたといふのであるから、やがて亡国・囚虜はづかの辱しめを受けて悲劇の王となるが、凡庸な王ではなかつたであらう。新羅の善徳女王ぜんとくは、やがて真徳女王しんとくを経て金春きんしゆん秋しゆといふ英雄に代る。名将金庾信きんゆしんを擁した新羅の勃興期である。

日本は孝徳天皇こうとくの時代で、中大兄皇子なかのおほえのみこ（後の天智天皇）を中心に、大海人皇子おほあまのみこ（後の天武天皇）、藤原鎌足ふじはらのかまたり、高向玄理たかむこのたちが、大化改新を行なつて内政を充実し、東アジアの動乱に対処せんとしてゐる。

不思議なもので、或いは敵となり味方となるが、各国それぞれ一流人物の指導のもとに、国の運命をかけた戦が展開されようとしてゐるのである。

(二) 唐初の歴史編纂

唐の太宗皇帝は宰相房玄齡・杜如晦・褚遂良・李延寿たちに命じて「晉書」といふ晋代の歴史を書かせた。太宗皇帝親撰の史書で、貞観二十二年、新羅の金春秋（後の新羅の太宗）が唐朝に参朝した時、太宗皇帝からちかかき与へられたものでもある。

これによつて太宗皇帝を中心とする初唐のリーダーたちの東アジア観をみる事ができ、晋代といふのは、三国の魏に代つてその権臣司馬炎の建てた王朝で、西晋（二八〇—三二六、都・洛陽）東晋（三二七—四一九、都・建業（南京））をいふのである。時代でいふと三世紀の後半から五世紀の初頭までの歴史であるが、そのためであらう、晋書の中に出てくる倭人伝は、魏書の倭人伝を簡略にしたやうなものにすぎない。

東晋のあとをついだのは南朝の宋で、宋（四二〇—四七九）の歴史を書いた「宋書」は梁（五〇二—五五七）の沈約（四四一—五二二）である。その「倭国伝」には、いはゆる倭の五王

の遣使貢獻けんしんの記事がある。仁徳天皇から雄略天皇の頃までの記事で、五世紀のことである。

晉書しんじよの撰者たちは、これを読んでゐたであらう。したがって、魏志倭人伝と宋書倭国伝とによつて、五世紀まで倭国は中国の東夷の朝貢国の一国であつたと考へられて来たのである。

さうして、これらの中国の歴史を参照して隋代の日本と中国との関係までを書いたのが、同じく唐の宰相魏徵ぎちようの書いた「隋書ずいしよ」の「東夷・魏国伝」である。したがって、この史書が唐初の智識人たちの抱いてゐた日本観を示してゐると考へてよいであらう。

ちなみに、唐初の政治家が、太宗皇帝をはじめ宰相たちみな、歴史家であつたといふことは、おどろくべきことである。これは政治家や軍人が自己の政治的経験を回想して回想録を書くこととはちがふやうである。ともかく皆文章家であつた。演説の草稿を他人に書いてもらふやうな近代の政治家とは教養がちがふ。

魏徵などは殊に当代の詩人で、「人生意気ニ感シテハ、功名復タ誰カ論ゼム」の名句をふくむ次のやうなますらをぶりの詩を作つてゐる。

訓は塚本善隆博士「唐とインド」所載に拠った。

### 述懐

中原ちゆうげんまた鹿を逐おひ（帝位をあらそふこと）

筆を投じて戎軒じゆうけん（いくさぐるま）を事とす。

縦横、計、就ならざれども

慷慨、志、猶なほ存す。

策つえを杖ついて（馬のむちを手にして）天子に謁し

馬を駆りて関門を出づ。

綏えい（かんむりのひも）を請うて南越（南の越の国）を繋ぎ

軾しよく（車の前の横木）に憑りて東藩（東の藩国、朝鮮か）を下す。

鬱紆うつう（ふかく曲がるさま）として高岫こうしゅう（穴のある高い山）に陟のぼり

出沒して、平原を望む。

古木に寒鳥鳴き

空山に夜猿啼く。

既に千里の目を傷ましめ

また九折きゅうせつ（つゞらをりの山道）の魂を驚ろかす。

豈艱險かんげんを憚はばからざらんや

深く国土の恩を懐おぼふ。

季布きふ（楚の名將）に二諾無く

侯嬴こうえい（魏の隠士）は一言を重んず。

人生意気に感じては

功名こうみやう誰か復またた論ぜむ。

「乱離に、文を棄てて武に奔った開国の功臣が天子に謁して命を受け、山野を跋涉して、君恩に感じては艱苦を物ともしないといふ勇気が一篇に満ちてゐる。殊に人生意気に感じては云々と結んだあたり六朝の女々しい気分を一掃してゐるではないか。」とは、昭和十三年発行「東洋文化史大系・隋唐の盛世」所載の、若き日の長沢規矩也博士の批評である。

李勣も無学の武弁でなかったことは、前述の通り大宝律令の原本となった高宗の永徽律令格式及びその注疏の作製に詔を奉じて参画したことによって明らかである。

李勣は死後、太宗の昭陵に陪葬されたが、墓前の大石碑の碑文は高宗の御製御書であるといふ。(登場人物の項参照)

「京師至德觀主孟法師碑」は、褚遂良の筆になる碑文の拓本で「莊重雅健しかも暢達」といふ。彼は唐初の名筆でもあった。(同前参照)

### (三) 百済王・新羅王に与へた太宗の詔書

唐の歴史を叙述したのは「唐書」であるが、「旧唐書」(九四五、後晋の劉昫らの奉勅撰)と「新唐書」(二〇六〇、宋の歐陽修らの奉勅撰)とがある。その他、「冊府元龜」(二〇一三、宋の王欽若らの奉勅撰)「資治通鑑」(二〇八四、北宋の司馬光著)等も、唐時代のことを取扱つてゐる。

唐初のことは「旧唐書」によるのが、一番確実だと思はれたので、本稿は主として「旧唐書」によつて、他の書物を参照した。また、百済や中国等に残る紀功碑は当時の文章で最も重要な資料であるから、できるだけこれに触れるやうにした。



さて、太宗の高句麗親征については、「文館詞林」(六五八)顯慶三年V唐の高宗の勅命により許敬宗らの編集)といふ、唐初までの名文章を集めた書物があつて、その中に太宗の百濟王義慈に与へた貞観年間の詔と新羅王に与へた同じ頃の詔とが残つてゐる。これは、編輯年代から言つて、当時のそのまゝの文章であると思はれるので、英主太宗の考へを最も生々しく伝へるものといふことができよう。それぞれ雄勁な漢文であるがわかりやすく書き直すと次のごとくになる。

(4) 貞観年中、百濟王を撫で慰める詔一首

皇帝(太宗)、柱国・帶方郡王・百濟王の扶余義慈に問ふ。

朕は天のめぐみを受けて、宇宙に君臨し、四海のために勤め、万姓の人民を憐み養ふ。天覆ひ地の載せるこの世界は日月の照らすかぎり、みな楽しみの恩恵を被り、これに仁徳の寿を与へるのである。

王(百濟義慈王)は藩王の位を嗣ぎ度々その心を尽してくれる。早く中華の礼楽の風を慕ひ久しく詩書の教へを習つてゐる。朝貢の職務をつゝしみ修め、彼の滄波を渡る。使者

は道に相續き、宝物は王府に絶やさな<sup>げん</sup>い。言はま心にあふれてゐる。朕は大さううれしく思ふ。

さて、高麗王の高武（建武王）は、早く中華朝廷の化を奉じて、こまやかに誠をいたした。朝貢は欠けることなく、藩臣としての礼はもつとも明らかである。その臣の莫離支（大臣）蓋蘇文は、姦凶をいただき反逆を行った。いたましい冤罪は遠い血統まで及び、痛悼の聲は中夏（中華）まで聞えて来た。朕は命を上元の天に受け、民の父母である。既にして此の事を聞き甚だ心いたむものがある。若しこの仇敵を伐たなければ、世界に懲<sup>しゆく</sup>粛の心をあらはすことができなくなる。

今先づ大总管・特進・太子詹事・英国公の李勣を遣はして、士馬を統率し、直ちに遼東に向はしめた。大总管・刑部尚書・郎国公の張亮は水軍を率ゐて徑ちに平壤に向つた。朕はすなはち親ら遼河の岸を巡り、その人民を撫で、其の凶逆を誅し、恩威を布き、此の平定によつて、三韓の境域、五郡の境界をして、永久に平和たるを得しめようと思ふ。

前に新羅の上表文を得たところ、（百濟）王は高麗と一緒にたつて多数の兵士を興し

て、中華朝廷の旨にしたがはずに、同じく新羅を侵略する。朕はそこで王を疑はしく思ふ。——必ず高麗と協約がある、と。ところが（百濟）王の今の表文を覽て康信こうしんに問うてみると、王は高麗と徒党を組んでゐるのではない。既に能くかくのごとくである。まことにわが望みになつてゐる。康信もまた王の意図を述べ、高麗討伐の兵を發せんことを強く請願し、唐皇帝の官軍と同じく凶惡を討たんといふ。

朕はいま甲兵こうへいを興す。根本は、君を殺した賊（蓋蘇文）を誅ちゆうするにある。（百濟）王は志、忠正であり、情、はやぶさのやうな害力を切るにある。既に朕の懷おもひをたゞへた。朕もまた感心した。發する兵は、よろしくわが將張亮ちやうりやうの処分を受けよ。若し、賊を討つ日に功勲を立てることができれば、王はよろしく録して奏上せよ。必ず褒賞ほうしょうする。

しかして王は、心を国家に尽して身を惜しむところなく、遠く子女を献上して深く丹誠を尽した。朕は既に遼左の地に事有り、方に弔伐の軍を進めんとする。若し王の請こひに違はず、王の獻ずるところの子女を受納すれば、四海の人は議して、朕が貪求どんきゆうする所ありといふかも知れない。そこで其の女は今しばらく帰国せしめる。賊が平定してから、王が更に奏するならばその意にまかせよう。よろしくこの意を諒承せよ。あやしむこと

を致すな。

奏上するところの学問僧等が恣意に出入することを請ふことはわかった。また三藩の使人の等級のこともわかった。

又、蔣元昌をして往きて彼の王のために病患を療治するを請ふことについては、朕が先に元昌を益州道に使者として遣はして、未だ還つて来ない。これが王の処に向はせることの出来ない理由である。

請ふ所の僧智勝の国に帰ることは前に奏するところによって実行するはずである。

今、朝散大夫の庄元表、副使の右衛勳衛旅師の段智君等が新羅王の所に往く。宜しく速やかに人船を遣はしてこれを新羅に送れ。必ず安らかに到達せしめよ。道中、莫離支（蓋蘇文）等にかすめとらしめるな。

早春、猶ほ寒い。この頃王のつゝがなきことを想ふ。国境の内すべて平安ならんことを。新年の慶びを王及び王の率ゐる士人らと同じくする。

康信が今還るので、書簡によって往意を述べた。ならばに王に寄贈する品物は、別のごとくである。

(四) 貞觀年中、新羅王を撫で慰める詔一首

皇帝は、柱国・楽浪郡王・新羅王の善徳（女王）に問ふ。

朕は、天の靈命をうけて宇宙に君臨してゐる。つゝしみの心は朝夕忘れることはない。民を撫で育てる志は、どうして遠近にへだてをおかうか。

高麗はその地の險阻をたのみ、勝手な振舞ひをして悪るがしこく、度々武器を取って王（新羅王）の国境を侵略する。朕は王が遠方にあて高麗の排斥にあふのをあはれむ。そこでしきりに使者に命じてそのことの利害を示すが、高麗は、性、凶愚で、改心するところが無い。ことさらに朕の命令に違ひ、兵を休めたことがない。そのうへ、莫離支（大臣）の蓋蘇文は、禍心を包蔵して、忠良の人士をみな殺害し、その国土のすべてにわたって凶虐の行為をなした。反逆反乱すでに甚だしく、その罪はゆるしがたい。

朕は是の故に大いに軍衆を發し、往きて弔ひ合戦を展開し、彼の国新羅の危急を救ひ、遼河左岸の人民塗炭の苦しみを濟ふ。平定の時期は旦夕のことである。

去年、王の使者の金多遂が、帰国して曰つたはずである。「くはしく璽書（皇帝の書面）

にある通りで、皇帝は、水軍を以てまさに路に進まれようとして、王をして官將を率ゐ、人船を領して、お迎へさせようとしてをられます」と。

いぶかしく思ふのだが、このごろ王からの消息が無い。これは交通が高麗に切斷されたためであらう。そのために遣使を来たさないのであらう。

さて、先に、礼部尚書・江夏郡王・道宗をして水軍を統率せしめようとしたが、今、道宗は別に使人に任じたので、先づ光祿大夫・刑部尚書・張亮をして、艦船を統率せしめた。又、特進・太子詹事・英国公の李勣に命令して、亦、大捨管と為し、土馬を統率して、全軍水陸ともに進み、直ちに賊の拠点に向はせた。四月上旬の内に当に高麗の境域に侵入するはずである。若し、高麗の悪に同調して助け合ひ、敢て帝の王軍を拒むならば、軍の威力を存分に發揮して遺るものも無からしめる。

王（新羅王）は、高麗と敵対することすでに甚だしい。王の所屬の兵は、装束を改めて戦ふことを想つてゐるだらう。よろしく、左驍衛長史の任義方とともに指揮し、早く命令を發して召集し、兵馬を進發せしめ、みなよろしく張亮らの指令を受けよ。

朕は仍つて、命令を發して、行軍總管・守・右驍衛將軍・東平郡・開國公の程名振ら



を張亮の前軍とし、ならびに、朝散大夫・柱元表、副使右衛勳衛旅師・段智君らを使者として彼の国新羅に往かせる。元表らの到着する日、宜しく使を遣はして亮らの軍所に到り、共に期会を為せ。仍つて、使を遣はして速やかに来り奏せよ。

朕はいま全世界の軍を率ゐ、百道ともにすすむ。或ひは鉄騎雲の如く集り、襄平を過ぎて雷電のごとくに進撃する。或いは軍船は船首を連れ、青い海岸をおほうて風の如くに進む。中華も東夷も一つに会し、遠近みな力をつくす。これを以て陣を破る、何の陣が摧けないだらう。此を以て城を攻める、何の城に勝たないだらう。

朕即ち、今月十二日を以て洛陽を発し、幽州に至り、まさに遼河左岸に東巡し、当地の風俗を觀省し、疾に苦しむ人々を親しく問ひ、叛乱の張本人を殺し、民衆の非常の苦しみを解放し、朝廷の恩恵を被らしめ、このよろこびの種をまかうとする。

まさに、三韓の官吏に命令して、五郡の士民、永久に兵乱の準備を止め、長く平和の安定を保つことができるやうにする。王（新羅王）早くその誠をあらはし、毎に藩国としての礼を尽せ。戦争に際しては、王のために害を除かうとする。派遣の兵は精銳を選べ。賊を破る日、若し能く功を立てるならば、くはしく記録して奏上せよ。必ず褒賞を加へ



る。

春、やうやく暖かである。このごろ恙なきことであらう。国内まさに平安ならんことを。自外ならびに元表（汪元表）の具するところ、ならびに王に寄贈する信物は、別の如くである。

(四)

貞観十九年（六四五）春二月、太宗皇帝は、親ら六軍を統べて洛陽を發した。

太宗は皇太子に詔して、定州に留って国政を監し、五人の高官を輔として同じく機務を掌らしめた。

三月、定州を發す。

夏四月、大將軍李世勣が蓋牟城を攻撃してこれを破った。

五月、車駕、遼河を渡る。上太宗、親ら鉄騎を率ゐて李世勣軍と会し、遼東城（遼陽）を囲む。烈風に乗じ火弩を放ってこれを焼いた。

六月、唐軍安市城（湯池）に至るや、高句麗の別將高延寿・高惠真、兵十五万を帥ゐ

て安市城を來援し、唐軍を拒む。李勣は、太宗皇帝の目前に奮戦して之を破り、高句麗將は投降した。因つて、皇帝の居所の山を、駐蹕山と名づけ、石に刻して功を紀した。

秋七月、勣、進軍して安市城を攻む。

九月に至りて尅たず。乃ち、師を班す。

冬十月、臨渝関（山海関の西の永平）に入る。皇太子、定州より迎へて謁す。

十一月、幽州（北京）に行幸。大饗して師を還す。——復員であらう。

十二月、并州に幸す。

太宗の親征も高句麗を討滅することができなかつたのである。

### (三) 房玄齡の諫争と太宗の薨去

貞觀二十年（六四六）、高句麗は使を遣はして謝罪し、二人の美女を献じた。太宗はその使に謂つた。

歸りて汝の主に謂へ。美色は人の重んずる所である。爾の献ずるところは誠に美麗

であるが、その本国の父母兄弟に離れ、その身を外国に留めて其の親しきを忘れるのはあはれなことである。其の色を愛して其の心を傷ましむるは、我が取らぬところである。

かくして二人とも帰国せしめた。

二十一年、牛進達、李世勣の高句麗討伐があり、二十二年、薛万徹・裴行方の攻略があったが、決定的打撃を加へることができなかった。同年、新羅の大臣・金春秋及びその子の文王が来朝した。太宗皇帝は、江南に命じて大船を造らしめ兵糧兵器を烏胡島に貯へしめ大いに戦備を整へた。

同年、名臣房玄齡が逝いた。死期の近きに臨み上表して、高句麗遠征を諫止せんとした。

その表にのべるところの概要は次の通りである。（「旧唐書」・「房玄齡伝」）

私の聞くところによりますれば、兵の悪は戢めぬことであり、武の貴きは戈を止むることでありませぬ。只今、皇帝陛下の化育の及ぶところ届かざるところはありませぬ。上

古より臣従せぬところをも、いま悉く陛下は臣従せしめられました。

詳かに古今、中国の患害をなすものを観ますると、突厥にまさるものはありません。しかし陛下は坐ながらにして神策をめぐらし、御殿を下らずして、大小の可汗（會長）、相次いで服従し、禁衛のまもりについてをります。その後延陀が勢力を張りましたが、滅されました。鉄勒は義を慕ひ、州県を置くことを請うて来しました。沙漠以北、万里塵さへ無く、高昌の叛の如きは流沙の中に消えました。吐渾はたちまち平定されました。

高麗は歴代、誅をのがれ、討ち滅すことができません。陛下はその逆乱にして、主を殺し人を虐待するのを責めて、親ら大軍を総べて、遼東を攻め、捕虜数十万を得て、これを諸州に分配されました。前代以来の恥を雪ぎ、山野の枯骨を掩はれました。その功德は前代の君主に万倍いたします。このことは陛下の心中によく御存じのところでありまして、微臣の敢て細説する必要もございませぬ。また陛下の高徳の数々はとても申し尽せることではございませぬ。（中略）

「周易」に、「進むを知りて退くを知らず。存を知りて亡を知らず。得を知りて喪を知らず」と言ひます。また、「進退存亡を知りて其の正を失はざる者は、惟聖人か」とも

言ひます。此に由つて申上げますのに、進むに退く有るの義、存に亡有るの機、得に喪有るの理、——これ老臣が陛下の為に惜しむものであります。老子も言つてゐます「足るを知れば辱しからず、止るを知れば殆ふからず」と。陛下の功名威徳は亦充分でございませぬ。領土の拡張はまた止むべきでございませぬ。彼の高麗は、辺夷の賤類で、仁義を以て待遇するに足りませぬ。平常の礼義を以て責めることはできません。昔から鯨魚（すっぽん）を飼ふには、潤略にしたがふのがよいと申します。もしその種類を絶やさうとすると獣でも窮して反撃することがあります。また陛下は一人の死囚を決めるにも何回か審議し、食もすゝまず音楽を廢するほどで、人命を尊重すること重く、皆、感動してをるところでございませぬ。今、多くの兵士は罪無くして家人をはなれて辺境の外に骨となるのであります、実に天下の冤痛でございませぬ。また兵は凶器で、戦争は危事、曰むことを得ずして用ふるものであります。

使を高麗に向けて高麗が臣節を違失するならば、陛下之を誅して可なりであります。百姓を侵し攘ふならば、陛下之を滅して可なりであります。久しく長く中国の患と為るならば、陛下之を除きて可なりであります。この一つでもありますれば、一日に万人を

殺しても愧とするに及びません。今此の三条無く、ただ坐ながらにして中国を煩はす。内、旧主の為に恥を雪ぐ、外、新羅の為に讎を報ず。存する所は小にして、損する所は大ではありませんか。

願はくば陛下、皇祖老子の止足の誠に遵ひ以て万代巍々の名を保ち、霈然の恩を発し、寛大の詔を降し、陽春に順じて沢を布き、高麗に許すに自新せんことを。波を凌ぐの船を焚き、応募の衆を罷め、自然に華夷がよろこび頼り、遠きはしづかに近きは安らかならんことを。

臣老病、旦夕のうちに地に入りませう。恨むところは露ばかりもありません。ただこの悲しい声を録して死後の思ひ出といたします。

太宗は表を見て、玄齡の女子の高陽公子に言つて曰く「此の人の危懼（憂）此の如く、尚ほ能く我が国家を憂ふ」と。後、病ひ篤く、使をやつて見舞ひし、且つ親臨し、握手して別離の情を述べ、悲哀にたへかねた。皇太子（高宗）もまた就いて袂別した。

これが二十二年秋七月癸卯のことで、翌年二十三年四月辛酉、開府儀同三司衛國公李





唐太宗昭陵の遺址（玄武門残壁六駿石碑がある）

靖薨じ、その八日後、五月己巳、太宗皇帝は薨去された。八月、昭陵に葬った。李靖、房玄齡、魏徵らは勿論、高句麗遠征の主将たる李勣もやがてこの昭陵の陪陵に葬られることになる。

唐の太宗皇帝の陵を昭陵といふ。その遺蹟や、そこにある六駿は唐初彫刻の傑作といはれるが、まことに当代の志気を示すに足るもので、正に、東洋文化の頂点を形作ったものと言へよう。次の高宗皇帝の乾陵の石馬石獅などとあはせ見て、当時の偉容をしのぶことができる。

最近中国の記録映画「絹と玉」（滿城漢墓・馬王堆墓・西安附近唐時代遺物）を見





唐太宗昭陵六駿石碑の一

たら、その最後に乾陵発掘の場面があつて現在発掘中といふことであつた。やがてその全貌が発表されるであらう。

#### (四) 高宗の百濟討滅

百濟の滅びたのは唐の高宗の顯慶五年（庚申、六六〇年）のことである。日本の齊明天皇六年にあたる。百濟が直ちに日本に救援軍を請うて天皇の親征となつたことは第一章に述べた通りである。

百濟の義慈王二十年、新羅では太宗王（金春秋）七年、高句麗・宝蔵王十九年である。

高句麗の大臣は唐の宿敵蓋蘇文である。

隋の煬帝、唐の太宗が統一中国の全力をあげて親征した高句麗が健在で、百済が減びたのには、理由がある。百済の内政上の理由もあるが、主たる理由は唐の戦略の転換であった。

さて、唐の太宗の薨じたのは貞観二十三年で、一旦、高句麗親征のことは止んだ。同年の記事に、新羅の大臣金春秋の帰国のことが見える。

貞観二十二年（閏十二月）新羅の真徳女王は、其の弟の國務大臣金春秋と其の子の文王を遣はして唐朝に來朝せしめた。太宗皇帝は詔して春秋に授けるのに特進（三公の次位）の位を以てし、文王を左武衛（十六衛の二）將軍とした。金春秋は国学に詣り、積尊（孔子の祭典）及び講論を見学したいと申し出た。太宗はこれを許して、賜ふに御製の温湯及び晉祠の碑ならびに新撰の晉書（唐の太宗が房玄齡・李延寿らに撰せしめた晋代の歴史六四八年成る）を以つてした。帰国に当り、三品以上に令して餞の宴を開かしめ優礼はなはだあつたものがあつた。（「旧唐書」）

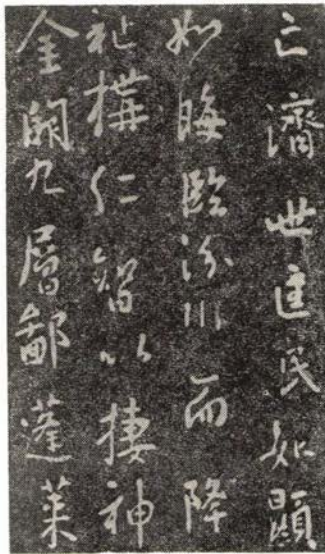
文中の「晉書」については既に述べた通り太宗親撰の史書である。

「晉祠」について塚本善隆博士はかう書いてをられる。

「わたくしは黄土の北シナを旅行して、晉祠の泉ほどに美しい水を見たことがない。山西省の首都太原から汾水の西にそって自動車で南下すること一時間たらずで、山西省第一の名勝晉祠に着く。唐の高祖、太宗父子が旗あげに祈願したといふ神社、水母神をまつる立派な聖母殿がある。もとは周の成王「剪桐封弟」せんとうほうていの故事により唐叔虞（成王の弟）をまつっていたという。

この故事は、あるとき成王が弟にたわむれて、桐の葉をけずって珪けいとして与え「これをもって汝を封ぜん」といった。それでのちに「天子に戯の言なし」といって弟を唐に封じたのがこの地であったという。もとより伝説であろうが、唐帝国の国号もこの伝説に源流するのである。

シナには珍しい清澄の泉があふれ出て、緑樹が影をやどしている。池辺に立って、わたくしは京都の円山公園の噴水や平安神宮の池に想ひをはせたものである。最近一九五七年（昭和三二年）、ひさしぶりにこの地をたずねたときには、この地方は新中国の模範地区となって面目を一新していたが、この歴史的記念の場所はよく保存され、かつ付近一帯の歴史的遺物もここに集められていて、小歴史博物館もできていた。清



唐太宗晉祠銘

優れたものの一つで同時に唐の行書碑中の第一に推されるものである。明初の拓本で中村不折氏所蔵のもの」（『隋唐の盛世』所載）といふ説明である。

御製の温湯の碑も、太宗皇帝の御製御筆のもので、甘肅省敦煌の千仏洞にその拓影が

泉はもちろん相変わらずわきながれていた。」（『唐とインド』三四八頁）この地の鎮将となつてゐた李淵（高祖）に、子の李世民（太宗）がすすめて、義兵を挙げたのである。晉祠の碑は、それを記念して建てたものであらう。現存するのかわるか塚本博士も書いてないのでわからないが、写真の「唐太宗晉祠銘」には「唐の太宗の書中で最も

あって、一九〇六年―八年ペリオオ氏が発見したといふ。(同前書・羅振玉著『墨影星鳳』所収)  
「旧唐書」及び「三国史記」に記してあった通りであったのである。

文ならびに書、いづれも太宗皇帝の思想の表現で、金春秋に与へたのは彼を介して新羅に範を垂れたものである。

金春秋は、「日本書紀」に拠ると、大化三年、大化の改新の顧問であった高向玄理の求めに応じて新羅の人質として来朝してゐる。「春秋、美姿顔善談笑」と記されてゐる



唐太宗御製御筆

から、容姿拔群で、快活な偉丈夫であつたらしい。少くとも日本の朝廷には魅力的な男性として受け入れられた。これが唐の貞観二十一年で、その翌々年に金多逐(遂)と代つて帰国したのかと思つたが、それでは年代が合はないので、少くとも二十二年十一月までには帰

国したことになる。金多逐(逐)は太宗皇帝の「貞観年中新羅王を撫で慰める詔」に出てくるから、唐にも使した有力な政治家であることがわかる。金春秋にしろ金多逐にしろ、日本ならびに唐に使用して国家のために活躍したのである。

金春秋は、二十二年十二月には唐朝に入朝して、特進といふ高位を授けられ、唐朝の厚遇を受けた。やがて太宗が薨じたが、当時皇太子であった高宗とは面識もあつたにちがひない。

翌年、唐の高宗の永徽元年、新羅の真徳女王は百済を攻めて大いに之を破り、金春秋の子の金法敏(後の新羅文武王)を遣はして、唐朝に奏聞した。真徳女王は錦を織つて作つた太平頌(平和讃歌)を献上した。中宮寺蔵の天寿国曼陀羅のやうなものであらう。その詞は五言二十句の頌歌で、唐の盛大をたたへたものである。高宗皇帝はこれを嘉納して、金法敏を大府卿となした。

唐は新羅との親善関係を深めた。

永徽二年、百済の遣使が朝貢したので、高宗は璽書を降して百済王義慈に与へた。璽書といふのは皇帝の璽を印した書面の意味で、国書に相当するものであらう。



海東三国の如きに至りては、開基自ら久しく、疆界を並列し、地実に犬牙たり。近代已来、遂に嫌隙を構へ、戦争交々起りて、略ぼ寧歳無し。遂に三韓の民をして、命を刀俎に懸け、戈を尋ねて憤を肆にし、朝夕相仍らしむ。朕、天に代りて物を理む。載深く矜愍む。去歳、王、高麗を攻む。新羅等の使、並びに來つて入朝す。朕、命ずるに茲の讐怨を積き、更に歎穆を敦くせしむ。新羅の使・金法敏、書を奏す。高麗、百濟脣齒相依り、競つて兵戈を挙げ、侵逼交々至る。大城重鎮並びに百濟の併する所となる。疆宇日に盛り、威力並びに謝す。乞ふ、百濟に詔して、侵す所の城を歸さしむるを。若し詔を奉ぜずば、即ち自ら兵を興して打ち取らむ。但し故地を得れば即ち和を交さんことを請ふ。朕、その言既に順なるを以て、許さざるべからず。昔斉の桓、土の諸侯を列す、尚ほ亡国を存す。況んや朕は万国の主たり。豈、危藩に郵らざるべけんや。王、兼ねる所の新羅の城、並びに宜しく其の本国に還すべし。新羅、獲る所の百濟の俘虜、亦遣はして王に還さん。然る後、患を解き、紛を親き、戈を韜め革を偃め、百姓、息肩の願を獲、三蕃、戦争の勞無からん。比夫、血を刃亭に流し、屍を疆場に積み、耕織並びに廢す、士女の無聊、豈、年を同じうして語るべけんや。



王若し従ひて進止せずば、朕すて已すでに法敏の請ふ所に依つて、其の王との決戦に任ぜん。亦、高麗に約束せしめ、遠く相救恤きゆうじゆつするを許さず。高麗若し命を承けずば、即ち契丹きつたんの諸蕃をして、遼沢りょうたくを渡りて、入りて抄掠しやうりやくせん。王深く朕の言を思ふべし。自ら多福を求め、審つまびらかに良策を図り、後悔のこを貽すなかれ。

さきに太宗が与へた詔とは大分變つてきてゐることに気づく。新羅から奪つた土地を返せ、といふのである。

永徽五年、新羅の真徳女王が薨じたので、高宗は詔して金春秋を立てて王（武烈王）とした。

永徽六年、程名振ていめいしん、蘇定方そていはうをして高句麗を伐たしめた。これよりさき、百済が高句麗・靺鞨まつかつとともに新羅の北境三十余城を取つたので、新羅が遣使求援したからである。

・ 顯慶三年、程名振、薛仁貴高麗を攻む。四年、契苾加力けいひつかりきをして遼東を攻略せしむ。

かくして顯慶五年の百済討伐となつたのであつて、高句麗を攻めて攻めあぐんでゐた唐が新羅と結び、百済を残して、高句麗を夾撃するに至つた。この戦略の轉換が、誰の

獻策によるものか明らかではないが、百濟滅亡の戦後処理に当った熊津の都督・劉仁軌りゅうじんきの上言の中に、

「今、天子、高麗を滅めつせんと欲す。先づ百濟を誅ちゆうし、兵を留めて鎮守ちんしゆ、其の心腹しんぷくを制す……今、平壤勝たず、熊津又また拔ぬけば、百濟の燼復えんまた炎もえん。高麗の滅めつ、期する無し。」といふ言葉がある。百濟征討の主目的が高句麗征討にあったことがわかる。

また、既述のごとく、伊吉博徳いきふくの記録によれば、彼が唐朝に抑留されたのは、百濟征討軍の計画を秘匿ひとくするためであった、と考へられるから、その間、一種の政策転換が行なはれたのである。

日本が唐の政策転換をはっきりと知ったのは、博徳の報告によつてであらう。

「日本書紀」には、「高麗の沙門道頭しあもんどうとうの日本世記に曰く」として、「春秋智、大將軍蘇定方の手を借りて、百濟を挟み撃ちて亡ぼしつ」といふ文を引いてゐる。また「其の注に言はく」として、「新羅の春秋智、願を内臣蓋金がいきんに得ず。故、唐に使して、俗の衣冠を捨てて、媚を天子に請して、禍を隣国に投じて、斯この意行を構かまふといふ」とある。つまり、金春秋が高句麗の内臣蓋蘇文に百濟討伐の軍を請うたが拒絶されたので、唐に使

して、唐の衣服を採用し、唐の高宗に取り入って、遂に百済挾撃の計略をたてた、といふのであって、「三国史記」及び「唐書」等の記述に合致する。春秋智の行為は新羅から見れば英雄的行為だが、日本、百済に近い高句麗から見れば、許しがたい敵対行為であったわけである。

顯慶五年三月、高宗は神丘道軍しんきゆうどうぐんを發して百済を伐った。神丘道は熊津道ゆうしんとも言つてゐるので、錦江河畔の熊津（いまの公州）・王都扶余に行く道の意であらう。蘇定方そていほうが全軍を統べたことは諸書皆同じであるが、他の將軍については、異同があるので、以下「資治通鑑」に拠つて述べる。

顯慶五年三月、百済は高麗の援たすけを恃たのんでしばしば新羅しらぎを侵した。新羅王・金春秋きんしゆんじゆは上表して救を求めた。辛亥しんがい、左武衛大將軍蘇定方そていほうを以て神丘道行軍大總管と為し、左驍衛將軍劉伯英りゆうはくえい等水陸十万を帥ひきゐて以て百済を伐つ。春秋を以て嶼夷道行軍ぐういどう總管と為し新羅の衆を以て之と勢を合はせた。

つまり、唐の蘇定方と新羅の金春秋とで百済を夾撃したわけである。

八月、蘇定方は兵を引率して成山から海を濟わたった。百濟は、熊津江ゆうしんこうの河口に拠よつて以て之を拒いだ。

つまり白村江、白江口である。成山は城山とも書いて、山東半島東北隅の要港である。

(村尾次郎博士「白村江の戦」)

定方進撃して百濟軍を破る。百濟の死者数千、余皆潰走かいそうす。定方、水陸ひと齊しく進み、直ちにその都城としやうに趨おもむく。

都城すなはち扶余ふよである。

未だ至らざる二十里(王都の手前二十里で)百濟が国力を傾かたむけて来り戦つたので、大いに之を破つた。万余人を殺し、追つて王都の城郭内に入った。百濟王義慈ぎじ及び太子隆りゆうは北境に逃げた。定方は進んで其の城を囲んだ。義慈の次男の泰たいは自ら立って王と為り、衆を帥ひきゐて固守した。太子隆の王子文思ぶんしが曰ふには、王と皇太子が生きてゐるのに、叔父にほが遽にかに兵を擁ようして自ら王となつたのでは、もし能く唐兵を却しりぞくことができたとしても、我が父子は必ず生きてはゐられないだらう。遂に左右を帥ひきゐて城壁を踰こえて投降した。百姓は皆之に従つた。泰たいは止めることができなかつた。定方は軍士に命じ

て城に登り幟を立てしめた。泰は窘迫して城門を開いて命を請うた。是に於て、義慈・隆及び諸城主は皆降った。

百済はもとから五部あり、分ちて三十七郡、二百城、七十六万戸を総べた。詔して其の地を以て、熊津等五都督府を置き、その酋長を以て都督の刺史となした。

十一月戊戌朔、高宗は東都（洛陽）宮城の則天門樓に臨御し、百済の俘虜を受けた。そして其の王義慈以下、皆之を釈放した。

唐に抑留された遣唐使の伊吉博徳らが見たのはこの光景である。

十二月壬午、左驍衛大將軍契苾加力を涇江道行軍大総管と為し、左武衛大將軍蘇定方を遼東道行軍大総管となし、左驍衛大將軍劉伯英を平壤道行軍大総管となし、蒲州刺史程名振を鏤方道総管と為し、將兵、道を分ちて高麗を撃つ。青州の刺史劉仁軌、海運を督し船を覆すに坐して、白衣を以て軍に従ひ、自ら効す。

高句麗の征討がはじまったのである。しかし、百済はまだ完全に滅んだわけではない。遣臣福信らが、北部の任存城の險によって抵抗し、日本に救援を求めたのである。

扶余の陥落の様は「旧唐書」にはもう少し詳しく出てゐる。

定方、城山より海を濟り、熊津江口に至る。賊、兵を屯し江に扼る。定方、東岸に昇り、山に乗りて陣し、之と大いに戦ふ。帆を揚げ海を蓋ひて相續ぎて至る。賊師敗績、死者数千人、自余は奔散す。潮且つ上るに遇ひ、軸を連ねて江に入る。定方、岸上に陣を擁し、水陸齊しく進む。楫を飛ばし鼓譟し直ちに真都に趨く。

蘇定方のこの経験が白村江の戦ひの時ものを言ふのである。

### 大唐平百济国碑

唐は戦勝を記念して紀功碑を建てた。百済の都扶余に建てられた「大唐平百济国碑」である。これは「百济塔」とも「平济塔」とも言ふ石造五層の塔で、その第一層四面に銘文が刻印されてゐる。この銘は「顕慶五年歲在庚申八月己巳朔十五日癸未建」と建立の年号が明記してあり、「洛州河南権懷素書」と、書いた人物の名まで明記されてゐる。



本書の表紙に繪葉書の写真をかけたので見ていただきたい。

唐の百濟討伐戰の戰勝直後に刻印したものであらう。百濟風の美しい塔の四面に戰勝國大唐が百濟平定の紀功文を刻印したものである。

碑文は約一九一四字の文章で、「朝鮮金石總覽上」(朝鮮總督府、大正八年初版、昭和四十六年復刻)に収められてゐる。解釈がむづかしいが、大要を記すと、次の通りである。

まづ唐の皇帝の天下治平の理想を掲げ、化外の地に干戈を及ぼすのやむを得ぬことを述べ、九夷(すなはち百濟)が「斯の險阨を恃み、敢て天常を乱り、東に親隣を伐ち、近くは明詔に違ひて、北に逆豎に連り遠く梟声に応ず」といふ。つまり、百濟が天地の秩序を乱して、東隣の新羅を攻略し、唐皇帝の詔勅に反して北方高句麗と結托し、さらに滿洲辺の靺鞨あたりとも連絡して反逆した、といふのである。かくして、唐皇帝は、この乱逆を正すべく、親征に先だちて、先軀の軍を遣はした。

そこで使持節神丘峴夷馬韓熊津等一十四道大總管左武衛大將軍上柱(國)(唐)國公蘇定方(唐)の戰功をたたへ、以下、副大總管冠軍大將軍□□衛將軍上柱國下博公劉伯英、副大總管使持節隴州□□事隴州刺史上柱國安夷公董寶、副大總管左領軍將軍金仁問の名をあ

げてそれぞれその徳をたたへ、左□軍總管右屯衛郎將上柱国□阿師、右一軍總管使節溜州刺史上柱国于□嗣、峒夷道副總管右武侯中郎將上柱国曹繼叔、行軍長史岐州司馬杜爽、右一軍總管宣威將軍行左驍衛郎將上柱国劉仁願、それぞれ奮戦の次第をのべ、遂に百済を平定して恩威を示し、「其の王扶余義慈及び太子隆、自外王余孝一十三人並びに大首領大佐平沙吒千福国辯成以下七百余人」を捕虜とし、「五都督を置き、卅七州二百五十県、戸二十四万、口六百二十万、各々編戸を斉へ、咸蛮風を変じた」と記してゐる。つまり、唐が百済を平定し服属せしめたといふのである。

この塔は、百済にとっては名譽な碑文ではないが、五重の石塔が美しいのと、亡国の悲話とを伝えるために、遺蹟として観光地の中に入つてゐる。たしかに塔は美しく、銘文も、はじめの方ははっきり読みとれて、訪れるものの感傷をさそふ。

また扶余美術館には、蓮池といふ大石槽があるが、百済時代のこの石槽の側面にも、百済塔の銘文と同文のものが刻印されてゐるといふことである。(輕部慈恩氏「百済遺蹟の研究」)。これは、囲ひがしてあつたために銘文まで気がつかなくつた。しかしこの石槽にも百済の討伐を刻印したのは、唐の蘇定方が命じたのであらうが、よほどの執念で



蘇定方紀功銘蓮池（扶余美術館）

ある。

(五) 唐から見た日本

百済が日本に救援を求めたことを唐が知らなかったわけでもあるまい。三韓諸国が倭国を大国として敬重したことは「隋書」に見えるが、唐初の記録には、日本についての記事がほとんどない。それでは、唐は日本をどう考へてゐたのだらうか。それを示すのは、「旧唐書」などの後世に書かれた歴史書ではなくて、むしろ貞観十年（六三六）魏徵撰進の「隋書」である。魏徵は唐の太宗に仕へた名臣で、貞観の治の前半・

創業の功は房玄齡・杜如晦、後半・守成の功は魏徵の功によるとまで言はれた人物である。「隋書」の本紀・列伝はこの魏徵が書いたのであるから、そこにおのづから唐初、文治派の史観がにじみ出てゐる。その「倭国伝」は、唐初当時の知識人の日本観とみてあやまりあるまい。房玄齡らの奉勅撰による「晋書」も同じ性質の資料としてとりあげることができ、その「倭国伝」は、ほとんど「魏志・倭人伝」以来の倭国観を踏襲するのみで、当時の日本についてはふれてゐない。推古朝にふれたのは魏徵の「隋書」のみである。

唐の歴史を書いた「旧唐書」は西暦九四六年の撰で、唐初の記事は信憑性が高いといふが、その列伝に、「倭国伝」と「日本伝」とがある。つまり「旧唐書」に至ってはじめて「日本」の国名が中国正史にあらはれ、それ以後「新唐書」からは「倭国」をやめて「日本」とした。それまでは「倭国」と称せられたのである。「日本天皇」は「倭王」であつて、「王」は中国天子に冊封され天子に臣従する「王侯」の「王」である。「倭王」は皇帝・天子に帰属するといふのが、中国正史の倭国についての基礎概念であつた。中国天子は文字通り天子で、世界国家の支配者を理想としてゐるから、周辺の民族国家の

独立を認めなかった。皆、「王」に封ぜられるのである。ちょうどこれを書いてゐる時、西嶋定生博士の「東アジア世界と日本」（読売新聞、四十七年九月中連載）が発表されて、この刪封体制が明瞭に説明されてゐる。

「隋書」の「倭国伝」には、この点に関する大問題が提起されたのである。

「隋書」は他の正史と同じく諸外国の記事を歴史上の人物の伝記を述べた「列伝」の中に載せてゐる。すなはち、外国史ともいふべきこの箇所を撰者は東夷、南蛮、西域、北狄の四卷にわけてゐる。そこで東夷伝とか南蛮伝とかいふのである。普通の言ひ方をすれば倭国史とか百濟史とかいふべきところである。

「東夷伝」は、高麗、百濟、新羅、靺鞨（満州）、流求国（台湾）、倭国の伝である。

その「倭国伝」に、隋の煬帝の開皇二十年（六〇〇）と大業三年（六〇七）の遣使の記事がある。隋書の本紀に載せなかったのは、東夷・未開国として扱ったからであらう。

大業三年、其の王多利思比孤、遣使朝貢す。使者曰く、「海西の菩薩天子、重ねて佛法を興す。故に遣はして朝拝す」と。兼ねて沙門數十人來りて佛法を學ぶ。其の国書に曰く、「日出処の天子、書を日没処の天子に致す、無恙なりや、云々」と。帝、之を

覽て悦ばず。鴻臚卿に謂ひて曰く「蛮夷の書、無礼なる者有り。復た以て聞する勿れ」と。

隋の煬帝の大業三年は日本の推古天皇十五年である。「日本書紀」には、秋七月三日「大礼・小野臣妹子を大唐に遣はず、鞍作福利を以て通事とす」とある。翌十六年妹子は帰国するが、時に斐世清らが妹子らに随いて筑紫に到着したことが記されてゐる。

「隋書」にも「明年、上、文林郎斐清を遣はして倭国に使ひせしむ」とあるから、「書紀」と符合する。

「書紀」には、この時の国書はないが、翌十六年、さらに妹子が遣隋大使として派遣されてゐて、その時の天皇の「唐の帝を聘ふ」「辞」といふのが記されてゐる。

東天皇敬みて西皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客斐世清ら至りて、久しき憶ひ方に解けぬ。季秋、薄くに冷し。尊、如何に。想ふに清念にか。此は即ち常の如し。今、大禮蘇因高、大礼乎那利等を遣して往でしむ。謹みて白す。具ならず。

「隋書」所載の「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。無恙なりや。云



々」(日出処天子致書日没処天子無恙云々)のどこに「無礼なるもの」があつて、煬帝が悦ばなかったのか。「日出処」と「日没処」との対照がそんなに無礼なのか、どうもよくわからなかったが、最近「隋書」や「唐書」を読んでみてやっとわかった。

つまり、「天子」といふ言葉がいけないのである。中国皇帝からは「倭王」にすぎない日本天皇を、中国皇帝と対等に、「天子」と言ったのが、「無礼」なのである。

雄略天皇が宋の順帝に提出した上表文(四七八年)が、「宋書」に残つてゐるが、結局「使持節・都督・倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国軍事・安東大將軍・倭王」の称号を与へられたもので、単なる「倭王」ではないが、「王」であることに変わりがない。「王」とは前述の通り「王侯」の一にすぎない。せいぜい半独立国の支配者である。

当時三韓各国は、それぞれ隋・唐の皇帝から、高句麗王、百濟王、新羅王に封ぜられるのが例であつた。「唐書」を見ると、三韓の各国については王位の変るごとに王に封ずるの記事を残してゐる。唐の太宗の高句麗親征の大義名分は、高句麗の大臣蓋蘇文が建武王を殺して、勝手に高蔵を建てて王としたことが、大義名分に反するといふのである。

日本天皇が、「倭王」の地位からはなれて、隋帝国と対等の関係を示す「天皇」とか「天子」とか称することは、隋の皇帝の權威を傷つけるといふのである。

したがって、「日出処天子」は勿論、「東天皇」も承認しがたいわけである。「日本書紀」(七二〇年)の編者たちが、「隋書」(六三六年)を見たかどうか、にはかに決めがたいが、あるいは「隋書」の記事を見て、無礼のことのないやうに「日出処天子致書日没処天子」を「東天皇敬白西皇帝」と改めたのではないかとも思ふ。そして、これが讓歩のぎりぎりだと思つたであらう。「隋書」「日本書紀」をそのまま信ずれば「日出処天子」が十五年の国書であり、「東天皇」が翌年の「聘辞」となる。

「天皇」の号はこの国書を確実な初見とし、「天寿国繡帳」(聖德太子歿後、王妃橘大女郎の作)の例を早い例とする(岩波・日本古典文学大系「日本書紀」補注16)といふから、だいたい推古朝からと見てよいであらう。

さう考へると、「日出処天子致書日没処天子」も「東天皇敬白西皇帝」も、ともに隋帝国と対等の独立国としての交際を日本が求めたものといふことができる。別の言ひ方をすれば、国際的に独立を宣言した、といふことである。といふことは、それまでの日

本——「倭国」が属国であったとか半独立国であったとかいふのではない。たゞ中国が「東夷」の「倭国」として「王」を封ずる、言ってみれば半独立国と考へてゐたのに対して、独立国であるといふことを認めさせようとしたのである。

「日出処天子」の「日出処天子」を日本語でどうよむのか、私にははっきりわからないので保留するが、「大漢和字典」を調べてみると、この一例だけがあつて、これ以外に用例のない言葉のやうに見えたが、「魏志」に用例があつた。

「日出所」は「魏志・東夷伝」の序文にある。

「……其の後、高句麗叛す。又偏師を遣はし、討窮を致し、極遠に追ひ、烏丸・骨都を躐えて、沃沮を過ぎ、肅慎の庭を踐み、東、大海に臨む。

長老説くに『異面の人有り、日の出づる所に近し』と。

逆に諸国を周視し、其の法俗を采り、小大区別し、各々名号有り、得て詳記すべし。夷狄の邦と雖も、俎豆の象存す。中国礼を失するも、之を四夷に求むるに猶信あり。

故に其の国を撰次して、其の同異を列し、以て前史の未だ備へざる所に接せしむ。」

「日本」といふ国号は「大化以後に定まったものと考へられる」（古典文学大系本「日本書紀」補注）といふ説に従ふなら、「日出処」といふ発想は「天つ日継」「日の神の御子」等のヤマトコトバに通ふものがあるので、「魏志」から採用したのであらう。日本側に説明はないが、「日本国は倭国の別称なり。其の国日辺に在る故を以て、日本を以て名と爲す、或は曰ふ、倭国自らその名雅ならざるを惡み改めて日本と爲すと」（旧唐書・倭国伝）とか「倭の名を惡み、改めて日本と号す。使者自ら言ふ、国日出づる所に近し、以に名を爲すと」（新唐書・倭国伝）とかいふ。さうした自己認識がやがて「日本」といふ国号を生み出したものであらう。「日出処」の国書が大業三年（六〇七）として、大化の改新（六四五）まで約四十年、聖德太子の天皇中心国家の思想は大化の改新まで一貫すると考へられるから「日本」の国号のもとを「日出処」といふことばにさかのぼることができるやうである。

この国書に対する隋の煬帝の返書を、小野妹子が帰途百済で奪はれたといふことで、大問題になった、と「書紀」には書いてある。群臣議して流刑と定めたのを、天皇は勅して、赦したまうた、とある。

ところが、使主斐世清はいせいせいは、入朝の日、「親ら書を持ちて、兩度再拜して、使の旨を言上して立つ。その書に曰く」といふことで「皇帝、倭皇に問ふ」にはじまる国書風の文章が記されてゐる。

その書には「丹款なる美みさをを、朕嘉ちんよみすること有り」と書いてあつて、「蛮夷の書無礼なるものあり、復た以て聞すること勿れ」と言つて「悦ばなかつた」といふ「隋書」の記事の調子は皆無である。

これを兩方とも——すなはち「隋書」の記事も「日本書紀」の記事もこのまゝに信ずれば、隋の煬帝が小野妹子に与へた国書はもつときびしいもので、日本の独立を認めぬやうなものだつたのだらう。小野妹子は、とてもこれを推古朝廷に提出できなかつた。そこで自分の責任でこれを破棄してしまつたにちがひない。斐世清も、そのことは知つてゐたらうが、あまり尊大な書面を日本に持つて行つたのでは、自分の身があぶないから、「使の旨」を自分で書いて、それを「言上」したのであらう。中国書なら「璽書」と書いて「皇帝の書」を示すのに、これにはたゞ「書」とのみあるから、扱ひは「国書」扱ひをしたが、実際の国書ではなかつたのであらう。

「皇帝、倭皇に問ふ」は、太宗の詔の「皇帝、〇〇王に問ふ」（本書八五、八九頁参照）と同じ形式である。「倭皇」は「倭王」とあったのを「書紀」編者が「倭皇」と改めたのであらうと言はれてゐるが、あるいは斐世清その人が妹子と相談してさう書いたのかも知れない。

結局、小野妹子の罪が問はれなかったことは、斐世清の帰国につけて、再び小野妹子を大使として隋に遣はし、学生、学問僧八人を連れて行かせたことを見ても察せられる。この八人の中には高向玄理、僧旻、南淵請安など、大化改新の顧問格として活躍する人材を含んでゐたのである。（明治維新当時とよく似てゐる。）

その時、妹子に持たせた書面は、斐世清の智恵にならって国書とせずして、言上書としたのではなからうか。「天皇、皇帝を聘ふ。其の辞に曰く」とあるので、そんな想像もできる。もっとも国書を持たない大使といふものは考へられないとすれば、「東天皇敬白西皇帝」は「日出処天子致書日没処天子」よりも、丁重であらうから、煬帝の機嫌を考へて、かう変へたのかも知れぬ。

それにしても「倭王」ではないので、「東天皇」は隋帝国と対等の独立国の君主であ



る。推古天皇十五年、十六年、兩度の遣隋使小野妹子は、日本独立宣言とでもいふべき国書を隋にもたらしたのである。いふまでもなく、摂政聖徳太子の上奏によることであつたらう。

推古天皇十一年十二月冠位十二階制定、十二年四月憲法十七条發布、十三年銅及び繡の丈六の仏像製造、十四年、勝鬘經・法華經講經、十五年神祇祭拜、十五年妹子の遣隋となり、「日出処天子」の国書が書かれたのである。聖徳太子が親ら執筆せられたものと私には思はれる。

さて、この「隋書」の「列伝」を書いたのは、ほかならぬ魏徴ぎしやうであるから、倭国が、隋・唐の羈絆を受けぬ独立国家として、唐の世界国家の前面に立つてゐることを、彼ら唐初の臣僚たちは考への中に置いたであらう。もっとも、その力量の評価に至つては、問題にしてゐなかつたであらうが。

しかし、この日本の独立宣言は、東アジアの歴史には、重大な足跡をのこすことになる。

やがて三韓の百済が減び、高句麗が減びるが、そしてこれを新羅が統一するが、この

はじめての三韓の統一国家新羅王朝は、やうやく唐の羈絆を脱して、自立独立国家に成長し、東アジアに「新羅」といふ独立国を生み出すからである。もっとも新羅は唐の冊封を受けたが、それは次第に名目化したので、独立国と言ったのである。

爾来、迂余曲折はあるが、日本、朝鮮は、独立国として成長し、東アジアに中国、朝鮮、日本の国際関係といふ現代文明の基本的性格を打ち出すに至るのである。この際、中国の東北、満洲が問題になるが、いまはふれない。たゞ、満洲の向背が爾後の東アジアの動揺の原因となったことを指摘して、その重大性を暗示するにとどめる。

もっとも、それまでに、なほ、東アジア各国は白村江の戦ひを中心として陣痛の苦しみと悩みをなめねばならなかった。

追記・「日出処天子致書日没処天子」の国書冒頭の文は、当時の国書そのままであったと思ふ。何度もいふが魏徴の「隋書」の出来上ったのが貞観十年（六三六）で、この国書が隋朝に届いたのが大業三年（六〇七）、（つまり隋書の成る年から考へて三十年前の国書である。それに魏徴は改作を加へる必要も、偽作する必要もなかったと考へられる。

「云々」とある後文は、恐らく一般的の文案で、特別に取り出す必要がなかったのであらう。「日本書紀」の方は「国書」であつたのかどうかわからないのと、七二〇年の編成だから、疑へば疑へるが、これも私は「書紀」の書いた通りだと思ふ。疑ふ必要が無いからである。そして恐らく、太子のお書きになつたものであらう。もっとも文案の形式や用語法は、斐世清の言上した隋の煬帝の書面の後文や、唐の太宗の百済王、新羅王に与へた詔の後末と同じやうなものである。当時の国書の文体になつたもので、取り立てていふことはないが、皇帝の文体をとつたところに、対等の交際を考へてゐる筆者の思想がみられるのである。

当時、南北支那を統一して世界国家として宇宙に君臨した隋や唐と対等の国家として交際しようといふことが、当時として、破天荒のことである。東アジアの文明成立以来のことではなからうか。

それを支持したものは、太子の日本文化に対する確信である。それは、以後朝廷の確信として継承された。

百済の救援に應じて日本が立つたのも、もとはこの日本の独立意志のあらはれとみて

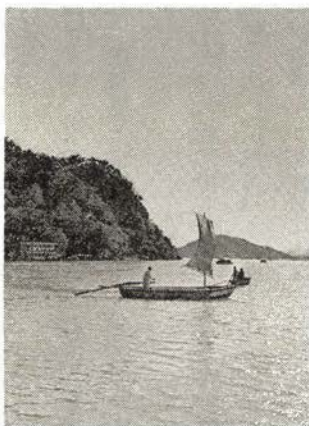
よいであらう。

この聖徳太子の信仰思想にもとづく日本文化創業の内の事業と日本の政治的独立の確立との表裏の関係は、黒上正一郎先生の讃仰研究「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」に詳しい。



### 第三章 百済の滅亡

- (一) 百済の滅亡の歴史
- (二) 「三国史記」
- (三) 「百済本紀」 義慈王二十年
- (四) 「新羅本紀」から、新羅と百済
- (五) 百済と日本



白馬江・落花岩。百済滅亡に際し王都扶余の女官三千がここから身を投げたといふ。



## (一) 百濟滅亡の歴史

くりかへすことになるが、百濟くだらが亡びたのは西暦六六〇年のことである。百濟・義慈王の二十年、新羅・武烈王(金春秋・太宗)の七年、高句麗・宝蔵王の五十九年、日本・齊明天皇の六年、唐・高宗の顯慶五年にあたる。

百濟の歴史は「三国史記」の「百濟本紀」がまとまった最初のものであり、また一番古いものである。その滅亡の歴史もまた当然「百濟本紀」に拠るべきである。「百濟王・義慈王二十年」の記事がこれにあたる。そこに亡国の次第が書かれてあるが、読んでみて驚いたことには、それが殆んど「旧唐書」乃至「唐書」からの引用にすぎないといふことである。

したがって、そこには、国の滅びるのを悲しんだはずの百濟の人の思ひはあらはされてゐない、と言ってよからう。

書いたのは高麗朝に仕へた政治家で学者の金富軾きんふしやくといふ人で、一一四六年。百濟の滅

亡が六六〇年。しかも、百済を滅したのは、唐と新羅で、やがて百済の同盟国の高句麗も滅び、新羅が半島を統一したのであるから、百済は唐に征服され、つづいて新羅に征服されたわけである。百済の立場からの歴史が書かれなかったのもいたしかたあるまい。しかし、私にはシヨックであった。国が滅びるといふことは、その国を作り固めてきた人々のおもひが、伝へられないといふことで、それをまざまざと示すのが、百済の亡国の歴史である。

一口で言ってしまうへば、百済の亡国の歴史は、戦勝国であった唐の記録にしか残らなかったといふことである。

さいはひ「日本書紀」があつて、わづかに百済の人の嘆きを伝へるが、これも同盟国日本の記録であつて、百済人の書いた生き生きとした自国語の歴史ではない。

そこで、百済滅亡の歴史は「三国史記」に拠つても、「旧唐書」に拠つた前章の「唐の百済討滅」と同じものになるが、「百済本記」には、その前後に多少の記事を加へてゐるので、その点を考慮して、百済滅亡の戦史を述べてみよう。それにはまづ、「三国史記」そのものについて説明しなければなるまい。



アジア地図（「社会科中等地図」から）

(一) 「三国史記」

朝鮮半島に統一国家が誕生したのは、七世紀後半、百済・高句麗両国の滅亡に乗じて新羅が半島を統一した時のことである。それまでは、高句麗、百済、新羅の三国鼎立の時代であった。これを三国時代と言っている。

六六〇年に唐・新羅の連合軍が百済を滅した。唐は百済義慈王及び太子隆を俘虜とし、百済の故地に五つの都督府を置いて百済を唐の軍政下に置いたのである。役人には百済の酋長を任じたが、最も重要な熊津(旧王都)の都督には唐将王文度(後、劉仁軌に代る)、都城扶余(泗泚)の守将には唐将劉仁願を命じた。かくて百済王朝は三十一王六百七十八年にして滅びたのである。唐の高宗顯慶五年のことである。

ついで、白村江の戦(六六三年)の後、唐高宗の麟徳二年、百済の旧都熊津城に唐将劉仁願の招請により百済の王子扶余隆、新羅の文武王(金法敏)が会合し、白馬の血をすゝめてともに唐の皇帝に藩服(藩国として服属すること)を盟った。しかし、前百済太子、熊津

の都督を命ぜられた隆王子は、新羅を懼れて、唐の京師長安に帰ってしまった。百済王の後継者として百済の故地を支配する権利を放棄してしまったわけである。

六六八年、唐の高宗の総章元年、唐将李勣は遂に高句麗の王都平壤を陥し、宝蔵王及びその子の男健たちを俘虜とし、安東都護府を平壤に置き、唐将薛仁貴を都護とした。かくして高句麗の王朝は、二十八王、七百年にして滅び、唐帝国の完全な支配下に入ったのである。

ところが新羅の文武王（金法敏）は、高句麗及び百済の遺民が唐の支配に抗して蜂起する混乱に乗じて、唐将と戦ひ、結局、鴨綠江以南の半島を統一してしまつたのである。七世紀後半を統一新羅王朝の半島統一とするのは、右のやうな次第である。

さて、当時の歴史を書いたのは「三国史記」である。この史書は、統一新羅王朝に代つた高麗王朝（九一八—一三九二）の史家金富軾の書いたものである。

「三国史記」といふ書名の「三国」は、前にも書いた通り新羅、高句麗、百済三国のことである。「史記」は、いふまでもなく司馬遷の「史記」を採つたもので、「歴史」の意味である。「三国史記」はつまり「三国史」の意味である。

内容は「史記」の紀伝体に抛り、「新羅本紀、高句麗本紀、百濟本記」——三国それぞれ  
の王朝中心の編年史と、「年表」「志」——（祭祀、樂、車服、屋舎、地理、職官）  
「列伝」（金庾信上・中・下以下約五十人の伝記から）成り立ってゐる。

「新羅本記」は始祖赫居世居西干から最後の敬順王まで、「高句麗本記」は始祖東明  
王から宝藏王まで、「百濟本記」は始祖温祚王から義慈王まで、それぞれ始祖から滅亡  
までを敘述してゐる。

書いたのは高麗の金富軾で、高麗の仁宗の二十三年（一一四五）、王命を奉じて撰した。  
前の新羅王朝の滅びたのが九三五年であるから、それから約二百年を経て書いたこと  
なる。

金富軾（一一〇七—一一五二）は、高麗王朝の第十六代仁宗王に仕へた学者・政治家であ  
る。仁宗の六年（一一二八）西京の平壤に妙清といふ妖僧があらはれて王を迷はし、遂に  
反逆を謀つて西京に抛つた。時に金富軾は元帥として乱を平げ、歴戦の末、彼らを討滅  
し、平壤を回復した。四二年官を退いて致仕し、四五年に「三国史記」を撰した。さら



に、仁宗の死後、毅宗の勅命によって「仁宗実録」をも撰した。經史の学に通じた大政治家で慶州の人である。「高麗史」に列伝がある。

「三国史記」五十卷各卷の冒頭には、「輪忠定難靖国贊化同徳功臣・開府儀同三司・檢校太師・守太保・門下侍中・判尚書吏礼部事・集賢殿大学士・監修国史・上柱国・致仕・臣・金富軾、奉宣撰」といふ長い肩書きと前書きが付いてゐる。

最初の「輪忠」以下「功臣」までは朝廷から与へられた称号で、「忠を輸し難を定め国を靖んじ王をたすけ王化をしき徳を同じくする功臣」といふ意味である。「開府儀同三司」は「儀、三司（司空、司徒、司馬の三相）に同じ」で——淮大臣の意、「開府」は修飾。「檢校太師」は「淮太師」の意、「太師」より少し軽い。「太師」は次に出てくる「太保」とともに、「三師・三公」の「三師」のうちで、最高の官。「檢校」は「淮」ほどの意。「守」は、位が低く官の高い時に用ひる。「門下侍中」は「門下省の長官」。「門下省」は主として勅命の起草を扱ふ。「判」は「知」と同じであるが、高官のものがそれより低い職務を兼担する時に用ひる。「尚書吏礼部事」は「尚書省———」行政府———六部のうちの吏部礼部の事務」であるから、門下省の長官でありながら特に尚書省の吏・



礼二部の長を兼ねたのである。「集賢殿」は「中書省所属の官で、図書の蒐集整理等を扱ふ官」、「大学士」は「太政の輔佐と太子の補導を行ふ宰相の官に与へられた名誉称号」、「監修国史」は「国史の監修者」、「上柱国」は最高の勲位。「致仕」は「退官隠居の身分」、「臣」は小字で書いて、あとの「奉宣撰」に対する。「奉宣撰」は勅宣を奉じて撰述したことを意味する。

高麗朝の智識人が中国の経史に詳しいのに自国の歴史にくらいことを嘆じて、非才をかへりみずしてこの史書を書いた、と、彼は跋文の「三国史を進むるの表」に書いてゐる。事大思想の強いところがちがふが、まづ朝鮮の「日本書紀」、朝鮮の太安万侶といつたところであらう。

彼の七十才の時の著述といふことになる。彼は七十七才で死んだ。

七二〇年にできた「日本書紀」には、「百済記」「百済本記」「百済新撰しんせん」といふ百済の歴史を書いた書物からの引用文のあることは周知しゅうちのことで、これからすると、当時日本にかういふ書物のあったことが知られる。また斉明天皇紀には高麗僧道顕どうけんの「日本世せい記」といふ書物の名も見えるから、高句麗の亡命者が高句麗の歴史を書いたことも想像

できないことはない。中国、朝鮮の歴史書が、王朝の滅亡後に記されることは当然のことであるから、「三国史記」の書かれる前に、「百濟記」とか「高句麗記」とかあるいは、新羅の歴史さへも存在したことは想像できる。みな漢文であるから、書き易かったらう。

しかし、「三国史記」は、それら三国の一国の歴史ではないところが重要で、三国を併せて新羅といふ統一王朝ができ、いはば、東アジアに、日本について、独立国家が誕生したことを書いたところが重要なのだと思ふ。朝鮮におけるはじめての歴史書と言はれるのももつともなことである。新羅の半島統一後、約五百年を経過してゐるので、やゝ遅きにすぎることが、半島の独立、統一国家の建国のいはれを説いたものといふことができよう。自国語で自国の歴史を書くこと、——これをもって本来の意味で国家の独立といふことができるとするなら、「三国史記」は漢文であつて国語表現といふことはできないから、朝鮮文明の独立は、日本の「古事記」(七二二年)にくらべて、相当のへだたりがあるとみなければなるまい。しかし、朝鮮最古の史書といふ「三国史記」の成立をもつて、朝鮮の統一と独立の意志の表明とみることも、納得がゆく。

富軾の仕へた高麗王朝は、新羅王朝のあとを継いだので、富軾は、「三国史記」の最初に「新羅本紀」を書き、「列伝」にも、最初に新羅統一王朝の功臣の金庾信きんぐしんをあげ、上中下三巻をこの一人物にあててゐる。つまり、新羅の半島統一を「三国史記」の最大テーマとして扱ってゐるわけである。その「列伝」は、新羅人中心である。

「新羅本紀」のつぎに「高句麗本紀」をあげたのは、高麗王朝の始祖を高句麗王朝に求めたからではあるまいか。

百済に対してはあまり同情的でない。唐天子の詔に従はなかったことをもって滅亡の因とするあたりに、そのことがあらはれてゐる。

最近、新羅の古都慶州けいしゅうと百済の故都扶余とを訪ねたが、慶州の隍城公園こうじょうに金庾信將軍の銅像が立ち（二九六六・四・一）、扶余に楷陌將軍かいはくの銅像が立ったのを見た。いづれも「三国史記」・列伝中の人物で、白村江戦役を中心にする三国統一の動乱時代の英雄である。（銅像は一四六頁参照）

金庾信と楷陌とは、千三百年の昔、互ひに敵として戦った新羅の將軍と百済の將軍とであったが、いづれも一命を国にささげた勇將で、その心が朝鮮独立のもともであるこ

とをこの二つの銅像は示すものであらう。金富軾の願ひもまた、この朝鮮の統一と独立とにあったにちがひない。

(三) 「百濟本紀」義慈王二十年(現代語訳)

春二月、王都の井戸の水が血の色になった。西海の浜に小さな魚が出て来て死んだ。人民がこれを食べたが食べきれなかった。泗泚川(熊津江、王都扶余のあたり)の水が赤くなって血の色のやうになった。

夏四月、蝦蟇ひきがえが数万匹樹の上に集まった。王都の人が理由もないのに走りまはった。つかまへるものがあると、たちまち倒れて死んでしまふ、そんな人間が百人以上も出た。財物の亡失は数へきれない。

五月、暴風雨があつて、天王・道讓二寺塔を震はせた。また白石寺の諸堂を震はせた。黒雲が竜のやうに、東西から空中にあひたゝかった。

六月、王興寺の衆僧が皆、船の楫のやうなものが大小にしたがつて寺の門に入るのを

見た。

野鹿のやうな犬が一匹、西方から泗泚川の河岸に来て、王宮に向つて吠え立てたが、急にどこかへ行ってしまった。すると王都の群犬が路上に集まって、或いは吠え、或いは哭き、何時か経つて散つていった。

鬼がひとり宮中に入つて大声で叫んだ「百済亡ぶ、百済亡ぶ」と。たちまち地中に入つた。王はあやしんで、その地を掘らせてみると、深さ三尺ばかりのところかみに亀が一匹ゐた。その背に文字があつた。「百済は月輪げつりんに同じ。新羅は新月しんげつの如し」と。王はこれを巫師うらなひしにたづねた。巫者のいふことには「月輪に同じとは満まんである。満つれば虧かく。新月の如しとは未満みまんである。未満であればこれから盈みつるのである」と。王は怒つて、この巫者を殺した。或るひとの言ふには、「月輪に同じとは盛せいである。新月に同じとは微びである。意味は、百済の国家は盛んであつて、新羅の侵すことは微かである」と。王はこれを聞いて喜んだ。

ここまでは、一種の伝説的記事で、百済滅亡を予告する怪事件を記してゐるので、歴

史的事実の敘述ではない。出典を求めれば他にもありうる箇所である。「日本書紀」の齊明天皇の記事と似てゐる。問題は、このあとの歴史の敘述で、それを戦勝国の唐の歴史である「旧唐書」や「唐書」などからの引用で済まさなければならなかつたところに、百済の悲劇があつたわけである。しかし、かういふ引用は「高句麗本紀」にも「新羅本紀」にもあてはまるから、著者金富軾の唐文明心酔の結果と言へないこともない。

高宗(唐の高宗)は、左衛大將軍・蘇定方を神丘道(罽夷道・朝鮮道)行軍大惣管(遠征軍大總督)と爲し、左衛將軍・劉伯英、右武衛將軍・馮士貴、左驍衛將軍・龐考公を率ゐ、兵十三万を統べて、以て來り征す。兼ねて、新羅王金春秋(武烈王)を、罽夷道行軍惣管(朝鮮道遠征軍總督)と爲し、その国の兵すなはち新羅兵と勢を合せることとした。

蘇定方は軍を引率して、城山(定山とも。山東半島東北隅の要港Ⅱ村尾次郎博士)から、海(黄海)を渡り、西海岸の徳物島に至つた。新羅王(金春秋)は將軍金庾信(新羅の名將)を遣はし、精兵五万を領して、(陸路)徳物島に向つた。

王(百濟・義慈王)はこの情勢を聞き、群臣を會して戰略をたづねた。





百濟末期における百濟・新羅間の交通路図（輕部慈恩氏による）

佐平(大臣級) 義直(義直)が進んで曰ふには、

「唐兵は遠く大海を渡って来たのです。水になれない者が海上にあれば必ず苦しむでせう。そのはじめて上陸し、士気のまだ落ちつかないところを急撃すべきです。さうすれば目的を達するでせう。新羅の人は、大国・唐の援け(たす)を恃(たの)んで我が百済を軽んずる心がある。若し、唐人が不利になるのを見れば、必ず疑ひ懼れて敢へて進まないでせう。ですから、先づ唐人と決戦するのがよいと思ひます」と。

達率(次官級) 常永等(常永等)が曰ふには、

「さうではない。唐兵は遠くから来て、速戦速決を望んでゐます。その鋭鋒は当ることができません。新羅の人は、以前しばしば我が軍に敗られてゐます。今、我が百済の兵を望み見れば恐れざるを得ません。今日の計は、唐人の路を塞(ふさ)いでその軍の疲れるのを待つのがよろしいでせう。先づ、一軍を遣はして新羅軍を撃ち、その鋭気を折って、然る後、そのよい折を伺(うかが)って合戦すれば、全軍を以て国を守り保つことができると。

王は、ぐずぐずしてどちらに従つてよいかわからない。ちやうどその時、佐平(大臣級)

興首こうしゅが罪を得て古馬こま弥知みちの梟たかに流されてゐた。人を遣はして、之に問ふには、

「事急なり、どうすればよからうか」と。興首曰く、

「唐兵は既に大軍である。しかも軍律は嚴明で、その上、新羅と共に前後からわが軍を挾撃しようとして謀つてゐる。若し平原広野で対陣すれば、勝敗はわからない（負けさうである）。白江（或ひは伐伐浦きばまと云ふ）炭峴たんけん（或ひは沅峴と云ふ）は我が国の要路である。一人の男子が一槍を以て当れば、万人も抜き難い。宜しく勇士を簡えらんで往いて守るべきである。唐兵を白江に入れず、新羅人に炭峴を抜かれなければ、大王は城門を閉じて固く守り、敵軍の資糧しりようが尽き士卒の疲れるのを待つて、そののち奮つて之を討てば、必ずや之を破ることができると。

時に大臣たちはこの言を信ぜずして、曰く、

「興首は久しく獄舎の中にあつて、君王を怨んで国を愛さない。その言は用ひてはならぬ。若し唐兵をして白江に入らせることがなければ、流に沿つて船を方あたべることができない。新羅軍が炭峴のぼに昇れば、小道であるから馬を並べることができない。此の場に當つて、兵を集めてこれを撃てば、譬へば籠の中の鶏や網を離れた魚を殺すやう



楛陌將軍像

なものだ」と。

王は、この大臣たちの説を然りとした。

やがて、唐兵が已に白江、炭峴を過ぎたことを聞き、將軍楛陌を遣はし決死の士五千人を帥ゐて黄山（平原）に出て新羅兵と戦はしめた。合戦四度、皆勝ったが、兵力寡く、力屈して、遂に敗れた。楛陌將軍はここで戦死した。

ここに於て、百濟は兵を合せて熊津口を防禦し、河岸に兵を屯した。唐將・蘇定方は、熊津江の左岸、王都扶余の南方に上陸し、山の上に陣を布いた。之と戦つて我が百濟は大敗した。唐の水軍は、折しも上げ潮に乗じて熊津江を遡行し、船の舳と艫とを接し、鼓を鳴らして進軍した。蘇定方はさらに歩兵と騎兵とを以て直ちに王都に向ひ、一旦休

止したので、我が百濟軍は全軍を挙げて拒いだが、又敗れた。死者万余人。唐兵は勝に乗じて城に薄った。王はのがれたいことを知って嘆いて曰はれるには、

「成忠の言を用ひずして以て此に至るを悔ゆ」と。

遂に太子孝と北方の地方に逃げた。

蘇定方は扶余王城を囲んだ。

王の次男泰は自ら立って王と為り、衆を率ゐて固守した。太子の子の文思が王子隆に謂ふには、

「(義慈)王は太子孝と王城を出で、叔父の泰が勝手に王と為った。若し唐兵が解去すれば、我々はどうして安全でありえようか。」と。遂に左右に縋るものを率ゐて城を出た。人民は皆之に従ったので泰は止めることができなかった。定方は、士をして城壁を超えて、唐の旗幟を立てさせた。そこで泰はせっぱまって門を開いて命ごひをした。

ここに於て、王及び太子孝と諸城と皆降伏した。

定方は、王(義慈)及び太子孝、王子泰、隆、演及び大臣將士八十八人、百姓一万二千八百七人を唐の東の京師(洛陽)に送った。

百済の国はもと五部、三十七郡、二百城、七十六万戸あった。ここに至り、熊津、馬韓、東明、金漣、徳安五都督府を分置し、各都督府が州県を統べ、主長格のものを拔擢して、都督、刺史、県令と為して、之を理めた。

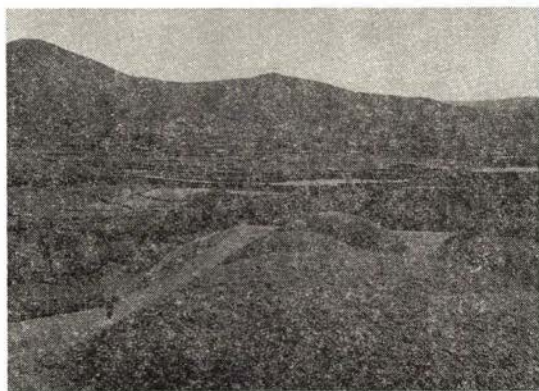
郎将劉仁願に命じて都城を守らしめ、左衛郎将王文度を熊津の都督として、百済の遺民を撫めさせた。

定方が俘虜を献上したので、唐の天子は責めて之を宥した。義慈王は病死した。天子は贈るに、金紫光禄大夫衛尉卿を贈った。旧臣の赴臨を許し、詔して、孫皓、陳督宝の墓の側に葬り、併せて豎碑を為る。隆に司稼卿を授けた。熊津の都督に任ぜられた王文度は海を渡ってから死んだので、劉仁軌を以て之に代へた。

形の上ではこれで百済は滅びて、唐の支配下に入ったことになるが、これですべてが終ったのではない。つぎに福信ら百済復興義軍の活躍から、倭国への救援請願、齊明天皇親征、日唐海戦・白村江戦役とつづいて東アジア各国の勢力が錦江河畔で火を噴くことになるのだ、それは項を改めて述べることにする。

最近扶余を訪ねたところ、楷陌將軍の銅像が建てられてゐて、当地の人の古代史への





扶余の古墳



扶余の風景

郷愁を感じた。慶州には金庾信將軍の銅像が立ってゐる。相戦った將軍の像の立ってゐるのはちょっと見ると不思議だが、考へてみれば、秀吉の豊国神社もあれば家康の東照宮もあるのです、内にたゞかってもそれが真実のものであれば、互ひに心は通ずるので、そのやうにして国の統一はまもられるのであらう。

また、三忠祠といふ三忠臣をまつた祠堂があるが、それは、義直、成忠、興首、三名の忠節を記念するものである。(写真「登場人物」参照)

#### (四) 新羅の側から

百済の滅亡は七世紀後半、東アジアの大事件であつた。前章では唐側から、前項では百済自身の側からこの問題を取りあげてみたが、本項ではもうひとつの重要な相手であつた新羅側から取りあげてみたい。

百済の滅亡を書いた「三国史記」の「百済本紀」が、「旧唐書」や「唐書」からの借物の文章を中心にしてゐることは、前項で述べた通りである。「三国史記」の著者金富軾



金 庚 信 の 墓

の事大主義は徹底してゐて、「高句麗本紀」もまたその最後を、「資治通鑑しじつがん」とか「刪府元龜さつぽげんき」といふ中国の史書に拠つてゐるのである。しかしさすがに三国を統一した新羅に対しては、かういふ非礼は少いらしい。新羅が百済と高句麗とを統一したあとで自国の歴史を書いたことは想像できるから、「新羅本紀」はさうしたものに拠つたのであらうか。ともかく「三国史記」の「新羅本紀」は全くの借り物ではないらしい。もっとも、敵国であつた百済や高句麗に対して好意的なものでないことも、予想の通りである。したがって、「新羅本紀」からする百済の滅亡の歴史は、いままで書いてきたものとは、大分調子のちがふものである。

新羅の善徳女王ぜんとくの十一年、西暦六四二年は百済の義慈王の二年で「新羅本紀」はこの年に、新羅と百済との間に隙ができたと記してゐる。すなはち、この年七月、百済の義慈王が大挙襲来して新羅の西方の四十数城を攻略し、さらに八月党攻城を取って唐との連絡の路を絶たうとした。そこで新羅王は使を遣はして急を唐の太宗に告げた。

この月、百済の將軍が襲撃して来て新羅の大耶城たいや（慶州南道陝川郡、新羅国境の要害）を陥した。新羅の都督品积ひんしやくらがここで死んだ。新羅王は百済を伐つて大耶城の戦に報復しようとして、金春秋（後の武烈王太宗）を高句麗に遣はして援軍を求めた。

初め大耶城の陥おちるや、品积の妻が死んだ。これは金春秋の女むすめである。春秋はこのことを聞いて柱に倚りかゝって立ち、一日中またゝきもしなかった。人が前を過ぎても気がつかないふうであった。やがて言ふことには、

「あゝ、大丈夫たるもの、どうして百済を併呑することができないだらうか」と。

そこで王のもとに詣いたつて言ふことには、

「お願ひ申上げますが、私が王のお使として高句麗に参りまして援軍を求め、百済に対する怨を晴らしたいと存じます」と。

王はこれを許された。

時に高句麗は宝蔵王ほうぞうの元年であつた。前年の冬十月、蓋蘇文がいそぶんが、在位二十五年の建武王を殺害して、その甥おひにあたる蔵（宝蔵）を建てて位を継がしめたのである。この宝蔵王が高句麗最後の王になるので、この辺で二十年後の大事件の役者が皆顔をそろへるわけである。

ついでに言っておけば、この年は、皇極天皇こうぎょく（後の斉明天皇さいめい）の元年にあたる。大化改新の三年前である。

さて、高句麗・宝蔵王は早くから金春秋の名を聞いてゐたので、嚴重な護衛をつけてこれを監督した。春秋が進み出て言ふには、

「今、百済は無道鬼畜の国で、わが新羅の境界を侵略します。我が王は貴国のごとき大国の兵馬を得て国境を侵された恥をすゝぎたいと願つてをられます。そこで私を使者として命をかけて事を執らしめられたのです。」と。

高句麗王が言はれるには、

「竹嶺ちくれいの地はもとから高句麗の領地である。汝が若し、竹嶺から西北の地を返還する

なら、兵を出してもよい。」と。

春秋が報へるには、

「私は君命を奉じて援軍のお願いに参りました。ところが、大王はわが国の患を救つて善隣の交誼を結ぶおつもりではなく、たゞ一介の旅人である私をおどして、領土の返還を迫られる。私はたゞ死ぬだけです。その他のことは知りません。」と。

高句麗王は金春秋の言の不遜を怒り、これを別館に監禁した。

春秋は潜かに使ひを放つて本国新羅の王にこの状態を報告させた。王は大將軍金庾信に命じて決死の士一万人を率ゐてこれに赴かせた。庾信は行軍して漢江を過ぎ、高句麗の南境に入った。高句麗王はこれを聞いて春秋を放免して帰国させた。

ここで名將金庾信が登場したのである。「三国史記」の「列伝」の部は、新羅人が中心であるのは成立上当然のことであるが、中でもこの金庾信には、上、中、下の三巻をあててゐる。新羅の興隆、三国の統一の功臣として、その盛名を歴史にとどめたのである。いま慶州にその銅像が立ってゐる。

金庾信伝によると、金官国加耶の人で、父將軍舒玄が庚辰の夜の靈夢によって夫人が



妊娠したので、「庚辰」の「庚」に似た「庚」と、「辰」の音をとった「信」とで、古の賢人の名と同じ「庚信」を名とした、とある。

青年時代から救国の志に燃え、百済を伐つ誓ひを立てた。

金春秋が百済討伐の兵を高句麗に求めようとして出発するに当って、血盟するところがあつたのである。

さて、金春秋は盟友金庚信の決死の進撃によって助かったが、高句麗との連合には失敗したので、唐との関係を深めることとし、使を出して、唐に事情を報告し、救援の兵を請うた。

善徳王の十三年、唐の太宗は、司農丞相（農業大臣か）里玄奘（りげんしやう）を遣はして、高句麗に賜った璽書をもたらしした。その璽書は、高句麗に新羅侵略の兵を直ちに止めることを命じたもので、若し侵略をつゞけるならば「明年師を出して爾（なんじ）の国を撃たん」といふ強硬なものであつた。しかし、高句麗の実力者蓋蘇文（がいそぶん）はこれに従はなかつた。

十六年善徳王が薨じて真徳王が立った。勝鬘（しょうまん）といふ名の女王であつた。その二年、金春秋及びその子の文王を遣はして唐に朝貢せしめた。唐の太宗の貞観二十二年、日本の

大化四年にあたる。

太宗は春秋のすがたが英偉なのを見て厚くこれを遇し、金春秋の請ひによって、国学を見せ、積奠せきてん及び講論こうろんを見学せしめ、太宗御製ぎよせいの温湯おんとう及び晋祠しんしの碑ならびに太宗新撰の「晋書しんじよ」を授与した。またあるとき酒宴に招いて謁見し金帛きんぱくを賜ひ、問ふに、

「卿、懐おもふところありや」と。

春秋跪ひざまづいて奏上そうじょうして曰く、

「私の本国は海のかなたの僻地にありまして、天子さまの朝廷におつかへしていく年もたつてをります。しかし、百濟は強く猾よこしまで、しばしばわが国を侵します。殊に先ごろは大軍をあげて来襲し、数十城を攻め陥おとし、以て唐朝へ参る道を塞ぎました。若し陛下、天兵を借りてこの凶悪をかりはらひませんと、私の国の人民はことごとく捕虜となり、遠く山河をこえ海をわたり天子に朝参することもふたたびできないことになります。」と。

太宗は深くうなづき、出兵を許した。

春秋はまた自国の正服を改めて中華の制にしたがひたいと申し出た。そこで太宗は、奥

から珍らしい服を取り出させて春秋とその従者に賜はり、詔して春秋に特進（中国第二位）の位を授け、その子の文王を左武衛將軍として国に還らしめた。帰国に際し、詔して、三品以上の朝臣を酒宴に列席せしめて餞けした。優礼はなほだ備るものであった。

春秋は奏上して、

「私に七人の子があります。願はくば、聖明の天子さまの宿衛を離れないやうにした  
いものでございます。」と。

春秋が帰国の途について海上に至ると、高句麗の巡邏兵にあった。春秋の従者の温君解が高冠・大衣の姿で船上に坐した。高句麗兵はこれを見て春秋と思ひ、とらへて殺した。そのすきに春秋は小船に乗って帰国することができた。新羅王はこれを聞いて君解の死をいたみ、君解に追贈して大阿食（新羅第五位）と為し、その子孫をめぐんだ。

かくして、唐・新羅連合の計は成るのであるが、これよりさき金春秋は日本に来たらしい。「三国史記」にそのことは見えないが、「日本書紀」によると、大化二年九月、新羅の国に人質を求めに遣はされた高向黒麻呂（玄理）が、大化三年になって、金春秋を伴って帰って来たことが記されてゐる。

記事は、新羅が上臣大阿儉金春秋を遣はして、博士小徳高向黒麻呂を送つて来て、孔雀一隻、鸚鵡一隻を獻じた、そこで、春秋を人質とした、春秋は姿顔美しくして善く談笑した、と書いてある。

推古天皇十六年、遣隋使小野妹子にしたがつて隋に渡つた学生高向玄理は、聖徳太子つゞいて推古天皇の薨去を彼の地で聞き、舒明天皇の十二年、新羅を経て帰朝した。やがて大化の改新に当り、国博士となり八省百官の制度の創設につくしたが、いま新羅に使して金春秋を伴ひ帰つたのである。

漸くはげしさを加へて来た東アジアの動乱を、これらの政治家たちがどうながめ、どういふ戦略を樹ててゐたか、知るよしはないが、国運をかけての虚実があつたにちがひない。「日本書紀」の文章で見ると、金春秋は送使として来日して、そのまま人質としてとゞめられたらしい。しかし、その容姿の美しさと活達な言語応待とは、大和朝廷を魅了したであらう。唐朝でも、その容姿を「英偉」とし、堂々たる応待によつて唐羅連合を実現したくらゐであるから、日本にもそれなりの影響を与へずにはおかなかつたであらう。玄理と春秋との間にどんな話があつたか、またそれを介して新羅と日本との間

にどんな外交があったか、これも知るよしもないが、百濟、高句麗、任那みまなの使が盛んに来てゐた大和朝廷で、金春秋はそれなりの努力もし、日本の対三国の方針を打診もしたにちがひない。

しかし、その結果が、翌年の、金春秋の唐への朝参となつたのであるから、金春秋の目に、日本と百濟との連合は切ることのできないものといふ印象をあたへたのであらう。金春秋の主目的は、新羅の興隆であり、さし当って百濟との戦ひに勝つことであつたにちがひない。そのため春秋は、六四二年高句麗に決死の使ひをし、六四七年人質として日本に来て、翌六四八年、唐朝に参朝したことになる。この人物の目には、三国、唐、日本、各国の形勢が、相当ハッキリ映つてゐたであらう。

しかし、金春秋が唐の太宗に謁見して、百濟討伐の派兵を請ひ、太宗皇帝がこれを許した年の翌年、貞観二十三年（六四九）太宗は病死した。そのため太宗の高句麗遠征の準備は頓挫し、したがって百濟派兵も一時沙汰やみとなつたのであらう。金春秋の計画は一時おあづけとなつた形である。

そしてその翌年、新羅真徳王の四年夏六月、真徳女王は春秋の子の法敏（後の文武王）を

使として唐に送り、金庾信の功によって得た百済戦における勝利を報告し、錦で織った「五言太平頌」を唐皇帝に献上した。五言の長詩で大唐の盛威をほめたゝへたものである。高宗はこれを嘉賞して法敏を大府卿として帰国せしめた。

法敏はやがて父春秋を助けて、唐羅連合に尽し、春秋のあとをついで、遂に白村江の戦ひで、日本と百済遺民の連合軍を叩き、やがて高句麗の滅亡後、唐と戦って、新羅の半島統一の基礎をつくる文武王その人である。

翌年新羅はまた金仁問を唐に遣はして朝貢せしめ、唐の宿衛として留まらしめた。

金仁問は法敏の弟、金春秋の第二子で、時に二十三歳だったといふ。以来春秋王（太宗王）の股肱として活躍し、百済滅亡の時は、唐から神丘道副大総管に任命されて百済討伐軍を率ゐた。のち、右驍衛大將軍となり、唐の高句麗遠征を助ける等戦功が多く、そればかりでなく唐と新羅との調停に生涯を傾け、年六十六で唐の帝都で歿した。在唐二十二年といふ、その運命を決めたのが、この唐への入朝である。

百済と新羅の間には戦闘が絶えなかったが、いづれも決定的な勝利を得ることがなか



った。真徳王の八年王が薨ずるや、金春秋が推されて王位を継いだ。太宗武烈王である。元年、唐は王を開府儀同三司・新羅王と為した。

二年春正月、高句麗が百濟、靺鞨と兵を連ねて新羅の北境を侵し三十三城を取るや、太宗武烈王は使を遣はして入唐せしめ援けを求めた。三月、唐は營州の都督程名振、左右衛中郎將蘇定方を派遣して、高句麗を撃たしめた。高宗の第一回の高句麗遠征である。この年、新羅は法敏を立てて太子とした。

三年、金仁問が唐から帰って軍主に任じた。秋七月、太宗の子の右武衛將軍の文王を遣はして唐に朝せしめた。

かくして数年。遂に唐の百濟派兵が決し、唐の高宗は左武衛大將軍蘇定方に命じて、神丘道行軍大總管と為し、金仁問を副大總管と為し、左驍衛將軍劉伯英ら水陸十三万を率ゐて百濟を伐つことになり、新羅王に勅して靺夷道行軍總管と為してこれを援けしめた。五月二十六日、武烈王は、庾信、真珠、天存ら諸將軍と兵を率ゐて慶州の京を出、六月十八日、南川に次った。

蘇定方は山東半島の萊州より出発して、舳艫をつらねて千里を渡り、流れにしたがつ

て東下した。

六月二十一日、春秋王は太子法敏を遣はして兵船百艘をひきゐて定方を徳物島に迎へた。

定方は法敏に謂ふには、「自分は七月十日を以て百済に至り、南で新羅王の兵と会し、百済王義慈の都城を屠らうと思ふ。」と。法敏が曰ふには「春秋王は大軍を率ゐる鶴首して待つ。もし蘇大將軍の軍が来ると聞けば、直ちに至らう。」と。定方は喜んで法敏を還して新羅の兵馬を徴した。法敏は新羅王の許に至つて言ふには、「定方の軍勢は実に盛んです」と。王は喜びにたへず、又太子に命じて、大將軍庾信、將軍品日、欽春らと精兵五万を率ゐて、唐軍に應ぜしめた。王は今突城に次る。

秋七月九日、庾信らは軍を百済の黄山の原に進めた。百済の將軍楷陌が兵を擁して至り、新羅軍は苦戦したが遂に勝利を得、楷陌將軍も戦死した。この日、定方は副総管金仁問らと伎伐浦すなはち錦江の河口に至り、百済の兵と遭遇し、逆撃して大いにこれを敗った。

庾信ら唐の陣営に至ると、定方は庾信らが約束の期日に遅れたことを理由に、新羅の督軍金文顥を軍門に斬らんとした。

庾信が新羅の衆に言ふには、

「大將軍蘇定方公はあの黃山の激戦のことを知らない。期日に間に合はなかったといつて罪人扱ひしようとする。自分は罪もなくて辱を受けることはできない。まず唐軍と決戦し、然る後、百濟を破らう。」と。

鉞を軍門に立てて、怒髪は植えたるがごとく逆立った。その腰に佩びた宝劍は自ら鞘から躍り出した。かゝる有様であつたので、定方は新羅將文顥の罪を積いた。

十二日、唐羅軍は義慈王の都城を囲み、十三日、義慈王は熊津城に逃れた。義慈の子隆は大佐平千福らと投降した。法敏は隆を馬前に跪まづかせて、その顔に唾して罵つた。曰く、

「さきに汝が父は我が妹を枉殺し、これを獄中に埋め、それから二十年の間このおれの心を痛ませつゝけた。今日、汝の命は吾が手中にあるぞ」と。

隆は地に伏して口を開かなかつた。

十八日、義慈王が投降した。

二十九日、新羅王は今突城こんとつから所夫里城そふりに至った。

八月二日、大宴会をして将士をねぎらった。新羅王は蘇定方そていほう及び諸將と堂上に坐し、義慈王及び王子隆を堂下に坐せしめ、ときに義慈王をして酒をつがしめた。百済の大臣ら群臣は嗚咽おさつして流涕りゅうていしないものはなかった。

平済塔の銘の日時は、この月の十五日になつてゐる。

九月三日、郎將劉仁願りゅうじんがんは一万の兵を以て泗泚城しびに留鎮し、蘇定方そていほう大將軍は、百済王及び王族臣僚九十三人、百姓一万二千人をひきつれて、泗泚から船に乗り、唐に向つた。

### (五) 百済と日本

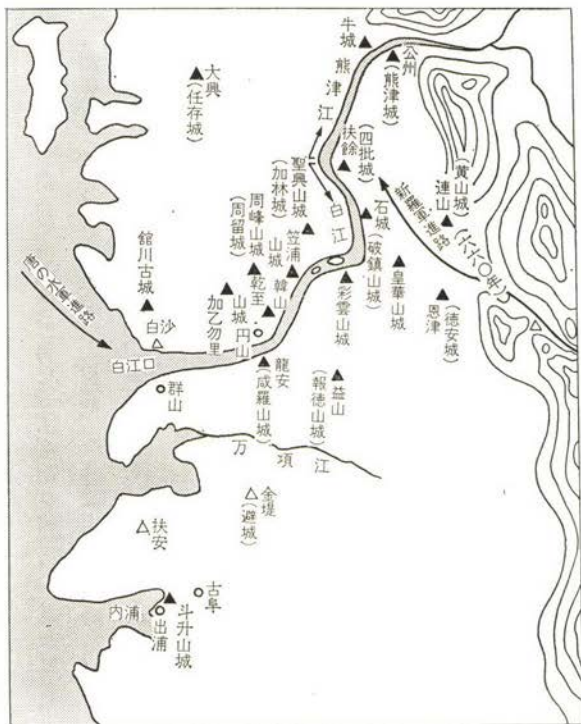
百済の滅亡が日本に伝えられたのは齊明天皇六年九月であつた。「新羅本紀」によると義慈王以下の投降が七月十八日、二十九日新羅王は今突城から所夫里城（百済王都、扶余・泗泚）に至り、弟の監天福かんでんふくを遣はして、大唐に露布ろふす、とある。「露布」とは「軍中

捷を報ずる辞で、この辞を帛に書し、封せずして漆竿の上に建つ」と「字源」にある。戦勝を報告する文章を帛布に書いて、封をせず漆塗りの竿の上に建てて、使者が大唐へ向ったのであらう。八月二日、戦捷の大祝宴、八月二十六日、蘇定方の帰唐、泗泚より乗船、となつてゐる。この時、義慈王、太子隆以下王族大臣らが捕虜として連行されたのである。

「百濟本紀」には月日の記載はない。「旧唐書」には「八月庚辰、蘇定方等、百濟を討平す」とあるから、「新羅本紀」の月日と矛盾しない。

九月、百濟は、達率（百濟第二位）某、沙弥（僧）覺從を遣はして、天皇に奏上するには、「今年七月に、新羅が力（たの）を恃み勢を作して、隣国との交友をたち、唐の人を引きこんで百濟を傾け覆した。君臣みな捕虜とされてほとんど残る者がない。

ここで西部の恩率（百濟、第三位）鬼室福信は、憤然として任射岐山（任存城）に抛り、達率（百濟、第二位）余自進は、中部の久麻怒利の城に抛り、それぞれ一カ所に陣營を設けて、散らばってしまった兵卒をさそひ集めた。ところが、武器がみな前の戦鬪で尽きてしまった。そこで今度は楛（かきなぎ、棍棒）でもって戦った。新羅の兵が敗れたので



百濟滅亡前後の古城址と唐羅軍進路の図（輕部慈恩氏による）



百済の兵は新羅兵の兵器を取って戦った。かくして百済の兵器がかへって強くなった。唐は介入しようとしなない。福信ふくしんらは遂に同国人を鳩集して、共に百済王城を保つ。百済の人は尊んで佐平（百済第一位大臣）福信、佐平（同上）自進と曰ふ。福信は神武の権謀を起して、既に亡びるところの国を興す。」と。

この報告に日本の朝廷は衝動したであらう。年来の友交国ととして、また日本への仏教文化の伝播者として、滅びるなどと予想もされなかつた国家の滅亡である。しかも、大唐の兵船と嘗ての人質であつた春秋智しゆんじゆうちの新羅軍とに挾撃されたのである。国が滅びるといふことは、かつてないショックなニュースだつたにちがひない。

日本の朝廷には百済人もあたらうし、その子孫も沢山あたらう。また百済に行ったことのある人、百済に友人を持つもの、沢山の知りあひがあつたらう。ましてや、百済の義慈王の王子の豊璋ほうしょうは、人質として数年来日本にあつたのである。

しかし、百済は完全に滅び去つたのではない。福信ふくしんと自進じしんとが、百済の復興をはかつて、王都を回復した。かういふニュースである。

冬十月、百済の佐平となつた鬼室福信きしつふくしんが、佐平貴智さへいきちらを遣はして、唐の俘とら一百余人を

献じて、救援軍の派遣を乞うた。あはせて、義慈王の王子、余豊璋よほうしやうを帰国せしめることを願った。曰く、

「唐人が、わが敵国新羅人を率ゐて来襲し、わが境域をただよはし、わが国を覆くつへしわが君臣を俘とらにした。百済の国は遙かに天皇の御恩恵をかうぶり、もう一度人民を鳩きゆう集して国を建てたいと思ふ。方に今、謹しみて願はくは、百済の国が天朝に差さし出した王子豊璋ほうしやうを迎へて、百済の国家にせむことを。」と。

みことり  
詔して曰く、

「救援軍の派遣を乞ふことは、昔これを聞いた。危急をたすけ、王位の絶えたるをつぐことは、永久の規きまりである。百済の国はいま窮迫して、我が国をたより、国が滅びて依るところなく、告げるところもなく、戈ほこを枕にし胆きもを嘗なめて、必ずや救援を得て国を興したいといふ。遠くより来てその思ひを述べる。志、奪ひがたいものがある。諸將軍に命を分ち伝へ、百道より俱ともに前すましめよ。雲の如く会あひ雷の如く動き、俱たに沙さ噪たく集り、その鯨げい鯢じの如き敵を斬り、かの既に倒れたるがごときを起おこし立つべし。よろしく有ゆう司しらつぶさにそなへあたへて、礼を以て王子を發遣せしめよ。」と。

凜然たる御詔書である。六六〇年のこの詔書は書紀編者の作であるよりも、当時の原文に拠ったものと考へてよいであらう。天皇の側近には中大兄皇子なかつのおまへや大海人皇子おほあま、内臣鎌足かみたちを中心にして、漢文学が勃興しつゝあつたのであるから、さうした人々がこの詔書の草稿を書いたとしても不思議はない。六〇七年、隋帝国に対して独立を宣言した日本天皇が、大唐、新羅の連合軍に対して百済の救援のために兵を發する凜然たる独立国日本の詔書である。

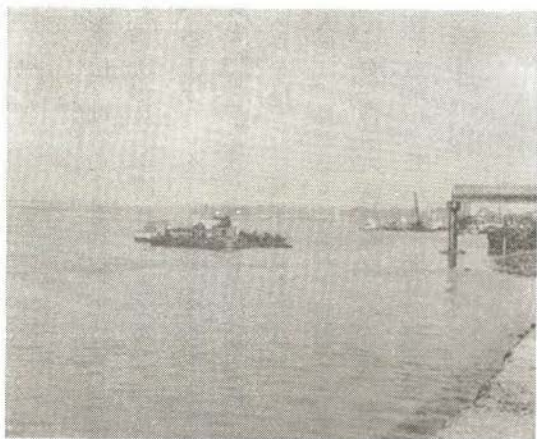
東アジアの東辺に、中華の世界国家に対する独立の民族国家が誕生してゐたのである。十二月、天皇は、救援の軍を遣はさんとして、難波に行幸し武器を備へた。

かくして、本書冒頭の齊明天皇七年の「御船征西」となるのである。



## 第四章 白村江海戦

- (一) 齊明天皇紀の凶兆
- (二) 契苾加力けいひつかりき
- (三) 百濟遺臣の蜂起
- (四) 御船還りて海に就く
- (五) 須臾ときの間に御軍敗る
- (六) 熊津くまづ・就利山すりの会盟



錦江河口・白村江海戦のあと。郡山・錦江河口の写真

(一) 齊明天皇紀の凶兆

女帝齊明天皇が御年六十八の御老体で、筑紫の国、朝倉山に近い橘の広庭の宮で急逝なさったのは、天皇の御代の七年（西暦六六一年）秋七月二十四日のことであつた。皇太子中大兄皇子は麻衣の喪服をお召しになられ、皇太子のまゝ天皇の政治をお執りになつた、——と、「日本書紀」は記してゐる。これを「称制」と言ふ。かういふ場合に、「喪を秘す」といふことが考へられるが、この時「喪を秘」した様子は見られない。

神功皇后の三韓征討に際して、御夫君仲哀天皇は、神の怒りにふれて急逝なさつた。その時は仲哀天皇が、三韓を討てとの神意に逆つて、神罰にふれられたのであつたが、この齊明天皇の崩御にはさうしたことは記されてゐない。しかし、天皇の親征にも運勢にも不吉な影がつきまどつてゐたとは、「日本書紀」の記すところである。

齊明天皇は、「重祚」と言つて、再度天皇の位に即かれたお方である。さきには皇極



天皇として政治をお執りになったが、蘇我氏の滅亡に際して、御位を孝徳天皇におゆづりになられた。孝徳天皇が難波の宮でおなくなりになると、再び皇位につかれて、斉明天皇と申上げるのである。

御即位・重祚の年の夏五月の初旬、竜に乗ったものが空中に現はれた。その顔かたちは唐の人に似てゐた。油を塗った青絹の笠を着て、大和の葛城山から空を馳けて、生駒山に隠れた。そして正午頃、住吉の松嶺といふ岡から西へ向つて、飛んで行つた。斉明天皇元年は唐の高宗の永徽六年で、この年高宗の高句麗遠征がはじまつた。

冬十月、宮殿の用材を山や谷に求めたところ、朽ちてぼろぼろに腐つてしまふ木材が多かつた（日本は言はば木の文明の国である。その木が役に立たないのは重大事件である。）そのため材木によつて宮殿をつくることが出来なかつた。（そこで天皇は石造宮殿を作らうとなさつて、世人の非難にあつたのである。）

四年五月、皇孫建王が八歳で亡くなられた。皇子は啞であつた。皇孫をおいたみになつた三首の御製短歌が残されてゐる。

今城なる小丘が上に雲だにもしるくし立たば何か歎かむ

(皇孫の殞を立てた今城の小丘の上にせめて雲だけでもあらはれたなら、その雲をみ魂と見て、これほど歎くことはない。)

射ゆ鹿猪をつなぐ川辺の若草の若くありきとわが思はなくに

(射られた鹿猪をつけてゆく川辺の若草のやうに幼い皇子だった、とは私には思へない。思ひ出が多くてあきらめられないのである。)

飛鳥川みなぎらひつゝ行く水の間もなく思ほゆるかも

(飛鳥川をみなぎり流れる川水がたえまもなく流れてゆくが、そのやうにあひだもなく皇子のことが思はれるのだ。)

天皇は時々この御歌をお唱ひになつて声を出してお泣きになった。  
そして十月、紀の温湯に幸でましては、

山越えて海渡るともおもしろき今城の中は忘らゆましじ

水門の潮のくんだり海くんだり後も暗に置きてか行かむ

愛しき吾が若き子を置きてか行かむ

身も世もなくお嘆きになられたみこころのあふれでた御歌である。

この年、出雲国から報告があつて、北海の浜に死んだ魚が積つた。厚さ三尺（一メートル）ばかりで、その魚の大きさは駘（河豚ともいふ）ほどで、雀の口嘴のやうな口をし、針の鱗で覆はれてゐた。その鱗の長さが数寸もある。土地の人が言ふには雀が海に入つて魚になつたのだ、と。名づけて雀魚と言つた。（氣味の悪い不吉な姿の魚が死骸となつて北海の浜に積つたのである。）

同年、西海使小花下阿曇連頼垂が百済の国から帰朝して奏上するには、百済の軍が新羅と戦つて帰ると、馬が寺の金堂をめぐる歩いて、昼夜とまることが無い。ただ草を食ふ時だけ足をとめる、と。「百済紀」義慈王十五年（齊明天皇二年）によると「赤馬が北岳鳥含寺に入り、仏屋を鳴き廻つて、数日にして死んだ」とある。或る本に、これは、庚申の年（すなはち六六〇年の百済滅亡）の前兆であつた、と書いてある。

五年、出雲の国の国造に命じて、神の宮を造らせたところ、狐が意宇郡から徴発された役丁の持つてゐる葛の綱を食ひ切つてゆく。また、狗が死人の腕を嚙ひ出して楯屋神社の前に置いて行つた。天皇崩御の兆である、と言ふ。

同年、夏五月、国中の人民が、理由もなく武器を持って、道路を往来した。老人たちの言ふには、百済の国が国土を失ふ相か、と。(百済にも同じやうな話がある。)

六年、百済救援のため新羅を伐たうとして、駿河の国に勅して船を造らせた。出来上つて伊勢の統麻郷の浜に挽いて来たところ、その船が、夜中に理由も無く、舳艫(先後)が逆になつてしまった。衆人は、遂に敗れることを悟つた。

また、科野国から報告があつて、「蠅が群がつて(柱のやうな形になつて)西に向つて、巨坂——(信濃と美濃の国境の神坂峠か)——を飛び越えて行つた。その大きさは十抱へばかりもあつて、高さは青空に衝くばかりであつた」と、奏上した。百済救援の軍の敗れる怪かと言ふ。

意味のよくわからない童謡があつた。(何か不吉な出来事の前兆であらうか。)

まひらくつの　くれつれを　のへたをら　ふくのりかりが

みわたとのりかみを　のへたをら　ふくのりかりが

甲子とわよとみを　のへたをら　ふくのりかりが

七年五月、親征の宮を那大津から朝倉の橘の広庭の宮におうつしになつたが、その時

に、朝倉にある麻氏良布神社まつりちかの山の木を切り払って、この御殿を作ったため、雷神が怒って、御殿を破壊した。また、御殿の中に、鬼火おにびが現はれた。このために、近くにおつかへしてゐる大舎人おほとねりはじめ側近の人々に病死する人が多かった。

秋七月、天皇が朝倉の宮になくなられたので、皇太子は天皇の御遺体を奉じて那大津なのおほつの宮にお戻りになる時、朝倉山の上に、鬼が現はれて、大きな笠を着て、天皇の喪の行列をじつとながめてゐた。衆人はこれを見て皆ぞっとした。

かう見てくると、前述のやうに、斉明天皇の御親征には不吉な影がさしてゐることがわかるが、多くは敗戦の後になってつけ加へられた話であらう。大東亜戦争が終つた時、この戦争に勝てるかと考へたものがあつたやうな事になつてしまつた。書紀の記事も敗戦を説明した記事にすぎないだらう。しかし、斉明天皇の御病死は仲哀天皇の場合のやうな、神意に反抗するかたに加へられた神罰ではない。したがって、喪を秘すこともなく、皇太子は天皇の御遺志を奉じて、征戦の継続をはかられたにちがひない。「皇太子、素服あさまのみそたてまつりて、称制まつりごとす」と書紀にあるのは、皇太子の戦陣の御姿でも

ある。

## (一) 百濟遺臣の蜂起

さかのぼって前年の八月、唐は百濟の王都扶余（泗泚）ならびに旧都・熊津を陥して、義慈王、隆太子以下王族百官数十人を捕虜にしてこれを帝都長安に送り、百濟に五都督府を置いて治めることとした。つまり、それまでは百濟王が唐皇帝に封ぜられるといふ半独立の間接支配であったものが、唐の直轄となったわけである。「都督」は、「総督」と同じで軍の総大将といふから、軍政長官と思はれる。

唐将劉仁願が一万の兵を以て扶余（泗泚）に留鎮すると、新羅王子仁泰が沙滄（新羅第八位）日原、級滄（新羅第九位）吉那と兵七千を以てこれに副ふ、と「新羅本紀」にある。唐兵一万、新羅兵七千が百濟王都泗泚城に留って軍政の支へとなつたのである。

この間、百濟の殘党が任存城に拠って抵抗をつゞけ、蘇定方の帰還（九月三日）後、二十三日泗泚城を襲って捕虜を奪回しようとした。これは成功しなかつたが、百濟軍は泗



泚南嶺に上り、四、五柵を豎てて泗泚をうかがひ、城邑を抄掠して、遂に二十余城がこれに応じ、百濟・叛乱軍（新羅から言へばさうなるが、百濟側から言へば復興義軍となる）の勢力が大きくなつた。

この重大時機に熊津の都督に任ぜられた王文度が海を渡つて来て、九月二十八日、三年山城に到着して、唐・高宗の詔を伝へた。王文度は東に面して立ち、新羅大王太宗は西に向いて立つた。錫命の後、文度が詔を伝宣し、物を王に授けようとしたところ、急に疾がおきてその場で死んでしまった。そこで従者が王文度に代つて事を了へたのである。

王文度の急死は劇的でその理由はわからない。文度は嘗て蘇定方を讒したことがある。しかし、この時、定方は既に海路長安へ向つたあととのことで、蘇定方が暗殺を示唆したやうなことはあるまい。

「新羅本紀」にはこの時の百濟復興軍の指導者の名を記してゐないが、「旧唐書」および「百濟本紀」によると、僧道琛と福信とであったといふ。「日本書紀」には、鬼室福信と余自進とある。

福信が倭国日本に救援を求め、百済王子余豊よほうを王として送還してほしいと言つて来たのはこの頃のことである。

百済王都陥落後、百済復興軍と唐・新羅連合軍との戦闘のこまかな推移については、「旧唐書」「唐書」「百済本紀」「新羅本紀」「日本書紀」それぞれ記述があるので、そのひとつひとつを検討して書くのでは大変だから、細かなことは略して大略を述べておく。百済の遺臣福信、道琛、自信じしんらは、錦江北方の要害の地、任存城及び周留城すゐるを本拠にして、王都泗泚城しびの回復をめざし、百済遺臣も各地に蜂起してこれを助けた。ために王城の守備に当つた劉仁願將軍は苦戦となり、唐兵一万、新羅兵七千の運命も危くなつた。王度おうどに代つて熊津の都督となつた劉仁軌りゅうじんきは太宗の信任のあつた名將で劉仁願を助けて一旦囲みを解かせ奮闘したが、周留城すゐるを滅ほろぼすことができない。福信らは、さらに倭国に救援軍を求め、唐將も本国に救援を求めた。

唐は百済の叛乱をそのままにして所定の戦略をすゝめたらしい。百済滅亡の年の十二月、契苾何力けいひつかりきを浪江道、蘇定方そていほうを遼東道、劉英伯りゅうえいはくを平壤道行軍大総管とし、程名振ていめいしんを鏖あ方道総管として高句麗こくりを伐つた。

蘇定方、劉英伯は百濟討伐軍の將軍であるから、これで見ると、九月三日扶余乘船で長安に凱旋し、十一月一日義慈王以下を高宗皇帝に獻じた蘇定方は、翌月遼東道行軍總管となつて高句麗遠征に発向したことになる。劉英伯も行を共にしたのであらう。少し時機が早いから、発令だけだったかも知れない。いづれにしろ、唐の目的は高句麗の討伐にあったから、百濟を滅して高句麗の南を押へ、南北から高句麗を挾撃する態勢に入つたわけである。

ところが、高句麗は屈しない。また、百濟の復興軍が任存、周留に拠つてゐるので、高句麗を南から攻めることができない。

六六一年、齊明天皇七年春正月御船征西、三月那のな大津おほつに至る。同年四月、新羅は百濟から班師（撤兵）した。五月高句麗は靺鞨まつかつ（北東アジアの國）と連合して北から新羅を攻めた。

「旧唐書」の「高宗本紀」によるとこの五月、左驍衛大將軍、涼國公・契苾何力けいひつかりきを遼東道大總管とし、左武衛大將軍・邢國公・蘇定方そていほうを平壤道大總管とし、兵部尚書・同中書門下三品・樂安縣公・任雅相たんがしやうを涇江道大總管として高麗こまを伐つ、とある。本紀にある

ので、これが正式の任命だったのかも知れない。

六月、新羅武烈王崩す。元子げんし金法敏が即位した。文武王である。

七月、齊明天皇朝倉の宮に崩御。

八月、九月、蘇定方、契苾何力が高麗を攻めた。このことは日本にも伝えられて「日本書紀」に記載がある。

蘇定方は百濟討伐軍の最高指揮者であったので日本に知られてゐたはずであるが、契苾何力の名を当時の日本人はどう受けとつたらう。

### (三) 契苾加力

齊明天皇崩御の翌八月、重大な情報が入った。——唐の將軍蘇定方そていほうと突厥とつけつの王子の契苾加力等ひつかりきらとが、水陸両面から、高句麗こくりを攻めて、その首都平壤の城下に至つた——と。

#### 〔日本書紀〕

唐の東アジア対策の主目標が高句麗こくりであつたことは、既に述べたところである。隋の

亡びたのは、三回にわたる高句麗遠征の失敗が原因であったと言はれる。それほど、黄河流域に国する中国大陸国家にとっては、北朝鮮から満洲へかけての高句麗は、重大な関心事だったのである。その原因を一口で言へば、隋唐の世界統一は朝鮮半島に及ぶべきであるのに、高句麗がこれに反抗して、独立しようとするおそれがあることであらう。元来、満州地方は黄河流域に対する特殊地域で、中国本土の力が衰へてくれば攻め入るし、力が強くなれば逆に征服の対象となる。

古来、東北アジアと黄河流域と揚子江流域とは大陸中国の三大勢力であって、朝鮮半島の北部を占める高句麗は満洲と中原との接触地帯でもある。東アジアの文明自体が、漢帝国の拡大によってもたらされた楽浪・玄菟両郡の建設によるものだと言はれてゐる。楽浪郡すなはち北朝鮮で、高句麗の地にほかならない。東アジアの諸国の建国も、高句麗が楽浪郡を滅して独立した時（三三三年）からはじまると言へるのである。

隋帝国の失敗した高句麗の征討を、唐帝国の初期帝王が引きつぐことになる。

唐は、第二代太宗の貞観の治（六二七—六四九）によって内治の充実をはかり国力を増し、当時最大の外患であった東突厥を征服し（六三〇）、さらに次の高宗の時代に西突厥を征服

し（六五七）、西北方面の患を絶った。遂に西域地方を占領して、東西文明の交流を実現し、長安の都は、当時世界文明の集まる世界一の大都となるのである。

突厥はトルコの音訳で「六世紀後半アルタイ山脈附近に興り、北アジアを領有するに至ったトルコ系遊牧民族」である。

唐は、南蛮、西戎、北狄を下したので、「東夷」に目を向け、高句麗の遠征に乗り出したのである。

しかし唐も容易な道を進んだのではない。太宗の貞観十八年（皇極三年、六四四年）から貞観二十年（六四六年）まで親征したが失敗、貞観二十一年（大化二年）及びその翌年、小規模な再征、三征を試みた。これも成功することはできなかった。

新羅は三国のなかでは後進国で、もとから高句麗、百済及び倭国・日本の圧迫に苦しめられてゐたが、百済の義慈王が高句麗の大臣蓋蘇文と結んで新羅を伐つに及んで、新羅の太宗武烈王は、王子金仁問を使として唐に送り救援を求めたのである。唐は第三代高宗の時代で、六五五年二月、齊明天皇元年のことである。高句麗の遠征が成功しないので焦慮してゐた高宗は、これを好機とし、新羅の求めを入れて出兵することになった。



かうして唐Ⅱ新羅、高句麗Ⅱ百濟Ⅱ日本といふ友好ならびに対立関係が成立したのである。

かくて、高宗は永徽六年（六五五）第一回、顕慶三年（六五八）から翌年にかけて第二回の出兵をしたが、高句麗がよく守って効果をあげることができなかった。つゞいて六六〇年新羅と連合して百濟を滅し、六六一年（竜朔元年）から翌年へかけて、第三回の遼東の出兵をした。これが蘇定方と契苾加力の高句麗遠征である。

蘇定方は百濟討滅の唐の將軍で既に述べたので契苾加力について説明しておかう。

### 契苾加力

「契苾」は部属名、「加（何）力」は名である。契苾部は鉄勒の一部で、天山山脈の北麓に散在してゐた部族の代表部落でウルムチ附近にゐた。薛延陀部とは同族である。

「突厥の東西分裂とともに西突厥の支配に帰したが、六〇六年その厚税誅求の下より脱し、契苾部長の歌楞を大可汗とし、薛延陀部の首長を小可汗に推して自立したが、次いで西突厥の統葉護可汗に圧迫せられて、六二七年まづ薛延陀部に東遷の運動が興り、

その酋長の夷南いなんはトラ河畔の鉄勒と協力して東突厥を討ち、六三〇年に東突厥の頡利可汗が唐軍に擒へられたのに乗じ、回鶻ウイグル・拔曳固バイイルクなどを糾合してオルホン・トラ両河畔を占有し、その根拠もまた前の突厥の牙が(本營)のあつた鬱督軍山ウチヌケンインに奠さだめて漠北ぼくほく(コビ沙漠の北方)の大国となつた。またこの事件と同じ頃、天山群の間にも移動が起り、契苾部においては、その一部が一旦イシツクル湖畔に遁のがれ、ついで六三二年契苾加力に率ゐられて唐朝に内附すると共に、他の一半は天山から東に進んで薛延陀同様、漠北に移住したのである。」(松田寿男、昭和十三年刊「東洋文化史大系」——「隋唐の盛世」一〇〇頁による)

加力は九歳で父莫賀咄特勒マツガトツトクを失ひ、貞観六年、母と衆千余を率ゐて、沙州に詣り、唐に内属した、——と「旧唐書」の「列伝」にある。

太宗はその部を甘涼二州かんりょうに処し、加力を左領軍さりょうぐん(十六衛の一)將軍に擢ひきんでた。爾来、吐谷渾よくこん、高昌こうしょうを討つて功をたてた。

太宗皇帝の高句麗遠征に際しては前軍総管となつて負傷した。転じて亀茲きじを平げた。太宗の崩ずるや、身を以て殉ぜんとしたが、高宗の諭止ゆしにあつてとどまつた。

モンゴル系の騎馬部隊の勇将であつたのであらう。

かくして高宗の高句麗遠征に加はることになったのである。その勇姿は三韓から日本へも伝へられたにちがひない。(卒するや輔国大將軍并州大都督を贈られ、太宗皇帝の昭陵に陪葬された。)

(四) 御船還りて海に就く

同盟国の百済は既に亡び、友邦高句麗も既にあやふい。服喪中の皇太子は長津の宮にあつて「やゝやゝに」海外の軍政をお執りになった。齊明天皇の崩御が皇太子に遠征を躊躇させてゐるやうにもうけとれる「日本書紀」の記事である。

「鎌足伝」(「家伝」上)に拠ると、この時、皇太子は侍臣にかう言はれたといふ。

「伝へ聞く。大唐に魏徴ぎぢやうがある。高麗に蓋金がいきん(蓋蘇文がいそぶん)がある。百済に善仲ぜんちゆうがある。新羅しんらに庾淳ゆじゆん(金庾信)がある。各々一方を守つてその名は万里に振ふ。此は皆それぞれの国土の俊傑で智略は人に過ぎたるものだが、この数人を以て朕が内臣(鎌足)に比べれば、きつと胯の下に出ざるを得まい。(とてもくらべものにはならない)」と。

また翌年には高句麗王が直接、鎌足に賞讃友交の書を送ったほどであった。

唐の高宗皇帝、魏徴、李勣、蘇定方、契苾加力、高句麗の宝蔵王、蓋蘇文、百済の義慈王、皇太子隆、福信、王子豊、新羅の武烈王（金春秋）、文武王（金法敏）、金仁問、金庾信、日本の斉明天皇、皇太子中大兄皇子、藤原鎌足、——かうした人物が、当時の東亞細亞に全力をあげて角逐したのである。

かういった名君、名臣、名将らが織りなす動乱の歴史をおもふと、心のたか鳴るのをおさへられない。敵とか味方とか、勝敗をこえて、そこにはそれぞれの国をおもふ強い捨身の情緒がはたらいてゐて、その激闘の中から、新しい時代が生みなされるのである。

しばらく、その推移をたどることにしよう。

八月、日本は百済救援軍の編成を了し、救援の命を伝へた。すなはち、前軍の将を、大花下の位にある阿曇比羅夫連、小花下河辺百枝臣等とし、後軍の将を大花下阿倍引田比羅夫臣、物部連熊、大山上守君大石等とした。いづれも、蝦夷・肅慎との戦に従軍

した歴戦の勇將たちである。よってまづ遠征軍の武器、五穀の食糧を百済に送った。

九月、契苾何力けいひつかりきらは鴨綠江に達した。高句麗の大臣蓋蘇文がいそぶんの男むすこ男生なんしやうが精兵数万を率ゐてこの要害を守ったので、唐軍は渡河することができない。たまたま河が結氷したので何力かりきはたゞちに渡河を命じ鼓諜こそして進撃し、大いに高句麗を破った。

同じ頃蘇定方は平壤を囲んだがこれを陥せとすことができない。高宗皇帝は、熊津ゆうしんの留鎮となつた劉仁軌りゆうじんきに勅書を与へて熊津の守備を新羅にまかせ、兵を抜いて還ることを、新羅王金法敏きんほうびんと議せしめんとした。兵士は皆還ることを願ひ泗泚しび留鎮の劉仁願は詔命にしたがはうとしたが、劉仁軌は留ることを主張して曰く、

「孔子の春秋に説かれる義は、大夫が国境を出た場合は、国家国民の安全と利益のために専行してよろしい、といふことです。ましてや、今の我々のやうに、海の彼方あつちにあり、敵のすぐ近くにある場合においてをや。且つまた人臣たるものはたゞ忠を尽すことを思ふべきで、死ぬまで他事のないことが大切です。国家朝廷の利と知ることとは為さざるなしです。いま主上皇帝は、高麗を併呑しようとなさつてゐる。そのために先づ百済を誅ちゆうし、兵を留めて守り敵の心腹を制してゐるのです。敵が反抗しても充分

備へ、兵をはげまし馬を秣<sup>か</sup>ひ、敵の不意を撃てば、勝利はこちらのものでせう。そのあとで、兵を分ち、險に抛り、形勢を開いて、朝廷に急使を出して援兵を求めれば、凶逆の敵を自滅させることができる。今、平壤を囲んだ蘇定方軍が国に還り、熊津城からも兵を引けば、百済の余賊は日ならずして興り、高麗と通じたら、いつ滅ぼすことができません。熊津は一城にすぎませんが、賊の中心にあり、もしここが陥れば、われらは皆殺されるか捕虜になってしまふでせう。兵を抜いて新羅に入ったところで、坐客にすぎない。悔いても及びません。ましてや福信は兇暴残虐で、余豊は猜疑心が強い。必ず内部分裂がおこります。いまはじっと堅守して待ち、変に乗すべきです。兵を動かしてはならぬ。」と。

皆これに従った、とは「旧唐書」劉仁軌伝の記すところである。当時の東アジアの形勢を見透した大見識で、少しうますぎるが、当時の形勢をうがってゐることはたしかである。



九月、皇太子中大兄皇子は長津宮に於いて、織冠おりもの（大化二年に制定した位階の最高位）を百済王の王子豊璋ほうしやうに授けられた。

織冠は、大小二階あって、織おりものを以て為つくり、繡ねひものを以て縁ふちに裁たれた冠かんむりである。この冠かんむりを被かぶる人の服の色は、大小二階とも深紫こむらさきを用ひる。大臣は第三位の紫冠しはんをかぶったといふし、後に藤原鎌足ふじはらのかまたりが逝去の前日はじめて大織冠だいしやくかんを賜ったことなど考へると「織冠」の位が最高位であることがわかる。これを百済王の王子豊璋ほうしやうに授けたのである。

豊璋は百済の義慈王ぎじの王子で、「日本書紀」によると、舒明天皇じよめいの二年三月初旬、百済の人質ひとじちとして来日したといふが、「三国史記」「新唐書」では、その年は義慈王の即位前になるので、「書紀」の誤りであらうといふ。しかし豊璋が義慈王の王子として人質になってゐたのは事実である。齐明天皇六年、百済義慈王二十年、西暦六六〇年、百済が滅びると、遣臣みくしんの福信ふくしんや自進じしんが百済復興の軍を興し、貴智きちらを使として遣はして来て、豊璋を「迎へて、国の主とせむ」と言つて来た。かくて、百済救援の親征となつたことは既述の通りである。

皇太子は、王子に織冠の位を授けて、百済復興をはからしめたのである。そして、多おほ

臣おみ蔣敷こもしきの妹を妻としてめあはせた。

かくして、大だい山下せんげ狭井さゐ連むらじ檳榔あじまさ、小しょう山下せんげ秦はたのみ造やつ田こたくつ来津を遣はして、軍五千余を率ゐて、豊璋を本郷の百済に送らせた。

豊璋が国に入る時、百済の遺臣ふくしん福信が迎へに来て、丁重な礼をとって、国政をすべて豊璋にまかせた。

豊璋は、豊ほうとも余よ豊ほうともいふ。豊が名で、余は百済王の姓である。「日本書紀」には豊璋と記した例が多い。

冬十月七日、齐明天皇の喪、帰りに海に就ゆく。二十三日、天皇の喪船は難波に還った。十一月七日、天皇の御遺体を以て、飛鳥あすかの川原かはらに殯あらし宮のみやを作り、哀号をはじめて九日に至った。

十二月、高麗こま（高句麗に同じ）から報告があった。

「この十二月、高麗こまの国は寒きこと極まり、大河も凍結した。遼東から南下して来た契けい苾ひ加力かりきの軍は、鴨緑江岸で高麗軍に食ひとめられたが、鴨緑江が凍結したので、各種戦

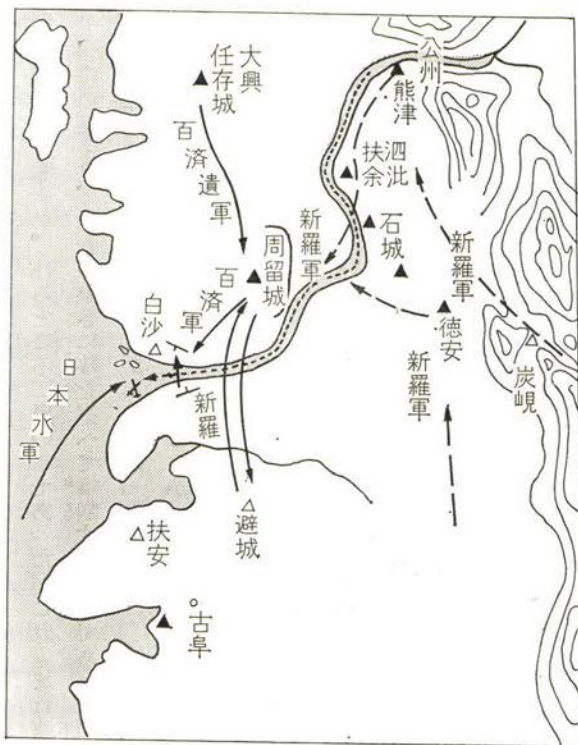
車を渡河させ、鼓を鳴らし鉦を鳴らして進撃して来た。高麗の士卒も勇敢に戦って、唐軍の抛った二塁を奪った。残るところ二塁のみであった。これもまた夜襲の計略に備へたので、唐の兵卒は、余りの寒さに膝を抱へて嗚咽するほどであった。しかし、高句麗軍の鋭鋒もにぶって、遂に抜くことが出来なかった。」

「悔いても及ばぬ、臍を食ふ恥とはこのことか。」と書紀には書いてある。

かくて、齊明天皇の親征にはじまり崩御に終つたこの多端な年は暮れた。当年の事件としてなほ記すべきことがある。

播磨の国の国司、岸田臣麻呂等が、宝剑を献上して言ふには、「狭夜郡の人が禾田の村の穴の中で獲たものです」と。この剣を買つた一家が死に絶えて、その家のあとの土中から獲た靈剣であるともいふ。

また、唐の攻撃をうけた高麗を支援するために派遣された日本の將軍たちが、百済の国の加巴利浜に泊つて火をたいたいところ、灰が孔になって、細い悲しげな音がした。開戦を告げる鳴鑼の音の如くであった。或る人の曰ふことには「高麗と百済との終に亡び



- 日本、百濟軍
- - - 想定新羅陸軍
- · · 唐水軍

白村江戰役推定地図

る徴か」と。

(五) 須臾の間に御軍敗れぬ

かうして斉明天皇七年は終り、皇太子称制の年は明けた。西暦六六一年である。

当時の東亞細亞の情勢を概観すると、唐は第二代高宗皇帝の治世のはじめで国力は益益充実し、高句麗遠征軍は將軍蘇定方、契苾加力に率ゐられて、前年鴨綠江を渡つて、高句麗の辺境を侵し、北部の城寨に拠つてゐる。高句麗は日本の援軍を求めて、これと対決の形勢である。百済は既に亡びて、義慈王以下王室は捕へられて唐の朝廷にあるが、遺臣福信、自信らは日本に人質として来てゐた余豊を迎へて、百済復興を計り、任存城・周留城に拠つてゐる。新羅がこれを攻め、日本がこれを授け、東亞細亞の運命のかゝる錦江河畔は戦雲急のうちに年が明けた。

天智称制元年春正月二十七日、百済の遺臣佐平鬼室福信に、矢十萬隻、糸五百斤、綿一千斤、布一千端、韋一千張、稻種三千斛を賜つた。三月四日には百済王余豊に、布三

百端を賜ふ。二月、高句麗討伐軍の將軍任雅相が陣歿し、蛮酋龐孝泰は蓋蘇文と蛇水に戦つてその子十三人とともに戦死した。

三月、高句麗救援の日本軍は百済の遺臣福信の抛る錦江河畔の䟽留(周留・州柔)城に入つた。ために、唐軍は高句麗の南部を侵すことが出来ず、新羅はその西部の城寨を陥すことが出来なくなった。加ふるに契苾加力の率ゐる唐軍は蛇水(平壤東北方)附近で大雪に苦しみ、撤退せざるを得なくなつた。新羅もまた撤退して、高句麗は小康を得た。

夏四月、鼠が馬の尾に子を産んだ。「日本世記」の著者、高麗僧道顛が占つて言ふには、「北の国の人が南の国に附くことになるか。高麗が敗れて日本に属することになるだらう」と。(鼠は子で北方を示し、馬は午で南を指すと見ての占ひらしい。)

五月、大將軍大錦中(四位相当)・阿曇比羅夫連らが、船師百七十艘を率ゐて、百済に至り、勅旨を伝へて、百済王の王子余豊に王位を継がせた。また、金泥で書いた書を福信に賜はり、其の背を撫でて、その功勞を褒めて爵と禄とを賜はつた。時に、豊璋と福信たちは、礼をつくして勅旨を承り、衆人また感激の涙を流した。

七月、唐將劉仁願、劉仁軌が、熊津の東に百済復興軍を破り、つゞいて新羅兵を導入



して、真硯城（炭硯？）を破ったので、遂に新羅と能津との間の運糧路を開いた。熊津は漸く危機を脱することができたのである。これは「旧唐書」の記事であるが、後述の通り、新羅王文武王の唐将（高句麗征服後の安東都護）薛仁貴せつじんきに与へた長文の手紙によると、このことは文武王はじめ新羅兵の手がらになつてゐる。

唐は百済の王都を陥落し王以下を捕虜としてから、すでに二年を経過して、なほ百済を滅ぼすことができず、錦江河畔を百済残兵に占領されてゐるために、南北連合して高句麗を撃つことができない。一時は劉仁軌に命じて錦江河畔の兵を抜いて高句麗の遠征に加へようとしたほどであったが、当時の劉仁軌の意見を容れて、援軍を派遣することに決め、孫仁師そんじんしを熊津道行軍総管に任じて、救援させることとした。

孫仁師そんじんしの援軍が何時、錦江に到着したか、明らかでないが、百済王都を陥した時と同じ戦略で、海上から一気に錦江を遡り、錦江の江上権を手中にをさめて、川と陸とから、泗泚しびを攻めてゐた福信軍を挾撃したであらう。つまり唐の水軍が戦場に加はる点が重大で、百済には水軍はなかったであらうし、新羅もまた記録を見ると強力な水軍を持たない。唐の水軍が錦江に現はれたことは、戦鬪の勝敗を決定する力を持つてゐたであらう。

冬十二月、百済の州柔城(すゑ)（疏留、周留）に拠つてゐた百済王豊璋ほうしやう、其の臣佐平福信らさへいふくしんが、豊璋を送つて百済に渡つた別動隊の狹井連さのむらじ、朴布田来津えあのたくつと、協議した。

曰く、「この州柔城は、遠く田畝でんぼに隔たつてゐて、土地が瘠やせてゐる。農桑のうそうの地ではない。敵を拒ふせいで戦ふ戦場にふさはしい場所である。此処ここに長くゐると、人民が飢饉ききんに陥おちるだらう。今、避城へのかし（州柔の南方の地、金埠か）へ遷うつるべきである。避城の地は、西北は古連こ且涇れんたんけいの水を帯の如くにめぐらし、東南は深泥巨堰しんぬいでいこえんといふ自然の防壁まもに護まもられてゐる。城の周囲はすべて田で、渠みぞを切つて灌漑かんがいしてゐる。花も実もある樹木の生はえてゐるよく肥えた土地で、その産物は三韓の名産でもある。衣食の源は、天地の秘奥にある。土地が低くて高城たかきではないが、断然だつぜん遷うつるべきところである。」と。

ここに、朴市田来津えあのたくつが、独り進み出て、諫いさめて曰はく、

「避城へのかしと敵の居る所との距離は、一夜のうちには歩いて行ける。とても近いところである。若し不慮ほろに攻められたならば、後悔しても及ぶまい。飢えるか否かは後のこと、滅ほろびるかどうかが先である。今、敵が勝手気儘きまに攻めて来ないのは、州柔つねの地が、險けんしい山を防壁けんしやんとし、山が險峻けんしやんで谷が狭く、守り易く攻め難いからである。若し低地に

ゐたとしたら、どうして、固守して動かず、今日に至ることができたでせう。とても今日まで持たなかったでせう。」と。

百済の王や臣は、この田来津たくつの諫言を用ひないで、避城に遷うつつて、そこを都とした。是歳このとしは、日本では百済救援のため、兵甲を修理し、船舶を準備し、軍の兵糧を貯たくはへる等、軍備の充実にげんだ。

天智称制二年、春二月二日、百済の達率たつそつ（第一位）金受こんじゆらが、貢物みつぎものを持参した。新羅軍が百済の南部の四州を焼きはらった。また徳安とくあんの要地を奪った。ところが避城はすぐ近くだったので、危険で、居ることが出来なくなり、もとにもどつて、州柔つぬに居ることになった。田来津たくつの言ふ通りになった。また、同月、百済の佐平さへい（大臣）福信は、唐の捕虜とくしゆじん統守言とくしゆじん（後、日本の音博士となる）らを日本に送つて来た。

三月、前將軍上毛野君稚子かみつけぬのきみわくこ・間人連大蓋はしひとのむらじおほふた、中將軍、巨勢神前臣こせのかひさきのおみせき・三輪君根麻呂みわのきみねまろ、後將軍阿部引田臣比羅夫あべのひけたのおみひらふ・大宅臣鎌柄おほやけのおみかまつか、三軍の將を遣はして、二万七千人の士率を率ゐて、新羅征討に出発させた。

夏五月、犬上君某いぬかみのきみが急使となつて兵事を高麗こまに告げて還かへつたが、帰途石城しやくさしで余豊よほう（糺

解)と会ったところ、余豊は福信の罪を語った。

六月、前將軍上毛野君稚子たちの新羅征討軍は、新羅の西南、沙鼻、岐奴江の二城を奪った。

百済の王豊璋は、福信が謀反の心を持つと疑って、掌に穴をあけて革を通して縛った。しかし、自分ではその罪を決めることができなくて、どうしてよいかわからない。諸臣に問うて、

「福信の罪は、既にかくの如くである。斬るべきか否か。」と。

達率・徳執得が申上げることには

「此の悪逆人を放免してはならない」と。

福信はこれを聞いて執得に唾をはきかけて「くさった犬のやうな馬鹿者め！」と言った。余豊王は、力の強い者を集めて、福信を斬り、その首を酔につけた。(さらし首にする為である。)

新羅は、百済王余豊が良將福信を斬ったことを聞いて、直ちに百済に侵入し、まづ州柔(周留)を攻略しようと謀った。「新羅紀・金庾信伝」によると、文武王親ら、庾信、

王弟仁問、天存、竹旨等の將軍を率ゐて、七月十七日を以て征討し、熊津州に次り、唐の鎮將劉仁願と兵を合せた、とある。劉仁願は、唐將蘇定方の部將で、百濟滅亡後、百濟地方鎮庄のため泗泚城の留鎮として残ったのである。

秋八月十三日、百濟王は敵の謀略を知って諸將に語るには、

「いま聞く、大日本国の救援の將軍、廬原君臣、健兒万余を率ゐて、必ず渡海してくるにちがひないと。諸將よ、願はくは、爾前の計を建てよ。余は親ら兵を進めて、白村江に日本軍を待たうと思ふ。」

十七日、新羅の將、州柔に至り、王城を包圍す。大唐の軍將（劉仁軌、杜爽、扶余隆ら水軍の將）、戰船百七十艘を率ゐて、能津川を下り、錦江河口の白村江に陣を敷く。扶余隆は、百濟の王子で百濟の滅亡により捕はれて唐朝にあったが、唐の將として唐軍に加はったのである。

二十七日、日本の軍船の最初に到着したものと、待機してゐた大唐の軍船と戦った。日本軍が負けて退却した。大唐の軍はさらに陣を堅めて守った。

二十八日、日本の諸將と百濟王と、充分氣象を觀ずして、語り合つて言ふには「我ら先を争つて進めば、彼は自然に退くだらう」と。列の乱れた中軍の兵卒を率ゐて、進んで大唐の堅陣を打った。大唐、すなはち、左右より日本の軍船を挟んで包圍して攻撃した。「須臾の間に、御軍敗れぬ。」と記されてゐる。水に飛び込んで死ぬ者が多かつた。軍船の舳と艦とを廻らすことが出来なかつた。完全に唐の戰略にひつかかつたのである。瀬戸内の潮流や風向で鍛へられ、蝦夷・肅慎との戦ひの經驗を持つ當時の東亞細亞第一の日本海軍は緒戦において大打撃を蒙つてしまつたのである。

日本の船団は到着順に叩かれてゐるが、これで見ると、唐の海軍についての情報をも得てゐなかつたのであらう。不用意に入つて来た最初の船団は、少数でもあつたらうから、たちまち待機中の唐軍の攻撃にさらされた。それでも一旦退いたのだから、あとから来た中軍に情報を提供することはできたはずである。ところが、中軍は、いはゆる暴虎馮河の勇で情勢を判断せず先陣を争つて突進したのである。そこで待つてゐた唐の海軍に包圍された。船を廻旋することができなかつたといふのは、狼狽したせるもあらうが、恐らく潮流や風むきなどのせるであらう。瀬戸内の潮流に詳しかつた彼らも、白村



江の地理には暗かったにちがひない。錦江は現在干満の差による水位の差が甚だしく、満潮時になると今の扶余よりもさらに上流の旺津あたりまで潮がのぼるといふ。（「百濟遺蹟の研究」）。そして、河口附近では、「毎日朝夕の二回上流に向つて逆流し、ものすごい勢いで大きな音を立てて潮が上つて来る」（同書）といふことで、上流から下つて来た唐水軍はこの水勢を充分利用して日本海軍を破つたのであらう。

敵前上陸に失敗したこの日本軍が、前年三月発遣の百濟救援軍なのか、この年五月発遣の新羅征討軍なのか明らかでない。前者なら船師百七十艘の大船団、後者なら二万七千の兵員である。後者としても、百七十艘の軍船が必要であらう。唐の軍船と同数である。船団の編成上、百七十艘がひとつの基準になつてゐるのだらう。ともかく、日本の海軍の主力が、大打撃を受けてしまったのである。しかも、緒戦において。

州柔城を固守することを主張して容れられなかつたあの將軍朴市田來津は、天を仰いで復讐を誓ひ、齒をくひしはり目をむいて瞋り、奮戦して数十人を殺した。そして、ここに戦死した。この時、百濟の王豊璋は、数人の側近と船に乗つて、海路を高麗に逃げ去つた。（行方不明になつたといふ。）

当時の戦況は、新羅側にも唐側にも記録がある。「新羅本紀」にある文武王の書によると、「倭船千艘、停りて白沙に在り、百済の精騎岸上にありて倭船を守る。新羅の驍騎、漢の先鋒と為りて先づ岸上の百済陣を破る。」とある。これで見ると新羅の騎兵が先づ百済の騎兵を破り、つづいて海戦で唐が日本を破ったことになる。

また「旧唐書」の「劉仁軌伝」には、「四戦捷ち、その舟四百艘を焚く、煙焰天に漲り、海水皆赤し。賊衆大潰、余豊身を脱れて走る。其の宝剑を獲る。偽の王子扶余の忠勝、忠士等、士女及倭衆並びに耽羅の国使を率ゐて、一時にみな降る。」とある。耽羅は濟州島で、日本にも度々使をよこしてゐた。

九月七日、百済の州柔城がはじめて唐に降伏した。この時に百済の国の人の語つて曰ふには、

「州柔が降伏した。いかんともすることができない。百済の名は、今日絶えた。祖先の墓地にもふたたび行くことはできない。ただ、互礼城に往つて、日本の軍將と会つて、事機の要事を相談するだけだ」と。

遂に、枕服岐城しんぷくぎに在る妻子たちに国外亡命の心を知らせた。十一日、南海島の近くの牟亘むての津つに向つて出発した。十三日、亘礼てれに到着。

二十四日、日本の船師、佐平余自信よせしん・達率木素貴子たつせつもくそきし、谷那晋首こくなしんす、憶礼福留おくれいふくろ並びに百済の国民たちが、亘礼城てれさしに至る。

一行は翌日出航して日本に向つた。敗残の将兵と生き残つた百済の官民とはかうして日本に向つたのである。幾人の将兵が帰ることができたのか、歴史は伝へない。

白村江の戦は終つた。爾後日本は刀伊の乱や元寇に北九州で外敵を迎へることはあつたが、防戦一方で、南北朝時代の倭寇の侵攻まで、兵を大陸、朝鮮に進めることはなかつた。四世紀以来の朝鮮問題はここで新しい局面を見ることになつたのである。

唐将たちは戦功を記念して碑を建てた。その碑が今日まで残つてゐて、唐側のこの戦役についての意識をよく語つてゐる。日本にとっては敗戦の殷鑑であり、大唐にとっては勝利の歓呼である。

## 劉仁願紀功碑

次頁の碑は、唐將劉仁願の紀功碑である。この碑は扶余面宮北里の扶蘇山の上に建てられてあったが、近年扶余博物館前庭に移された。建碑の年次は、前出「朝鮮金石総覧」によると、「新羅文武王三年癸亥」とあるから西暦六六三年——白村江戦役の年——のことになる。

これも長文で、「金石総覧」によると、約二二一〇字で、磨滅して読めないところが相当あり、殊に終りの部分約九百字は、欠字にしてある。

文章は華麗な名文で、「蓋し聞く、竜天衢に躍るに必ず風雲の力を藉る。聖人運に膺るに、亦將帥□功を待つ。」にはじまり、劉仁願の官職、経歴、戦歴をたたへてゐる。そして、顕慶「五年、岨夷道行軍子總管を授かり、邢国公蘇定方に随ひ、百済を破り、」其の王扶余義慈並びに太子隆以下を捕虜としたことが見える。その後、都護となり兼ねて留鎮を知り、新羅王金春秋、金法敏と協力して百済の政治に当ったが、「偽僧道琛、偽扞率鬼室福信」が「魁首と為」って反乱し、任存城に拠つて、昼夜連戦の状態となつた。そこで「君、劉將軍、乃ち陰かに間諜を行り云々」といふあたりで、欠字になつてゐるので、その詳細は知ることができない。前章にあげた百済塔の碑文のあとを補ふこ



扶余・劉仁願紀功碑

とができたはずでもあるし、あるいは、白村江の戦ひのところまで記してあったかも知れないが、それは永遠の謎といふほかあるまい。

昭和四十七年の夏、扶余をたづねて、白馬江を見ることができた。いま百濟大橋のかゝってゐる水北亭の崖下は、水深七十米といふことであつた。百濟滅亡を悲しんで数千人の官女たちが投身自殺をしたと伝へる落花香には行くことができなかったが水北亭から臨むことのできるあたりで同じやうなところであらう。

どちらが河上か河下かわからないやうな流れのゆるやかな大河白馬江をながめて、

白馬江の下流の錦江河口から潮に乗じて兵船を扶余に侵入させたといふのも納得された。

### (六) 熊津・就利山の会盟

天智天皇二年(六六三)、白村江の戦で大打撃を受けた日本軍は、直ちに撤兵作戦にうつり、生き残った百済救援軍ならびに百済の将士およびその妻子らをつれて、倭国にむかった。百済滅亡前後からの渡海大作戦は一日の海戦で、敗戦ときまったのである。

百済の故地ではなほ遲受信將軍ちじゆんしんが任存城にんぞんじやうに拠って戦ったが、やがて、唐將劉仁軌りゆうじんきが百済の降將黒齒常之こくしじやうし——身の丈七尺余たけといふ豪傑であった——らを使って、これを攻めしめたため、遲受信も敗れて高句麗に逃れのが、百済復興の望みも絶たれたのである。

この間、天智天皇の三年劉仁願りゆうじんがんの使者が日本に來た。目的は明らかでないが、百済の同盟国としての日本の責任を問ひ、朝貢を求め、同時に日本の国情を偵察しようとしたものであらう。日本はこの使者たちを北九州に留めて上京させなかつた。彼らは偵察の目的も充分はたすことができずに帰国したもののやうである。



唐は白村江の戦に参加した水軍の將孫仁師を帰還させ、劉仁軌を留めて、百済の戦後処理に当らせた。

劉仁軌は、善政を布き、扶余の王子隆を熊津都督（長官）にして、百済人をして百済人を治めしめる道をとったが、百済の地には新羅の兵士が残ってゐたので、隆王子はその地を治めることができなかった。

このまゝの状態では、百済の領地は新羅の略するところとなるので、唐の高宗皇帝は敵勅を下して、熊津に新羅・百済を会盟せしめた。天智天皇四年、新羅文武王四年、唐の麟徳元年、白村江戦役の翌々年にあたる。

新羅は亡国の王子と会盟する意志はなかったらしいが、唐皇帝の勅に準じて角干（大臣相当）の王弟金仁問、伊痕（新羅官位十七等の第二位）天存將軍を派遣して、熊津に百済王子隆、大唐の勅使劉仁願と会盟させた。

しかし新羅と百済との争ひはたえなかつたので、この翌年、すなはち麟徳二年八月、ふたたび扶余隆が熊津城に来て、新羅の文武王（金法敏）と、就利山に白馬を刑して盟約をたてたのである。まづ神祇及び川谷の神を祭り、しかる後、血をすすって盟った。

その盟文は唐將劉仁軌りゅうじんぎの作辞である。立会ったのは前と同じく唐將・劉仁願りゅうじんがんである。新羅と百濟と旧怨を忘れて共に唐に臣属することを誓はしめたので、百濟はよいとしても、新羅にとっては迷惑であつたらう。曰いはく、

「昔百濟の先王が、順逆に迷ひ、隣国と敵対し、高麗と結托して、倭国と交通し、共に残暴を為し、新羅を侵略し、村を破り城を陥し、平和な年がほとんど無かつた。

唐天子は、一物も失ふのをあはれみ、百姓人民の不幸をあはれみ、しきりに人を遣はして和好友交を命じたが、百濟は険しい地勢を負ひ、大唐から遠いことを恃たんで、天子の教へをあなどつた。

皇帝は赫怒かくどして、恭うやうやしく弔伐ちようばつを行なつた。

旌旗せいきの向ふところ乱暴はたちまちにをさまり、訓戒を後世にたれた。しかし、亡びたるを興し絶えたるを継ぐのは先哲の通規であつて歴史の残すところでもある。

故に、前百濟太子ぜんひくたらい・司稼正卿しかせいきやう(唐帝国の農業大臣)・扶余ふよ(百濟)・隆りゅうを立てて熊津かうしんの都督(長官)と為し、その祭祀さいしを守り、其の産業を保つて、新羅に依倚いきして長く同盟国と為り、各々昔からの怨うらみを除き、和親を結んで、恭うやうやしく天子の詔命しうめいを承うけ、永く唐国の

藩として服さしめるものである。

そこで使人、右威衛將軍・魯城郡公・劉仁願を遣はして、親臨勸諭、具さに宣成の旨を示し、これに約するに婚姻を以てし、これをのぶるに盟誓を以てし、犠牲を刑して、その血をすゝり、終始互ひに敦く交はり、災ひを分ち患ひを恤み、恩情弟兄の如くして、つゝしんで天子の言を奉じ、決して失墜せざらしむ。既に盟約した上は、ともに歳寒を保ち、若し盟に背き、兵を興し衆人を動かし、辺境を侵すやうなことがあるならば、明神これを監みたまひ、百の禍ひがたちまち降り、子孫榮えず、國家滅び、祭祀も滅び、のこることはない。

故に、金鉄に刻記してこれを宗廟に蔵し、子孫万代、敢て犯すなし。神これを聴き、この福を饗けたまへ。」

劉仁軌の辞である。血をすゝり終つて、幣帛を壇下の吉き地に埋め、其の盟約の書を新羅の廟に蔵した。

かくて、仁願・仁軌が凱旋すると、隆は都督として百済の政治をとるはずであったが、新羅を懼れて、唐將の帰国につゞいて唐の京師長安に帰つてしまった。

結局、隆は故国を放棄してしまったので、百済王の子孫は絶え、やがて、百済は新羅の領有するところとなってしまったのである。隆は唐で死んだ。近年、墓碑銘が発見された。

この歳、劉仁軌は、新羅・百済・耽羅（済州島）倭人、四国の使を連れて、海路唐に帰り、泰山の封に会した。高宗は大変喜んで、仁軌を大司憲（官吏の罪を正す官の長）とした。泰山の封とは天子が泰山に諸侯を集め土壇を作って天を祭る儀式である。劉仁軌はこの時征服した東夷の人を連行したので、皇帝の威光が東夷に及んだしるしになったわけである。高宗皇帝の乾陵に首のとれた蛮夷の石像が残っているのは、かうしたことの名残である。唐は亜細亞のローマ、世界国家だったのである。

## 第五章 戦後

- (一) 大唐の鎮將の使節至る
- (二) 国防の施設——防人・烽・水城等
- (三) 近江遷都
- (四) 高句麗の滅亡 上
- (四) 同 下
- (六) 敗戦の余波二、三——鎌足の死
- (五) 新羅の半島征覇——安東都護・薛仁
- (五) 貴対新羅・文武王の論争
- (六) 天智天皇崩去・壬申の乱
- (六) 新羅文武王・唐高宗の崩去
- (四) 天武・持統朝
- (出) 和陸——遣唐使長安に入る

(一) 大唐の鎮將の使節至る

天智天皇(稱制)三年(六六四)は白村江戦役の翌年である。三月、百済王善光王(ぜんこう)らを難波(なに)に住まはせた。京の北に星(ほし)が殞(た)ちた。

夏五月十七日、百済の鎮將(ちんじやう)(古領軍司令官)劉仁願(りゅうじんがん)が、朝散大夫(ちやうさんだいふ)(唐朝・從五品(位)下の雅稱)郭務棕等(かくむそう)を派遣して来て、文書函(ぶんしょぼん)と献物(けんぶつ)とを貢上(こうじやう)した。

「日本書紀」はこれだけの記事であるが、「善隣(ぜんりん)国宝記」(文明二年—一四七〇—瑞溪(ずいげい)周鳳(しゅうほう)著)に引く「海外(かいがい)国記(こくき)」には次のやうに書いてある。

「天智天皇三年四月、大唐の客が来朝した。大使朝散大夫・上柱国(じやうちゆうこく)(勳位の最高)郭務棕等三十人、百済佐平(ひやくさいさへい)(一品・最高の官)禰(ね)軍等(ぐんとう)百余人が対島(たいしま)に到着したので、大山中(だいせんちゆう)(六位相当の位階)采女造(さいにょぞう)・信侶(しんりよ)、僧智弁等(そうちべん)等を遣はして、大唐の客を別館(べつくわん)に喚(よ)び寄せた。智弁(ちべん)問(と)ひて曰(い)はく、

『表書(ひょうしょ)ならびに献物(けんぶつ)ありや否(いな)や』



使人答へて曰はく、

『將軍の牒書一函ならびに獻物あり』

乃ち、牒書一函を智弁らに授けて進上した。ただし獻物は点検しただけで将来しなかつた。

九月、大山中（六位相当の位階）・津守連吉祥、大乙中（八位相当の位階）・伊岐史博徳、

僧・智弁等、筑紫太宰の辞と称して、——実は天皇の勅旨であるが——大唐の客等に告げて曰はく、

『今、客等の来状を見ると、大唐の天子の使ではない。百済鎮將の私の使者である。また賚す所の文書には執事の私辞を送上するとある。是を以て使人は大和の国に入ることはできない。書もまた朝廷に奉ることはない。故に客等のことは、略して言辞を以て奉上するのみである。』と。

十二月、博徳が客等に文書一函を授けた。函の上には鎮西將軍と書いた。

『日本の鎮西筑紫大將軍、百済に在る大唐の行軍總管（劉仁願をさす）に牒す。使人朝散大夫・郭務棕等至る。来牒を披覽して意趣を尋省するに、既に天子の使ではない。ま

た天子の書ではない。唯これ總管そうかんの使である。乃ち執事の牒しつじである。牒はただ私の意であるから、唯口頭くたうで奏上そうじやうすべく、人は公使ではないから、京に入らしめぬ。」と。劉仁願は百濟討伐軍の唐將で、熊津くまなり（ゆうしん・公州）の都督となつてゐて、当時在任の人物である。そのことは「三国史記」「旧唐書」等に明らかだし、百濟扶余には当時建立の紀功碑さへあつて問題ないが、郭務棕については、「三国史記」・「唐書」ともに記すところがない。唐人であるかどうか不明だが、一行来日の目的は、恐らくは、日本の降伏をすゝめたものではあるまいか。

禰軍はどういふ人物だらう？

翌四年の九月にも「表函」を持参して来朝した唐使・劉徳高等のことが書かれてゐるが、その時の記事の「書紀」の細註に、「百濟禰軍」について「右戎衛郎將・上柱国」といふ肩書が記されてゐる。

「右戎衛」は「右領軍衛」と同じ唐の十二衛の一、「郎將」はその部局である翊すざ（翼）府の次官、正五品上に相当する官職であるといふ（前掲「日本書紀」頭註三六四頁）。したがつて、禰軍は当時唐の一軍の部局の次長であつたことになる。

「海外国記」には前述の通り「百濟佐平」とある。「佐平」は大臣相当の百濟の最高の官職である。当時百濟は滅亡後であるし、白村江の戦役も終わったので、佐平といふ官職があったわけではない。これらを見ると禰軍は百濟滅亡の時捕へられて唐に連行され唐に仕へて「右戎衛郎將」となり、唐の羈縻政策によって百濟の鎮將を助けて活動してゐたのであらう。

後、新羅・文武王が唐將・薛仁貴に宛てた書簡の中に、百濟を代表して新羅と交渉したことが見える。百濟の有力な政治家であつたことはまちがひない。

「日本書紀」には、つゞいて次の通りに書かれてゐる。

冬十月上旬、郭務棕等を派遣する勅を宣す。この日、中臣内臣(藤原鎌足)、沙門智祥を遣はして、物を郭務棕に賜ひ、四日、郭務棕らを馳走された。

同月、百濟と結んで新羅を攻めた高麗の大臣蓋金(蓋蘇文)が死んだ。兒等に遺言して曰く、

「汝等兄弟、和すること魚と水のごとくして、爵位を争ふこと勿れ。若しかくのごとくでなければ、必ず隣国の笑ひものになるぞ」と。蓋金は蓋蘇文のことで、死去の

年月は海外史料によると、翌々年のことである。

十二月十二日、郭務棕等罷り帰る。五月から十二月まで筑紫に滞在したが、遂に上京もできず、目的を達することができずに帰国したものであらう。百済の故地で新羅が唐に反抗する気配が見えてきたらしい。

## (二) 国防の施設——防人、烽、水城等

この年、対馬島、壱岐島、筑紫国などに、防人と烽とを置く。烽は「とぶひ」とも訓み、火煙をあげて敵襲を知らせる任務の人をいふ。防人は辺境防衛の兵士である。この防人の心情については「万葉集」に天平勝宝七歳の防人の歌が数多く残されて永久に伝えられてゐる。第一章に述べたところである。

また筑紫に、大きな堤を築いて水を貯へしめた。名づけて水城といふ。筑紫太宰府の防禦施設で、前年の敗戦によって、北九州の防衛体制を整へたのである。白村江の戦による水軍の潰滅によって、敵軍の陸上侵入を予想してのものであった。四世紀末以来は

じめて軍備が防衛体制に入ったのである。水城のあとは筑紫太宰府の附近に今日でも明らかに見ることができらる。

四年(六六五年)春二月、百済の国の官位の階級を、日本の位階に照らし合せて、彼我の対応を研究した。豊彰に惨殺された佐平福信の功勞の故に、その子鬼室集斯に小錦下(従五位相当)の位を授けた。また、百済の百姓男女四百人余人を、近江の国の神前の郡に置いた。三月、この人々に田を与へた。いま、滋賀県日野町小野に鬼室神社があつて、近江朝廷の学職頭になつた集斯をまつるといふが、恐らくはその父の福信をもあはせまつたものであらう。

秋八月、百済の人達率(百済第二位)答本春初を派遣して城を長門の国に築かせた。達率(百済第二位)憶礼福留、達率・四比福夫を筑紫国に派遣して、大野及び椽の二城を築かせた。長門の城は場所が不明だが、大野及び椽の二城は、北九州にその遺跡があつて百済式築城のあとをしのばせる。

この八月には百済の熊津で就利山の会盟が行なはれて唐・新羅・百済の講和盟約が実現した。その余勢を駆つてであらう、九月二十三日、唐国がまた朝散大夫(従五品下)沂

州(山東省) 司馬(軍政官)・上柱国・(最高勲位)・劉德高(最高勲位)を派遣して来た。

冬十月十一日、菟道で大閲兵を行なった。唐使に対するデモンストレーションであらう。

十一月十三日、劉德高等を馳走し、十二月十四日、物を賜ふ。同月、彼らは帰った。是歳、小錦守君大石等を大唐に遣はす、と。守君大石は、有間皇子の事件に連坐して上毛野国に流されたが、後、百濟救援の将となり、敗戦後、生還して唐へ派遣されたわけである。唐使を送る使者であつたらう。媾和談判であつたかも知れぬ。

五年春正月十一日、高麗の使者前部(百濟の五部の一)能婁等来朝して調を進る。夏六月四日、罷り帰る。冬十月、高麗の臣乙相(位階・順位不明)奄耶等来朝貢進す。この中に、武蔵の国高麗神社の始祖とする若光がゐた。また、東京の多摩の狛江につづく深大寺の開基を満功上人といふが、福満と里長の女との子どもであるといふ。寺蔵の白鳳仏は当時の本尊であつたといふ。これも関係がありさうである。

同月、京都飛鳥の鼠が近江に向つて移つた。百濟の男女二千余人を東国に置いた。ま



た僧俗を扱はず、癸亥きがいの年（天智二年、白村江戦役の年）より三年に至るまで、すべて官食を賜ふ。

### (三) 近江遷都

天智天皇（称制）六年春二月、齐明天皇と、孝德天皇の皇后・間人皇女はしひとのひめみこ（齐明天皇の御女、中大兄皇子の妹）を、小市岡上陵こいちのかみかみに合葬した。同日、皇孫大田皇女おほたのひめみこ（天智天皇の御女、天智天皇妃、大伯皇女・大津皇子の母）を陵みささぎの前に葬る。時に、高麗・百濟・新羅しらぎみな路に哀悼した。

三月十九日、都を近江に遷す。恐らくは国防上の理由によるものであらうが、当時の人々は遷都を喜ばず、諷諫ふうかんする者が多かった。額田女王ぬかたのおほきみの万葉集・三輪山みわやまの歌などその一例である。額田女王は、天智・天武両天皇御兄弟の愛人となった歌人で、さきに大海おほあま人皇子のお妃きさきとして十市皇女とじわのみみこを生み、後、中大兄皇子のお妃きさきとなった。十市皇女は弘文天皇・大友皇子おほとものみこのお妃となって、後、壬申にしんの乱を近江の都で迎へた。つまり父親の大海

人皇子と夫の大友皇子とが政權を争ふといふ戦乱の渦中に立たされた。母娘おやこ二代にわたって、時代の変転と愛の相剋さうこくを直接経験しなければならなかったのである。天智天皇の近江遷都に、額田女王は、お妃の一人として従ったのであらう。故郷の三輪山への哀惜は、大和の国への愛着であり、そこに近江遷都を諷諫する調子がある。

うまさけ 三輪みわの山

あをによし 奈良ならの山の

山のまに い隠かくるまで

道のくま いつもるまでに

つばらにも 見つゝゆかむを

しばしばも 見放さけむ山を

心なく 雲の かくさふべしや

### 反歌

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなむ隠かくさふべしや

近江の都はやがて壬申じんしんの乱で壊滅したが、その後、古都に立った柿本人麿の感慨が、次の歌に残されてゐる。柿本人麿は、持統・文武両天皇に仕へて、言ふまでもなく天武天皇側であるが、この歌にも、近江遷都を非難する口吻がうかがはれる。

近江あふみの荒都を過ぎし時、柿本朝臣かきのもとのあそみひとまろ人麻呂の作れる歌

玉禰たまだすき 畝火うねびの山の

檀原かしはらの 日知ひじりの御代みよゆ

生れあましし 神かみのことごと

樛つがの木きの いやつぎつぎに

天あめの下した 知らしめししを

天あめにみつ 大和やまとを置きて

あをによし 奈良山ならやまを越え

いかさまに 念おもほしめせか

天離あまさがる 夷ひなにはあれど

石走いはばしる 近江あふみの国の

楽浪さくなみの 大津おほつの宮みやに

天あめの下した 知らしめしけむ

天皇すめらぎの 神かみの尊みことの

大宮おほみやは 此こ処こと聞きけども

大殿おほとのは 此こ処こと云いへども

春草はるくさの 茂しげく生おひたる

霞立かすみたつ 春はる日ひの霧きれる

もしきの 大宮おほみや処どころ 見みれば悲かなしも

### 反歌

楽浪さくなみの志賀しがの辛崎からさき幸さいくあれど大宮人おほみやびとの船待ふねまちかねつ

楽浪さくなみの志賀しがの大曲おほわだ淀よどむとも昔むかしの人ひとにまたも逢あはれやも

遷都を批判する童謡もまた多く、日々夜々、火災が多かったといふのは、反対者の放火であらう。

#### (四) 高句麗の滅亡 上

天智(稱制)六年冬十月、前年十月死んだ高麗こまの大臣蓋金こうこん(蓋蘇文)の長男、男生なんしやうが、大唐に逃亡して、母国を滅さうと謀はかった。さきに蓋金こうこんが兄弟の一致和合を遺言したのに、たちまち兄弟の争ひが起きて、国内巡察に出た男生を、城内に残った二人の弟が城内に入れなかつた。側近の士大夫の悪言にだまされたのである。為に、男生が唐に亡命した。この内部分裂が高麗滅亡の原因となる。

十一月九日、百済の鎮將ちんしやう(占領司令官)劉仁願りゆうじんがんが、また、熊津ゆうしんの都督府・熊山ゆうざんの県令けんれい(県知事)上柱国じやうちゆうこく・司馬しば(軍政官)法聰ほうそう等を遣はして、四年是歲遣唐副使として渡海した大山下おほやま(従六位相当)境部連石積等さかひべのむらじいはつみを、筑紫の都督府に送って来た。十三日、司馬しば法聰ほうそう等が帰朝けいだったからであらう。小山下こやま(従七位相当)伊吉連博徳いぎのむらじはかとこ(伊吉博徳文書の筆者)、大乙下たいおつけ(正八位相当)笠臣かさの諸石おみもろいしをもつて、送使とした。

是の月、大和国の高安城、讃吉国の山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城を築く。高安城は生駒山いこまさんにあつて、大和川やまとが大和に入る王寺おうじのあたりを扼する要地である。難波なにはが侵攻されるといふ想定の下に築城したものであらうか。讃吉の屋島は、後世源平の合戦で名高いが、瀬戸内海の要地であるから、これも瀬戸内海への侵攻を想定してゐる。これら内地の築城に、当時の緊迫感がしのばれる。対馬つしまの金田城は敵原いっほらの北方で、対馬の上下両島間の浅茅湾あさぢに臨む要地といふ。その意味についての説明は不要であらう。

七年、春正月三日、皇太子は称制を解いて天皇の位にお即きになった。七日、内裏だいりにおいて、群臣を饗応された。二十三日、司馬法聰の送使として旧百済に行つて帰つた伊吉博徳等が服命した。

二月二十三日、古人ふるひと大兄皇子おほえのみこの女倭姫みむすめやまとひめのおほきみ王を立てて皇后とした。古人大兄皇子は蘇我入鹿そがのいるかが擁立し、大化の改新の際に打たれた方である。

五月五日、天皇、蒲生野かまふのに縦獵かりしたまふ。時に、大皇弟大海人皇子、諸王、内臣・中臣鎌子及び群臣、皆ことごと悉くお伴をした。万葉集卷一、額田女王ぬかたのおほきみと大海人皇子おほあまのみことの相聞そうもんの歌はこの時のものか。



額田女王

茜あかねさす紫むらさき野行のき標しめ野行のき野守のもりは見みずや君きみが袖そでふる

大海人皇子答歌

紫むらさき草くさのにはへる妹いもを憎にくくあらば人妻ひとづまゆゑにわれ恋こひめやも

歌は古今の名歌として伝誦されたが、その背景は壬申の乱のきざしさへ含む国内外の危機の時代であった。

天智天皇七年（六六八）秋七月、高句麗が北陸沿岸經由で使を派遣して来て調物みつぎものを進上した。しかし風浪が高くて帰ることが出来なかった。高句麗は裏日本に来る方が時間が早く、また新羅にも妨害されないのが都合がよいが、この時のやうに風波が荒くて難航することが多い。高句麗は百濟滅亡後殊にこの航路の開拓に執着したと見られるが、また失敗に終わったらしい。成功したら、高句麗と日本との連絡はもっと密接になったらう。

同月、栗前王くりくまのおほきみを筑紫つぐしの率みこともち——筑紫大宰府の長官の任に就つけた。栗前王は、敏達天皇の皇子難波皇子なにはのみこの子である。（筑紫の防衛を重大事として、皇族を以てその長官としたのである。後一時、蘇我の赤兄がその職につくが、さらに王が再任されてゐる。壬申

の乱に際して、同王が近江方の勧誘を拒否したことは、やはり、白村江戦役後の国民的緊張感のあらはれでもある。

この頃、近江の国で軍事訓練を行なった。また、牧場を沢山置いて馬を放った。(船と馬とは当時最も重要な交通機関であり、軍事上の力であったことはいふまでもない。) また、越の国、越後方面からか、燃ゆる土すなはち石炭と、燃ゆる水すなはち石油とを献った。

また、浜御殿の下に、様々な魚が水を覆ふやうにして来た。

また蝦夷に饗応した。(三韓との関係が緊迫してゐるので、北方の蝦夷の懐柔に努めたのであらう。)

また、舍人<sup>とねり</sup>たちに命じて所々で宴会をさせた。時の人の曰ふことには、  
「天皇、天命が終らうとするか」と。

秋九月十二日、新羅が沙喙<sup>さく</sup>(新羅・沙喙部)級滄<sup>きゅうさん</sup>(第九位官位)金東蔽<sup>こんとうこん</sup>らを遣はして、調物を進上した。二十六日、内<sup>うちつまへつきみなかとみのかまたり</sup>臣中臣鎌足、沙門法弁、秦筆<sup>しんひつ</sup>を遣はして、新羅の上臣・大



高句麗の平壤旧址

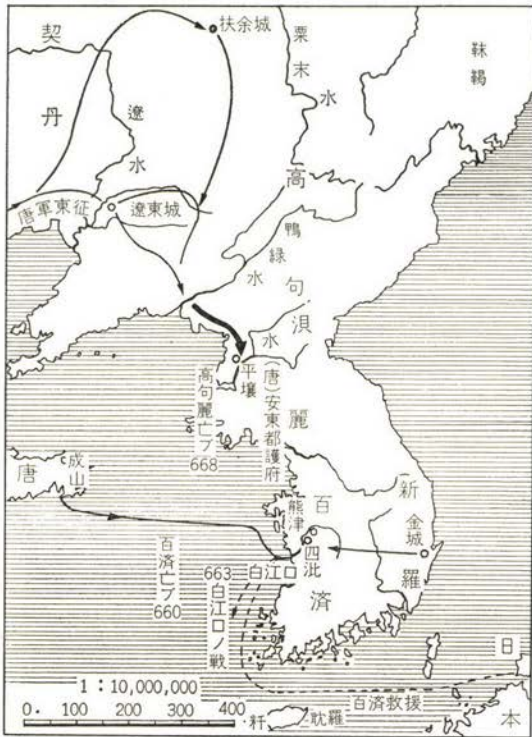
角干(最高官位)・庾信に船一隻を賜ふこととし、使者東蔽らに托した。

(庾信は、金庾信のことで、新羅の大將軍。百済を亡すに大功があつて、大角干といふ非常の高位に昇つたのである。それに船一隻を賜ふといふのは、それなりの考慮があつたのであらう。)

二十九日、布勢臣耳麻呂を使として、新羅王に御調を奉る船一隻を賜うて、これも東蔽らに托した。

冬十月、大唐の大將軍英公が高麗を打ち滅した。(六六八)「旧唐書」には、九月十三日、

「司空英国公勣、高麗を破り平壤を抜く。その王高蔵及び其の大臣男建等を捕虜として歸つた。国内ことごとく降る」



高句麗滅亡要図 (東洋文化史大系より)

とある。

唐からすれば、隋の時代から度々の遠征が失敗に帰した挙句の壮挙で、偉大な歴史的  
事業と考へたにちがひない。百済が滅亡してから、わずかに八年、白村江における日本  
海軍の潰滅後五年、七百年來の北朝鮮の国家が滅亡したのである。

「日本書紀」には、ただ

「高麗の仲牟王、初て国を建つる時に、千年治めること欲した。時に母夫人が曰ふに  
は『たとへよく国を治めても千年はつゞかない。しかし七百年はつゞくだらう』と言  
った。その通り、いまの亡国は七百年の末になる。」

と書いてあるばかりである。これで朝鮮半島は、唐・新羅の支配するところとなつたわ  
けで、日本にとっては、建国以來の國際關係の大変化であつた。同時に、百済・高句麗  
両国の滅亡の悲劇を眼前に眺めたのであつた。まさに有史以來の経験である。

三韓時代の東亞細亞の情勢を見ると、日本Ⅱ百済Ⅱ高句麗の連合と、新羅Ⅱ隋・唐の  
友好關係との対立が見られる。百済、日本は、さらに南中国と友好關係を維持してゐた  
模様である。中国は古來南北にわかれてゐるので、それと東亞細亞諸國との關係が問題

になるが、いまは深くはふれない。神功皇后以来敵国と考へて来た新羅が、やがて半島を統一することになるとは、思ってもみないことであつたらう。しかも百済につゞいて高句麗が滅亡したことは最大のショックであつた。次に来るものは、日本に対する攻撃であるといふのが、当時の指導者の考へだつたにちがひない。そして日本の滅亡もありうるといふ計算が無かつたはずはない。

十一月の初旬になつて、新羅王に、絹五十匹・綿五百斤、をしかは韋一百枚を賜ふこととし、金東こんとう敵に托すこととした。また、東敵ら新羅の使節に物を賜ひ、五日、はじめて彼らは歸つた。船二隻と数々の品物とを貰つて歸つたので、名目はどうあらうと、今日の賠償のやうな意味合ひがあらう。小山下道守みちもりのおみまろ臣麻呂、吉士小鮪きしのおそびを送使とした。

是の歳、道行どうこうといふ沙門が、熱田社あつたにある日本武尊やまとたけるのみことの宝劍草薙くさなぎのつるぎ劍を盗んで新羅に逃げた。しかし、途中で風雨にあつて新羅に着くことが出来ずに、迷つて歸つた。

(一)行いちぎょうの記事だが、当時の人心の動揺を語つてゐる。百済の滅亡に際して、唐・新羅が百済の宝劍を獲た、とある記事などを参照すると、この神劍の盜難の意味がわかる。しかも新羅に持つてゆかうとしたことなど、当時の人心に影響する大事件であつたにち



がひない。

(五) 高句麗の滅亡 下

前述のやうに、宝蔵王二十五年、蓋蘇文が死んで、長子男生が代つて莫離支となり、国政を執り、出でて諸城を巡つた。その弟の男建と男産とが王城に留つて後事を治めたところが、兄弟の仲を割く者があり、遂に隙が出来て、男生は王城に帰ることができなくなつてしまつた。しかも、男建が自ら莫離支となつて男生に兵を向けたので、男生はその子の猷誠を使として唐の救ひを求めた。

六月、高宗は左驍衛大將軍契苾加力に命じて兵を帥ゐてこれに応接させた。男生は、身を脱れて唐に奔つた。

秋八月、宝蔵王は男建を以て莫離支と為し兼ねて内外兵馬の事を知らしめた。

九月、高宗皇帝は李勣を遼東道行軍大総管兼安撫大使とし、龐同善、契苾加力を副大総管兼安撫大使とし、大軍を發して高句麗を討つた。

これに左武衛將軍薛仁貴、百濟の討伐にも功のあった右相劉仁軌、新羅文武王の弟で唐の將軍金仁問らが加はって、高句麗軍と激戦をつゞけ、遂に宝蔵王二十七年秋九月、李勣が平壤を抜き、宝蔵王は男産以下首領九十八人と投降した。男建ひとり門を閉して戦ったが、軍事を裁量した僧信誠が李勣軍に内応して城を焚いたため、男建は自殺しようとしたが果さず、捕へられた。

冬十月、李勣將に還らんとするや、高宗命じて先づ王らを以て昭陵（太宗陵）に獻ぜしむ。太宗の高句麗親征（六四五）から二十三年目である。李勣は軍容をととのへて凱歌を奏して京師に入り、王ら俘虜を大廟に獻ぜしめた。当時魏徵らの反対を押し切って高句麗征討を勧めた李勣が、最後に登場して、有終の美をなしたわけである。

冬十二月、高宗皇帝は俘虜を大明宮含元殿に受けた。宝蔵王については、その政治が自らに出たものでないとして、赦して司平大常伯員外同正といふ官につけた。子の男産を以て司宰少卿と為し、僧信誠を銀青光祿大夫（宮内官）と為し、男生を右衛大將軍とした。且つ李勣以下それぞれ封賞した。そして最後まで抵抗した男建を黔州（貴州）に流した。以上「旧唐書」の記事を「高句麗本紀」に引用するところであるが、「資治通鑑」

は追記して「扶余豊を嶺南（ヴェトナム）に流す」とある。根拠がわからないので真偽のほど不明だが、事実とすれば、白村江の戦の時、船で高句麗に逃れたといふ百済王子豊の末路である。

高句麗の戦後処理は百済の処理と同じく、五部百七十六城、六十九万余戸を分つて九都督府、四十二州、百県と為し、安東都護府を平壤に置いてこれを統轄した。高句麗將帥の功ある者を擢んでて都督、刺史（州の長官）、県令（県知事）と為し、華人（中国人）と参理（共治）せしめたとすることも、百済の滅亡の時と同じである。右衛大将軍薛仁貴を檢校（準）安東都護とし、兵二万人を総べてこれを鎮撫せしめた。総章元年のことである。

#### (六) 敗戦の余波——鎌足の死

天智天皇八年十月十日、内大臣藤原鎌足死す。死に臨んで、恩詔に奉答して薄葬を申し出で、「生きては軍国に務無し、死して何ぞ敢へて重ねて難さむ」と申上げた言葉は、単なる謙遜ではなく敗戦の責任を語ったものであらう。この聡明な大政治家の目に

は、所期に反した今後の東亜細亜の様相が見えてきたにちがひない。憂国の至情を遣して彼は世を去った。

十二月、近江朝の倉庫の大蔵おほくらに火災があった。是の冬、高安城たかやすのきを修理して、畿内の田租そを収めた。食糧を貯蓄したのである。翌年二月には、穀もみと塩とを積むとある。

同月、法隆寺に火災があった。

是歳、小錦しよきん中ちゆう(五位相当)・河内直鯨かほちのあたのくぢらを遣はして、大唐に使せしめた。「新唐書」に抛ると、「使を遣はして、高麗を平らぐを賀す」とし、翌春、高宗に謁見した、といふ。

近江朝廷の苦慮がうかがはれる。滝川政次郎博士は「日唐戦争」に於て、この遣使を、唐将劉仁軌りゆうじんぎの捕虜連行として、遣使の事実を疑つてゐる。当代日本の政治家は、昭和戦後の政治家の中共詣での如き愚行を演じなかつたと言はれるので、同感である。

九年春一月七日、士大夫に詔して、宮門内にて大射の儀を行なつて武威を示す。十四日朝廷の礼儀ならびに路上での礼儀を宣布す。また、流言、予言を禁断す。

二月、戸籍を作る。有名な庚午年籍こうごねんじやくで、わが国はじめての全国的戸籍である。

夏四月三十日、夜半をすぎて、法隆寺に火災が起り、一屋も残すところ無し。大雨が

降り、雷が鳴った。

五月、世を諷する童謡があつた。

打橋うちはしの 集楽つめの遊あそびに 出いでませ子

玉手たまでの家いえの 八重子やへこの刀と自じ

出いでましの 悔くはあらしぞ 出いでませ子

玉手たまでの家いえの 八重子やへこの刀と自じ

(掛橋つりはしの 集楽つめの踊おどりに さあいらっしやい

玉手たまでの家いえの 八重子やへこのねえさん

おいででの 悔くはあるまい さあいらっしやい

玉手たまでの家いえの 八重子やへこのねえさん)

聖徳太子の御長男山脊やましろのおほえのみこ大兄王子がおなくなりになった時にも、似たやうな童謡があつて、事件との関連がわからない。これも同様で、言ってみれば、風俗頽廢して、わけがわからない、世人の自覚の無いことをいふのだらうか。

六月には、邑むらの中で亀かめを獲とつた。背しんに申しんの字じを記してある。その亀は、上きが黄きで下く玄く

く、「黄玄」となつて、「天地玄黄」の逆で、壬申の年を予告するが如くであつた。長さ、六寸ばかり。

秋七月、阿曇連頰垂を新羅に遣はす。

是歳、水碓を造つて冶鉄す。製鉄の新技術を実施したのである。翌年三月、水臬を獻るとあり、夏四月、漏剋を新らしき台に置き、始めて候時を打つとある等、文明の利器が輸入され使用されたのである。

### (七) 新羅の半島征覇

——唐将薛仁貴对新羅文武王往復書簡

高句麗滅亡後、翌総章二年二月、高句麗宝蔵王の庶子安勝が四千余戸を率ゐて新羅に投じた。咸亨元年（六七〇）四月、高句麗復興を志した劍牟岸を殺した安舜も新羅に投じた。新羅がこれを助けて唐と戦ふに至つたので、唐は儀鳳二年（六七七）、降王すなはち降伏した宝蔵王を遼東州都督（長官）と為し、朝鮮王に封じて、遼東に帰らせ、余衆を安輯（集）せしめた。前年中華諸州に移された高句麗の人々はしたがって帰国した。よつて



安東都護府を新城しんじょうに移してこれを統べしめた。宝蔵王は、遼東に至って謀叛し、潜かに靺鞨まっかつと通じた。しかし宝蔵は開旺元年、印州いんしゅうに召還され、永淳の初めに死んだ。衛尉卿を贈られた。

高宗は詔して京師に送至せしめ、頡利墓の左に葬り、碑を樹てた。その後、王の子孫を朝鮮郡王に封ずる等のことがあったが、名目上のことらしい。

新羅は文武王の十年（六七〇）、先の安勝を封じて高句麗王となした。はっきり唐帝国と対決しようとしたのである。「三国史記」の「新羅本紀」のこの年の記事に、倭国が日本と更号したことを記してゐるのは、これら新羅の独立運動が日本の独立に刺戟されたと見ることもできる。

さらに新羅は、文武王十一年（咸亨二年）、熊津ゆうしん、加林かりん、石城等せきじょうの百済の故地で唐兵と戦ふに至った。ます／＼独立の機運が強くなったのである。

この年、大唐総管薛仁貴と文武王との間に長文の書簡の往復がある。当時の唐と新羅との関係を見る恰好かっこうの文献資料である。この書簡の往復は天智天皇称制十年にあたる。

天智天皇が近江に遷都し、国防に専念しつゝあった時に、高句麗が滅び、唐・新羅が

一致して日本に迫るべきときに、遂に新羅が唐に反抗したのであった。これも七世紀後半の東アジアの大事件であったと思ふ。

薛仁貴せつじんきの書は使者琳潤法師りんじゆんがもたらした長文のもので、概要次の通りである。

### 薛仁貴の手紙

行軍総管薛仁貴書を新羅王に致すいた。

清風万里、大海三千はるかに境を異にして残念ながら志を一にしません。先王(武烈王)開府、一国の政治に当り、百城を展開し、西は百済の侵略を畏れ、北は高麗こらの寇をいましめる状態でありましたが、その旨を中華の皇帝に披瀝されたので、聴く者は悲しみに堪へませんでした。

太宗文皇帝は天下の雄気、宇宙の神王でありましたので、先君武烈王の志を哀納して兵馬を論じて声援を期し、一朝大挙して援軍を送りました。駐蹕ちゆうひつの戦ひには文帝が親征するほどでした。既にして形勢が改まり平和を尊ぶべき秋ときになほ戦ひを好むは先君の信

を失することになりませう。今、強敵は既に清まり、仇敵は国を喪ひました。士馬玉帛、王またこれを所有してをられます。これを他にほどこさは良史これを讚するでありませう。

今、王は安然の基を去り守常の策をきらつて、遠く天子の命に違ひ、近く父王の宮を棄て、天の時を侮り、鄰好を侵し、連年戦鬪をつゞけ、人々を苦しめるのは、王の短見であつて、先君のつゝしむところであります。かくては、王は、不忠不孝の二名を得て、やすんずるところがありますまい。

王の父子が一朝にして振つたのは、天子皇帝の情が遠く及び威力相ひ持したからであります。州郡の乱れに際しては冊命を蒙り拜して臣と称し、經書を治め、詩礼を詳かにする等、天子の冊封にしたがったのであります。しかるにいま、従横の説を聴き、耳目の神を乱して、根本の基礎をないがしろにし、先君の盛業を奉じながら目的を異にし、疑臣によつて分裂し、外、強陣を招く、どうして智としませうや。

又、高麗の安勝は、年齒幼く、高麗の故地を治める力がありません。余（仁貴）は、楼船を海に浮べて、旗を連ねて北岸を巡り、その敗残の日の苦しみをあはれんで、まだ兵

を加へません。しかるに貴国これが外援をなす、謬れるの甚だしきではありますまいか。皇帝は徳沢かぎりなく仁風遠く泊び、遠くこの消息を聞かれて悄然として信ぜず、下臣（仁貴）に命じて、来つてその由来を觀しめたまふ。

しかるに王は行人をして相問ひ、牛酒、師を稿ふ能はざらしむ。軍備を敵にして、反逆の勢をなすかに見えます。

それ大事を挙ぐる者は小利を貪らず、高節を立てる者は英奇に寄ります。

いま我が高將軍の漢騎、李謹行の率ゐる蕃兵は雲のごとく四面に集り、舟を並べて下らむとしてゐます。

王、若し、事屈して頓に申ふといふ歌の通り、具に由るところを論じ、明らかに彼此を陳ぶるならば、仁貴は早くから皇帝の大駕に侍し、親しく委托をお承けしてをりますから、事必ず聖明に達しませう。

嗚呼、昔、忠義となり、今、逆臣と為る。始は吉で終りが凶、本同じくして末異なるをうらむのです。山に憑つて遠く望み、心いたむものがあります。

王よ、貴方は、機聡清明、風神爽秀の心の持主で、帰するに流謙の義あり、存するに

順迪じゆんてきの心があります。平和を求むるもまた王の策であります。

敵鋒の間、行人来往す。今、王に所属する僧琳潤りんじゆんを遣はして、書をもたらすものです。佇布一二。

大王すなはち文武王の返事は次の通りである。これも長文のもので概要を記す。

### 文武王の返書

先王すなはち父王金春秋は貞觀二十二年唐朝に入朝して、御面前で太宗文皇帝の恩勅を奉じました。すなはち、

「朕、今高麗を伐つ。他の故あるに非ず。汝新羅、兩國を撰し、毎に侵陵しんりやうせられて、安らかな年もない、それを憐れむからである。山川土地をわが貪るのではない、玉帛子女をほしがるのでもない。我、兩國を平定すれば、平壤以南の百済の土地は、汝新羅の乞ふにまかせよう。」と。

新羅の国民はつぶさに恩勅を聞いて、人々力を蓄たくはへ家々用を待ちました。ところが、大

事まだ終らざるに、文帝先づ崩じ、今上皇帝が踐祚せられ、復た前恩を継ぎ、しきりに慈造を蒙りました。兄弟子どもに至るまで高位高官を授けられ、榮寵の極、実に有史以来のことであります。私どもは粉骨碎身、望んで驅馳の用を尽し、皇帝の御恩の万分の一に報ぜんとつとめました。

顯慶五年に至り、聖上皇帝は先皇の遺志の終らざるを感じ、昔日の遺緒を成就せんとして、舟を泛べて將に命じ大いに船兵を發しました。

先王武烈王は、老年で力衰へ行軍に堪へませんでした。前の御恩を感じて、振って境界に至り、私を遣はして兵を領して皇帝の大軍に迎接し、東西唱和、水陸俱に進みました。船兵纔に江口（白村江）に入り、陸軍已に大賊を破り、水陸兩軍はともに王都（扶余）に到って、共に百濟一國を平げました。

平定の後、先王武烈王は遂に蘇定方將軍大總管と政治に當り漢兵（唐兵）一萬を留め、新羅もまた私の弟の仁泰を遣はし、兵七千を領して、同じく熊津を鎮めました。

唐の大軍が帰国して後、賊臣福信が錦江西部に起り、百濟の遺臣を集めて、府城を囲み、先づ外柵を破り、軍資を奪ひ、復た府城を攻め、將に陥落しさうになりました。又、



府城の側近の四ヶ処に城をつくって囲み府城から出入することを出来なくしました。私は兵を領して救援に向ひ囲みを解き、四面の賊城を皆打破って、先づその危難を救ひ、また糧食を運んで、一万の漢兵をして虎に食はれさうな危難を救ひ、餓ゑた留鎮の軍をして子を易へて相食むごとき悲惨な運命を免れしめたのです。

顯慶六年に至って、福信の徒党漸く多く、錦江の東部を侵略しました。熊津留鎮の漢(唐)兵一千、賊を打ちましたが破られ一人も帰りませんでした。この敗北から、熊津は救援の兵を請ひ日夕相繼ぐ有様でした。時に、新羅は疫病多く兵馬を徵発することができません。しかし、苦しい請求に違ふことができませんで、遂に兵衆を發して往きて周留城を囲みました。賊はわが兵の小なるを知って逆に来襲して大いに兵馬を損しわが軍は利を失って帰りました。そこで、南方の諸城は一時にみな叛き並びに福信に属きました。福信は勝に乗じて復た府城を囲みしたので、熊津の道が断たれ塩もなくなりました。そこでひそかに塩を送り、その乏困を救ったのです。

六月に至って、先王武烈王が薨じました。送葬わづかに終り、喪服もまだ脱がず、いかなともすることのできない時、勅旨は兵を發して北に帰ることを求めました。含資道

總管劉德敏等<sup>りゅうとくびん</sup>が至り、勅を奉じて新羅に遣はし、平壤に軍糧を供運することを求めました。しかも此の時、熊津<sup>ゆうしん</sup>の使人が来て、具に府城<sup>つよさき</sup>の孤立して危いことを陳べました。

そこで劉総管と私とは協議して、先づ瓮山城を打ち熊津道を打開しました。

十二月熊津の糧食が尽きましたので先づ熊津に送りました。勅旨に違ふことを恐れましたが、若し平壤に送ったら熊津の兵糧がたえたでせう。老弱を熊津に、強健な精兵を平壤に向はせた所以<sup>ゆえん</sup>です。熊津の送糧は、途中雪にあひ人馬死に尽して百人に一人も帰ることができませんでした。

龍朔二年に至り、正月、劉德敏總管は新羅の兩河道總管の金庾信<sup>きんぐしん</sup>らと共に、平壤の軍糧を運送しました。当時陰雨<sup>いんう</sup>が幾月もつゞき風雪極めて寒く、人馬凍死<sup>とうし</sup>して、運んだ兵糧をすべて致すことができませんでした。平壤の大軍はまた帰還を欲し、新羅の兵馬は食糧が尽きてまた帰らねばならない。兵士は饑<sup>う</sup>ゑここえ路上に死する者が数へ切れません。行軍して瓠瀧川<sup>こたろ</sup>に至るや、高麗の兵馬が追って来て河岸に陣をしいたのです。新羅の兵士は疲れ衰へて日久しく、賊を恐れて遠く逃れ、賊の渡河に先立って先づ渡河し、前鋒しばらく戦ったところ、賊徒が瓦解しましたので、やうやく兵を収めて帰国しまし

た。ところが、此の兵士らが家についてまだ一月にもならないのに、熊津ゆうしんの府城がしきりに種子を求めめるのです。前後送る所、数万余斛よこくで、南は熊津に運び、北は平壤に供しました。そのためこの小さな新羅は両所に分送して、人力は疲れ、牛馬は死にたえ、田作は時を失し、年穀はみのらず、貯たくはへる所の倉の糧はすべて運び出してしまひました。新羅の百姓は草の根を食べてもなほ足らず、熊津の漢兵は糧も食も余りあるといふ有様でした。又、府城に留鎮した漢兵は家を離れること久しく衣裳は破れ身をおほふ充分な衣服もない。新羅は百姓に課して時の服を送給したのです。

都護劉仁願りゅうじんがんは遠く孤立した城を鎮めましたから、四面皆賊でつねに百済のために侵されそのたびに新羅の解救を蒙ったのです。一万の漢兵四年の衣食は新羅の供給です。劉仁願以下兵士以上、皮や骨は漢の地に生れましたが血と肉とはともに新羅のものです。国家すなはち大唐の恩沢は涯かぎりないものですが、新羅の効いたした忠もまたあはれむに足りませう。

龍朔三年に至り、総管孫仁師そんじんしが兵を領して来り府城を救ふ。新羅の兵馬もまた出發して府城にむかひ、行きて周留城しゅうりゆうじょう下に至りました。

此の時、倭国の船兵が来つて百済を援け、倭船千艘停りて白沙（白村江）に停泊しました。百済の精騎は岸上にあつて船を守りました。新羅の驍騎は漢（唐）軍の先鋒となつて先づ岸上の百済の陣を破りました。そのため、周留は胆を失ひ遂に降伏したのです。かくして南方は已に定まり、軍を北伐に廻らしました。任存一城が頑迷で降伏しません。漢（唐）羅兩軍、力を併せて共にこの一城を打ちました。が抵抗が強く打ち破ることができません。

かくして新羅はもう軍を還さうとしたところ杜大夫（水師、杜爽か？）の云ふことには、勅命に准つて、平定後の盟会を行なひたい。任存一城がまだ降らないが、百済と共に盟約すべきだ、と。

新羅の考へは、

勅命にしたがへば、平定の後、盟会せよとのことである。任存がまだ降伏しないから、既に平定したといふことはできない。又、百済は姦詐百端、反覆恒なく、今ともに相盟約しても、後に臍を噬むの患があるだらう。奏して盟約を停めるを請ふ、と。

麟徳元年に至り、ふたたび敝勅を下して、盟誓しないことを責められました。そこで、人を熊津の峯に遣はして壇を築いてともに盟約の会を行なひました。仍ち盟約の場所において遂に兩界（新羅、百濟の境界）を決めたのです。盟会のことは願ふ所ではありませんが敢て勅に違ひませんでした。又、就利山に壇を築き、勅使劉仁願に対して血をすゝつて相盟ひ、山河に誓ひを立て、境界を限り封を立て、永くこの地域に百姓居住し各々産業を営むことを盟約しました。

乾封二年に至り、大摠管英国公（李勣）遼（遼東、遼西）を征することを聞き、兵を遣はして国境に集まりました。新羅の兵馬は独断で高句麗に入ることにはできません。まづ細作を遣はすこと三度、船相次ぎて発遣し大軍の来るのを候つてゐる。細作は偵察して来て云ふ、

「大軍はまだ平壤に着きません。且つ高麗の七重城を打って道路を開通し、とゞまつて大軍の至るのを待てば、其の城はたちまち破れるでせう」と。

英公の使人江森が来て云ふ、

「大総管の処分を奉じて来ました。新羅の兵馬は城を打つに須もちひず。早く平壤に赴き兵糧を給せよ」と。

行きて水谷城に至る時、大軍すて已めくに廻るを聞き、新羅の兵馬は遂に戻つたのです。

乾封三年に至り、大監金宝嘉きんほうかを遣はして、海路を経て、英公の進止の命を受け、その処分にしたがひ、新羅の兵馬は平壤に集まりました。五月に至り、劉右相（劉仁軌）新羅の兵馬を發して同じく平壤に赴く。私もまた漢城州に往つて兵馬を検校しました。此の時、蕃漢の諸軍みな蛇水に集まりました。高句麗の男建が出兵して一戦しようとしたのです。新羅の兵馬が独り前鋒となつて先づその大陣を破りました。そこで平壤の城中は鋒を挫くじき気が縮ちぢんだのです。その後英公は更に新羅の驍騎ぎょうき五百人を取つて先づ城門に入り遂に平壤を破り大成功をなしました。

そこで新羅の兵士はみなかう言つたのです。

「征伐が始まつてからすでに九年を経た。人力をつくして終始兩國を平定したのだ。

累代にわたる長い望みが今日乃すなはち成る。必ずやわが国は尽忠じんちゆうに対する恩恵を蒙り、人



人は力を効した賞を受けるであらう」と。

英国公が洩して云ふには、

「新羅は前に百濟平定の時、軍期を失った。また平定すべきである」と。

新羅の兵士は李勣のこの語を聞いてさらに恐怖を増しました。

又、功を立てた軍将はみな記録して入朝したので、京都のもとに到着したところ、すなはち曰く、「今、新羅、みな功無し」と。その軍将が帰って来たので百姓の恐怖はまたつよりました。

又、卑列の城は本来新羅の城です。高麗がこれを打ち取って三十年になります。新羅は此の城を奪還して、人民を移し官を置いて守りました。ところが又、此の城を取って高麗に返し与へてしまひました。

且つ、新羅が百濟を平げてから高麗を平定するまで、忠を尽し力を効し、大唐の国家に負きません。何の罪があつて一朝に遺棄せられるのかわかりません。しかし、かくのごとき冤枉があります、終に反叛の心はありません。

総章元年に至り、百済は誓約して定めた地に、封を移し標識を易へ、田地を侵略し、我が奴婢百姓を誘惑して、内地に隠し、しきりに索取して還らせません。又、消息を通ずるものがある、云く、「唐朝は船艘を修理して、外、倭国（日本）を征伐するに托して、其の実は新羅を打たうとする」と。国民はこれを聞いて驚懼不安におちいりました。

又、百済の婦女を、新羅の漢城の都督、朴都儒に嫁せしめ、一緒に謀って、新羅の兵器を盗み取り、一州の地を襲撃しようとなりました。事発覚して都儒を斬ることができて、謀叛は成就しませんでした。

咸亨元年に至り、六月、高麗が謀叛して、漢官（唐の役人）をみなごろしにしました。新羅はたゞちに兵を発せんとして先づ熊津に報じて云く、

「高麗既に叛す。伐たざるべからず。しかし、彼も我も共に帝臣、理として同じく凶賊をうつべし。兵を発する事、すべからく協議すべし。諸子、官人を遣はしてこれに來り、共に相計ることを」

百済の禰軍がここに来て遂に協議しました。云く、

「兵を発してからお互ひに疑ひ合つてはよくない。宜しく兩処の官人を人質として交

換すべきである。」と。

そこで金儒敦きんじゆんどんらを府城に遣はしたところ、百済は人質交換は許したが、城中に人を集めて、夜襲して来ました。

七月、入朝使、金欽純きんきんじゆんらが至り將に境界を定めんとしましたが、地図を披ひらいて百済の旧地をしらべて、すべてこれを割讓かつじやうしてしまひました。

黄河未帯、太山未礪、この三、四年間に、一たび与へ一たび奪ひ、奪つたり与へたりで、新羅の国民は皆本望を失ひ、みなかう云つてゐます。

「新羅と百済とは代々の深い仇敵だ。今、百済の景況を見ると、自立した一国と同じである。百年の後には、わが子孫が必ず併吞されてしまふだらう。新羅は早くから唐朝国家の一州である。これを分けて兩國とすることはできない。願はくば一家として永久に後の患のないやうでありたい」と。

昨年の九月、くはしく事を録して使を發して奏聞しましたところ、海に漂はされて帰つて来ました。さらに使を發遣しましたが、また達することができません。その後は風

寒く浪荒く、まだ聞奏しておりません。

百済は事を構へて奏して云ひますには、「新羅は反叛します。」と。新羅は前に貴臣の志を失ひ、後には百済に讃せられ、その進退を咎められ未だ忠誠の心を申し上げてをりません。かういふ讒言が日々聖聴を經、式なき忠心は一も達することがありません。

使人琳潤至りまして、辱いお手紙をもたりました。総管（薛仁貴）が風波を犯し、遠く海外から来られたのに対し、須らく使を発して郊外にお迎へしその牛酒を致すべきでしたが、遠く異域に居てまだ礼を致すを得ません。時に迎接を闕くことがありますか、どうか怪しまないでください。

総管のお手紙を披き読みますと、専ら新羅を以て已に叛逆としてをられますが、御本人の意見ではありますまい。悲しみ懼れてよくよく考へてみますと、かういふ讒を受け、口を緘して責を受けるならば、不用の数に入ってしまうせう。今、無実の罪を略陳して具さに叛無きを記しました。

国家、一介の使を降して元由を垂問することもなく、すなはち数万の衆を遣はして、根拠地を傾けようとして、楼船は滄海に満ち、舳艫を江口に連ね、彼の熊津を救って、

此の新羅を伐たうとせられる。

あゝ、兩國（百濟、高句麗）未だ平定してをりません。

賊、百濟に残り反つて雜齒の賞を蒙り、漢（唐）に殉じた新羅が已に丁公の誅を受けるのです。太陽の曜きは、光を廻らさなくても、葵藿の本心は日に向ふものです。

総管は英雄の秀氣を稟け、将相の高材を抱き、七徳兼備、九流を涉獵し、恭しく天罰を行ふ、濫りに罪を加へません。天兵未だ出でず、先づ元由を問ふ、此に縁つて書來された。敢て不叛を陳べました。総管審かに自らおはかりになつてください。状を具して申奏いたします。雞林州大都督左衛大將軍・開府儀同三司・上柱国・新羅王金法敏、白す。

九月、薛仁貴の手紙にあつた通り、唐の將軍高侃らが蕃兵四万を率ゐて平壤に至り、溝を深くし壘を高くして帶方を侵した。冬十月六日には、新羅は唐の漕船七十餘艘を撃ち、郎將鉗耳大侯および士率百余人を捉へ、淪没者無数といふから、唐と新羅との高句麗、百濟の故地をめぐるの半島征覇の攻防戦が激化したのである。

(八) 天智天皇崩御・壬申の乱

天智天皇十年九月天皇病みたまひ冬十月、皇弟大海人皇子に後事を嘱せらる。

大海人皇子辞して、沙門(僧)となりて吉野に入りたまふ。後の天武天皇である。

十一月十日、対馬国の司が使を筑紫太宰府に遣はして報告して来た。

「二日、沙門道久、筑紫君薩野馬、韓島勝娑婆、布師首磐の四人が、唐から帰国して、

唐の使者郭務棕ら六百人、送使沙宅孫登等千四百人、総勢二千人が船四十七隻に乗っ

て、共に比知嶋に泊り、語り合つて言ふには、『いま私等の人と船と、数が多いゝか

ら、急に日本に到着すると、恐らく、その地の防人が驚駭して応射するだらう。道久

等を遣つて、予め来朝の意を開陳せしむるものである』と言つてゐる」と。

この報告の中に出てくる筑紫の薩野馬は、持統天皇紀に出てくる筑紫の薩夜馬と同一

人物にちがひない。第一章のはじめに述べた大伴部博麻が身を奴隸に売つて帰国の費に

当てた四人の中の一人である。ただ、通報の内容が異つてゐるのは、唐の郭務棕等の真



意が不明である以上、明らかにすることはできない。彼らは日本の情勢を偵察するため  
に利用されたとも思へる。送使沙宅孫登は、百済の高官で、百済滅亡の時捕虜となつて  
唐に連行された人物である。後に唐に仕へた。この年、新羅が熊津、泗泚など百済にお  
ける唐の根拠地を略取したといふから、あるひはこの二千人は、再亡命のための来日で  
あつたかも知れない。

二十三日、近江宮では、大友皇子と五人の重臣たちが盟を固めた。二十四日、近江宮  
に火災があつた。火は大蔵省の第三倉から出た。二十九日、五重臣は大友皇子を奉じて  
さらに天皇の前に盟つた。同日、新羅王に、絹、緇、綿、韋を賜ふ。

十二月三日天智天皇、近江宮に崩御。

天皇の御病氣から崩御、葬送に際しての歌が万葉集(巻二)に残されてゐる。

天皇の御病氣の時、皇后、倭姫の命の奉つた御歌

天の原ふりさけ見れば大君の御寿は長く天足らしたり

聖寿の長久を述べて御回復を祈つた御歌である。

御病勢がつのつて今はといふ時、皇后の奉つた御歌一首

青旗あをはたの木幡こはたの上を通かよふとは目には見れども直ただに逢あはぬかも

(天皇の御姿が木幡の上を通ひたまふと目には見えるけれども直接お目にかゝることはない。)

### 天皇崩御の時、皇后の御歌一首

人はよし思ひやむとも玉蔓影たまかづらに見えつゝ忘れぬかも

(他の人は思ひやむことがあらうとも私には大御すがたが面影に見えつゝけて忘れることができません。)

右の三首は皇后の御歌であるが、次は、姓氏未詳の一婦人の歌である。

### 天皇崩御の折

うつせみし 神に堪あへねば 離さかり居て 朝嘆く君 放はなり居て わが恋ふる君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣きぬならば 脱ぬぐ時もなく わが恋ふる 君ぞ昨きのの夜 夢に見えつる

### 天皇の大殯おほあらしの時の歌

かからむの懐こころ知りせば大御船おほみふね泊ふねはてし泊とまりに標繩しめゆ結ゆはましを (額田の王)  
やすみししわご大君の大御船待まちちか恋しふらむ志賀しがの辛から埼さき (舎人の吉年)

次の皇后の御歌も、哀傷の歌と思はれる。

いさなとり 近江の海を

沖<sup>おき</sup>放<sup>はな</sup>けて 榜<sup>こ</sup>ぎくる船

辺<sup>へ</sup>つきて 榜<sup>こ</sup>ぎくる船

沖<sup>おき</sup>つ權<sup>かひ</sup> いたくな撥<sup>は</sup>ねそ

辺<sup>へ</sup>つ權<sup>かひ</sup> いたくな撥<sup>は</sup>ねそ

若<sup>わか</sup>草<sup>くさ</sup>の 孀<sup>つま</sup>の 念<sup>おも</sup>ふ鳥<sup>とり</sup>立<sup>た</sup>つ

石川の夫人の歌

さざなみの大山<sup>おほやまもり</sup>守<sup>もり</sup>は誰<sup>た</sup>がためか山<sup>やま</sup>に標<sup>しめ</sup>繩<sup>め</sup>結<sup>ゆ</sup>ふ君<sup>きみ</sup>もあらなくに

山科<sup>やまとな</sup>の御陵<sup>みはか</sup>から退出<sup>でいしゅ</sup>した時<sup>とき</sup>、額田<sup>ぬかた</sup>の王<sup>みこと</sup>の作<sup>つく</sup>った歌<sup>うた</sup>一首<sup>いっしゆ</sup>

やすみしし わご大<sup>おほ</sup>君<sup>きみ</sup>の

かしこきや 御陵<sup>みはか</sup>仕<sup>つか</sup>ふる

山科<sup>やまとな</sup>の 鏡<sup>かがみ</sup>の山<sup>やま</sup>に

夜<sup>よ</sup>はも 夜<sup>よ</sup>のことごと

昼はも 日のことごと

哭のみを 哭きつつありてや

ももしきの 大宮人は 去き別れなむ

十二月十七日、新羅の使節、沙滄（第八位）金万物ら帰国す。前年冬十月七日からの一年以上の滞在であった。天皇崩御を新羅に伝へたものであらう。

明けて春三月十八日、天皇の喪を郭務棕らに告げしめ、甲冑弓矢、繩、布、綿を賜ふ。三十日、郭務棕ら帰国す。

壬申の乱！

「日本書紀」は、天武天皇側に立って壬申の乱を記すこと詳細であるが、中に、筑紫の大宰栗隈王に対して、大友皇子が援軍を求めると、栗隈王が次のやうに答へてゐるところがある。

「筑紫の国は、もとより辺賊の難を成る。そもそも城を峻くし、隍を深くして、海に臨みて守らすのは、豈、内賊のためであらうか。今、皇子天皇（大友皇子）の命を畏ん

で軍を發せば、国防は空しくならう。その時若し不慮のことが勃發し、緊急事態が發生すれば、——即ち外国の侵入があれば——國家が傾くだらう。そのあとで、百度この私を殺しても、何の益があらう。皇子の徳に背くわけではない。容易に兵を動かさぬのはこの理由である。」と。

かくて、筑紫の大宰は、決死の覚悟で大友皇子側の勧誘を絶った。勿論、大海人皇子側にもつかなかつた。對外防衛の任務に邁進したといふことで、当時の北九州の緊張がしのばれる。

この年、国内は、六月から七月までいはゆる壬申の内乱で、はげしい戦ひがあつたが、九月天武天皇は飛鳥の岡本宮にお移りになつて、乱は終つた。

冬十月二十四日、新羅の客金押実等（こんざしつ）を筑紫に饗応し、物を賜ふ。十二月十五日、船一隻を新羅の客に賜ふ。二十六日、帰国す。

かくして、天武天皇の治世となり、二年閏六月（うるす）ならびに秋八月、新羅、高麗、耽羅（たむら）の使節が来朝して、天皇の即位をことほぐ。つゞいて、使節が来朝するが、この頃、漸く、白村江戦役の敗戦による國家存亡の危機は、脱（のが）れえたもののやうである。六年三月十九

日新羅の使人清平及び従者十三名を京に召す、とあるのがその証拠であらう。彼此の使節が往来して平和的な国際交流の世界が展げることになった。もっともこの日本の平和は、唐と新羅とが半島で覇権を争つてゐたので、日本を敵とすることができなかったためである。

天武天皇九年十一月四日、高麗の人十九人が本土に帰った。約二十年前、斉明天皇の弔使として来朝した人々で、高麗の滅亡及び戦乱によつて帰国の機を失つた人々である。平和は亡国の人々にも及んだのである。百濟、高麗の帰化人の多かつたのは言ふまでもない。新羅から漂着して日本に定着する人もあつた。

十年二月、律令を定め法式を改めんと詔を下され、三月帝紀及び上古の諸事を記定したまふとある。律令の制定と国史の編纂事業とで、国政の原理とその史的根拠とを示されたのである。かくして内的統一と対外防衛とが相応じて、国家の基礎が一層強められた。国語による国史の成立は日本の文化的独立の顯著な証しである。



(九) 新羅文武王、唐高宗皇帝の崩去

九月、新羅の使者至りて告げて曰さく、「国の王薨せぬ」とまうす。

新羅の文武王の薨去が伝へられたのである。文武王は武烈王、金春秋の王子で、金法敏である。天智天皇崩御のすこし前、唐將、安東都護の薛仁貴との往復書簡に、武烈王以来の経歴を語つてゐるが、その後、歴年、唐軍と戦つて、一勝一敗、あるときは官位を削られあるときは謝罪する等苦闘をつづけた。朝鮮半島国家の独立の上から云へば、最も偉大な君主であつた。

ちようどその緊張状態の時期に、日本は壬申の内乱を経過したので、内乱にもかゝらず、独立をつづけることができたのである。実に幸運であつたとも言へよう。

文武王は薨する前年には高句麗の安勝王に妹をめあはせて高句麗王として、新羅の半島統一の基礎を堅めたのである。白村江戦役前の大唐一辺倒の新羅には考へられないことで、漸く半島独立のきざしが見えはじめたと言へる。



新羅文武王海底陵

秋七月一日、この英邁な王は薨じた。文武王といふ。群臣に遺言して、東海の口の大石の上に葬った。俗伝によると、王は化して竜と為ったと。その石を指して大王石といふ。

それから約千三百年後の昭和四十二年五月、慶州北道月城郡北面奉吉里附近の海岸に「三国史記」の通りに海中の陵の遺蹟が発見された。

遺詔がある。（「三国史記」）その梗概をあげよう。

「私は動乱戦争の時に運り、西征北伐、克ちて疆封を定め叛を伐ち携を招き、遠近を治めた。上は祖先の靈にこたへ下は

父子の宿怨に報いた。存亡に遍く追賞し、疏爵内外に均しく、兵戈を鑄して農器となし、人民をして寿を樂しましめた。賦徭を少くし、家給し人足り、民間安堵し、城内におそれはない。倉粟は山のごとく、獄には人なく草がしげるのみである。幽頭に恥ぢず士人に負かぬといふことができる。自ら風霜を犯して遂に痼疾と為り、政教に心いためて宿痾を結んだ。かくて時うつり死期を迎へる、何の恨があらう。

太子は久しく位にあり上は群臣を従へ下は庶寮に至る。送往の義違ふなく、柩の前に即位せよ。

昔日万機の英も終に一封の土と為る。樵(きこり)はその上に牧歌し、狐兔その傍に穴を作る。徒らに資財を費して譏を文書に貽し空しく人力を勞して幽魂を濟ふことなし。静かにこれを思ひて傷病已むこと無し。此の如き巨大な墳墓はわが樂しむところではない。わが死後十日、庫門外庭に、西国の式に依つて以て火焼して葬れ。服の輕重は自ら常科あり、喪制度務儉約に従へ。

其れ、辺城鎮遏及び州県の課税、不要なものは並な廢せ。律令格式の不便なるものは便ち改めよ。遠近に布告して此の意を知らしめよ。主者施行せよ。」

「朕は竜となって倭寇の侵入を防がん」とは「三国遺事」のつけ足しであらう。むしろ「倭」と連合して南鮮の独立をはかりたかったのではあるまいか。

天武十二年、唐の高宗（六四九—六八四）が薨じて中宗が位をつぎ、則天武后の世となった。

高宗皇帝は太宗皇帝の高句麗征服の遺業をついで成功ををさめ、内治外征に大唐の威力を示した。隋代以来の高句麗征討もなしとげた。しかし、日本からはじまった東アジアの諸国の独立の機運をおさへ切ることはできなかった。やがて唐朝は帝位をめぐる権力争奪で分裂し、太宗、高宗時代の統一的な力を失ったのである。日本は唐を模して制度をととのへ文明を充実し唐と対等の唯一の独立国家となった。新羅もまた唐将と戦って半島統一の道を進んだのであった。

かくして白村江の戦をめぐる諸君主も諸將軍も大かた世を去ったのである。

#### (十) 天武朝・持統朝

天武天皇十三年閏四月五日には軍備の充実に関する詔が発せられた。

「凡そ政の要は軍事なり。是を以て、文武官の諸人も、務めて兵を用ゐ、馬に乗ることを習へ。即ち馬、兵、併せて当身の装束の物、務めて具さに儲へ足せ。其れ馬有らむ者をば騎士とせよ。馬無からむ者をば歩卒とせよ。並びに当に試練して、聚り集ふに障ること勿。」

一種の国民皆兵である。さらに語を継がれて詔に背く者に対する罰則を定めた。

「若し詔の旨に忤ひて、馬・兵に不便有り、亦装束闕くることあらば、親王より以下、諸臣に逮るまでに、並に罰へしむ。大山位より以下は、罰ふべきは罰へ、杖つべきは杖たむ。其れ務め習ひて能く業を得む者をば、若し死罪と雖も、二等を減らさむ。唯し己が才に恃りて、故に犯さむ者のみは、赦す例に在らず」と。

冬十月一日、八色の姓を定めた。十四日、全国的な大地震があった。十一月二十三日午後六時頃から八時にかけて、「天文悉く乱れて、星隕つること雨の如し」とある。文字通り天変地異であるが、この間にも八色の姓の指定はつゞけられてゐる。

十四年十二月四日、筑紫に遣はされる防人の船が、難船して、防人らは海中にたゞよ

ひ、皆衣類を失った。そこで、彼らの衣料用として布四百五十八端を筑紫に送り下した。防人派遣も継続してゐることがわかる。

十五年、六月十日、天皇の病ひを卜ふと、草薙の劍の崇りとのことであつた。即日、宝剣を尾張の国熱田の社に送つた。さきに新羅僧が盗み出して新羅に逃亡したが果さなかつた。宝剣はそのまゝ朝廷に置かれてゐたのであらうか。熱田の社に還つたのである。九月九日、天武天皇崩御。冬十月二日、大津皇子、謀反の故を以て死を賜ふ。第一章に述べたごとくである。御船征西の折、那の大津においてお生れになつた天武天皇の皇子である。十一月十六日、大津の皇子の御姉君の伊勢斎宮大来皇女、京師に帰る。

持統天皇四年（六九二年）九月二十三日。大唐の学問僧智宗、義徳、淨願、軍丁筑紫国上陽群の大伴部博麻、新羅の送師大奈末金高訓等に従つて、筑紫に還り着く。大伴部博麻は戦役出征後三十年後の帰還である。

冬十月三十二日、大伴部博麻に詔してのたまはく、云々。第一章に述べた通りである。

そして十年八月一日、持統天皇御譲位をもつて「日本書紀」は終る。西暦六九七年の



ことである。唐は則天武后の時代で、宮廷社会は淫蕩と享楽を追ってその極に達してゐた。北方には靺鞨・高句麗の後裔・大祚榮が満洲方面に震国（後の渤海国）を建てた。（六九八年）新羅の半島統一は進み、日本の国防は充実し、唐は国内分裂に苦しみ、東アジアの様相は戦役前とは全く變つてしまつた。

(五) 平和克復——遣唐使、長安に入る

「続日本紀」は書名の通り「日本書紀」を継ぐもので、文武天皇即位の年から筆をおこしてゐる。持統天皇は位を禪られて太上天皇と申上げる。文武天皇の五年がすなはち

大宝元年（七〇一年）で、その年の正月二十二日、

守民部尚書（民部長官）直大式（從四位相当）粟田朝臣真人を以て遣唐執節使（総裁）と為し、

左大弁直広参（正五位相当）高橋朝臣笠間を大使と為し……（中略）……進大肆（初位下相当）

白猪史阿麻留、無位山於億良を少録と為しき。

とある。

粟田真人を総裁とする遣唐使が任命され、その下級官吏に山上憶良が入つてゐる。孝徳天皇の白雉五年（六五四）押使（総裁）高向玄理、大使河辺麻呂一行が入唐し、つづいて、齐明天皇五年（六五九）坂合部石布、津守吉祥、伊吉博徳らの一行が入唐してから、実に四十数年ぶりのことである。

玄理の一行は、玄理をはじめ唐で死ぬ者が多く、博徳らの一行は唐朝に監禁されるといふ、いづれも戦争直前の悲劇的な遣唐使であった。その巔末は第一章に詳しく書いたので思ひ起していただきたいが、今度の遣唐使も楽には行けなかつたのである。

正月に任命が行なはれて四月十二日一行は朝廷を拜し、五月七日に粟田真人に節刀を賜ふと記されてゐるから、それからしばらくして筑紫から出航したと思はれるが、「風浪暴險、海を渡ることを得ず」、翌大宝二年六月二十九日、筑紫を發つた。

翌々年の帰朝報告が「積日本紀」にある。

「慶雲元年秋七月甲申朔、正四位下粟田朝臣真人唐国より至る。初め唐に至る時、人有り来りて問ひて曰く、

何れの処の使人ぞ

答へて曰く

日本国の使、と。

我が使反りて問ひて曰く、

此れは何州の界ぞ

答へて曰く、

是れは大周楚州塩城県の界なり、と。

更に問ふ、

先には是れ大唐、今は大周と称す。国号何に縁ってか改め称す、と。

答へて曰く、

永淳二年、天皇太帝（高宗）崩じて、皇太后（則天武后）位に登る。称を聖神皇帝

と号し、国を大周と号す、と。

問答ほ了りて、唐人、我が使に謂ひて曰く、

しばしば聞く、海東に大倭国有り、之を君主国と謂ふ。人民豊楽にして礼義敦行なり、と。今使の人を見るに、儀容はなはだ淨し。豈、信ならずや。語畢りて去る。」

このときまた讃岐国那賀郡の錦部刀良、陸奥国信太郡の生玉五百足、筑後国山門郡の許勢部形見ら三人の捕虜が遣唐使に随つて帰国してゐる。「初め百済を救ふや、官軍不利、刀良ら唐兵に虜へられ没して官戸と作り四十年を経て乃ち免る。刀良是に至つて我が使粟田朝臣真人らに遇ひて、随つて帰朝せり」とある。戦後四十年になる。

「新唐書」の「日本伝」には、

「長安元年、其の王文武立ち、改元して大宝と曰ふ。朝臣真人粟田を遣はして方物を貢す。朝臣真人は猶ほ唐の尚書のごときなり。進徳の冠を冠る。頂に華藹四有り。紫袍を披ぎ帛帶。真人、学を好み能く之を属す。進止、容あり。武后之を麟徳殿に宴し、司膳卿を授けて之を還す。」

とある。

「武后」は女帝則天武后である。「麟徳殿」は、「親王諸王の婚儀等に用いられる大明宮の奥御殿で、此処に招ぜられる者は唐朝の上客であるということでした」（滝川政次郎博士「日唐戦争」とあるので、その有様がうかゞはれる。「大明宮」は高宗皇帝が竜朔年間に移られた「東内」と呼ぶ宮城である。

以後、奈良平安の遣唐使が唐朝の上客として待遇されたことを述べて、滝川博士が次のやうに述べられたのには深い意味がある。

「唐国における日本人の地位がこのように高いのは、日本が白村江の一戦に敗るも和を請はず、自ら防備を嚴にして三十余年間唐と対峙し続けたからでありまして、我我今日の日本人は、当時の日本人の剛毅なる気魄を讚嘆すると共に、自ら顧みて愧ずる所なきを得ません。」(同前論文)

かうして、日本と唐とは対等に近い国際関係となり平和的交流を行なふに至った。これは七世紀後半の東アジアの生み出した画期的な事件であり、これが今日の国際関係の基礎となったのである。

たゞ残念なことは、粟田真人ら遣唐使が唐朝でかういふ待遇を受け、日唐間にほとんど完全な平和が訪れたことを、持統天皇が知らずになくなられたことである。

粟田真人の一行が筑紫を發つた年の十月から、約一ヶ月半に及ぶ長い東国への旅を了へられた太上天皇(持統天皇)は、同年十二月二十二日におかくれになった。御年五八である。

逆算して四十一年前、斉明天皇の御船征西にしたがって、大海人皇子の妃として、那なのおほつ大津つに向はれた女帝は、当時御年十七といふことになる。女帝の青春は征戦従軍にはじまり、爾来四十年、敗戦と遷都と内乱とを経験されて、平和の知らせを聞かれる直前に、おなくなりになったわけである。斉明天皇征西の御船にあった人の最後のお一人であつたのではなからうか。さういへば、唐の太宗も高宗も、百済の義慈王も新羅の武烈王も文武王も、鎌足も金庾信も、白村江をめぐる角逐した英雄たちもみな世を去ってしまった。

翌年十二月持統天皇を火葬し奉り、天武天皇の大内山陵に合葬しまつた。

粟田真人が帰国したのはその翌年の大宝四年（七〇四）七月一日であつた。

真人ら遣唐使一行が持統天皇の陵前に平和克服の知らせを申上げたかどうか、歴史は伝へない。しかし、大唐にあつた青年山上憶良が「本郷を憶ひて」

いざこども早く大和へ大伴の御津の浜松待ちこひぬらむ（万葉集卷二）

（さあみんな、早く大和へかへらうよ、大伴の名に負ふ御津の浜松はわれらの還るのを待ちわ



びてゐることだらう。

と歌った歌が残されてゐるが、これは単なる望郷の歌ではあるまい。

唐との外交の使命を果たしたことを一刻も早く大和朝廷に伝へたいといふ心のたかぶりが感じられるのである。この思ひは、やがてこの青年の心の中に、

しきしまの やまとの国は

ことだまの 幸はふ国

皇神の いつかしき国

といふ国民的自覚をはぐくんで、奈良・天平文化の形成へとつながってゆくのである。

かくして大唐は「日本」を承認したのである。

憶良ら一行の帰国の翌年、則天武后も世を去った。唐は玄宗皇帝の世を迎へる頃、日本は独立国家の威力をましつゝ長い平和の時代に入ることになるのである。

しかしこの平和がそれほど長くつゞくことを当時の人々は知らなかった。それだからといってこの藤原・奈良（平城）・京都（平安）の平和な時代が、この当時の人々の緊張と苦闘とによって支へられたことを否定することはできない。（白村江の河口にまつ

られることもなく眠るますらをたちに、のちの日本の歴史を一目でもみてもらひたい。またかれらをして人の知らぬかれらの日々を語らしめたい」と願ふのは筆者のみではあるまい。いや、さう思ふのも生きてゐるものうぬぼれかも知れない。彼らこそ今日のわれらを照してゐるのである。祖国日本の永遠のいのちを信じてゐたにちがひない彼らこそ。

(をはり)

—  
A. D  
六〇一〜七〇五  
—

附 七世紀の日本・朝鮮半島三国・隋唐の対照表



附 七世紀の日本・朝鮮半島三国・隋唐の対照略年表

(西暦六〇一年—七〇五年)

西暦 千支	国名	日	本	百	濟	高	句	麗	新	羅	(隋) 唐
六〇一 辛酉		推古天皇九年									隋・高祖仁寿元年
六〇二 壬戌				武王二年					真平王 建福二十三年		
六〇三 癸亥		推古天皇十一年 擊新羅將軍米目皇子筑紫に薨す									
六〇四 甲子		推古天皇十二年 聖德太子「憲法十 七条」肇作									隋・煬帝即位
六〇五 乙丑											
六〇六 丙寅		聖德太子勝鬘經法 華經を講ず									

六〇七  
丁卯

推古天皇十五年  
神祇祭拜(二月)  
小野妹子を隋に遣  
す(七月)

六〇八  
戊辰

推古天皇十六年  
—東天皇敬白西皇  
帝—小野妹子に隨  
つて留學學生僧隨  
に行く

六〇九  
己巳

六一〇  
庚午

六一一  
辛未

六一二  
壬申

六一三  
癸酉

六一四  
甲戌

六一五  
乙亥

二十三年  
隋兵を薩水に敗る

二十四年  
隋を撃退す

二十五年  
平壤に迫られ降を  
乞ふ

兵を隋に乞ひ高句  
麗を征せんとす

大業三年  
倭国朝貢国書に曰  
く「日出処天子云  
々」

大業七年  
高麗征討の詔を發  
し兵を徴す

八年  
大兵を發し高句麗  
を伐つ

九年  
帝復た高麗を伐つ



六二五 乙酉	六二四 甲申	六二三 癸未	六二二 壬午	六一一 辛巳	六二〇 庚辰	六一九 己卯	六一八 戊寅	六一七 丁丑	六一六 丙子
			推古天皇三十年 聖德太子薨す 御年五十		推古天皇二十八年 天皇記国記を撰す				
	二十五年 帶方郡王百濟王に 冊せらる								
							建武王即位		
	七年 上柱国遼東郡王高 句麗國王に冊せら る								
			四十六年 柱国桑浪郡公新羅 王に冊せらる						
			高祖七年 朝鮮三国を冊封す				隋亡び（煬帝弑せ らる）唐興る、高 祖		

六二六  
丙戌

六二七  
丁亥

六二八  
戊子

三十六年  
推古天皇崩す  
御年七十五

六二九  
己丑

舒明天皇即位

六三〇  
庚寅

第一回遣唐使発遣

六三一  
辛卯

六三二  
壬辰

六三三  
癸巳

六三四  
甲午

六三五  
乙未

唐太宗聖書を百濟  
王に与へて新羅と  
和せしむ

五十四年  
眞平王薨す  
善徳女王即位元年

太宗即位

太宗の貞観の治元年

貞観四年  
李靖、突厥を破る

貞観九年  
高祖薨す

六三六  
丙申

六三七  
丁酉

六三八  
戊戌

六三九  
己亥

六四〇  
庚子

六四一  
辛丑

六四二  
壬寅

六四三  
癸卯

六四四  
甲辰

六四五  
乙巳

舒明天皇十二年  
女理・請安ら留唐  
学生ら帰国

十三年  
舒明天皇崩ず  
御年四十九

皇極天皇即位

蘇我氏を滅す  
孝徳天皇即位、都  
を難波にうつす

武王四十二年薨じ  
義慈王即位元年

高句麗と連和し新  
羅の四十余城をと  
る

泉蓋蘇文、高麗王  
建武を扶す。宝蔵  
王を建つ。

唐と戦ふ  
李世勣軍幽州に至  
る

貞観十五年文成公  
主を吐蕃に嫁す

貞観十七年  
魏徵卒

貞観十八年  
高麗親征

合 右

六四六	丙午	大化二年改新の詔			
六四七	丁未				
六四八	戊申				
六四九	己酉	大化五年 八省百官を置く			
六五〇	庚戌				
六五一	辛亥				
六五二	壬子				
六五三	癸丑	第二回遣唐使			
六五四	甲寅	白雉五年 孝徳天皇崩。			
六五五	乙卯	齊明天皇(重祚) 第三回遣唐使(高 向玄理)玄理大唐 に卒す			
六五六		齊明天皇即位一年			
			唐高宗百済に璽書 むして新羅と和せし む		
			十三年 倭国と通好す		
			唐と戦ふ		
			十六年善徳王薨す 真徳女王即位		
			高麗を伐つ		
			貞観二十二年 房玄齡卒		
			太宗崩す、遼東の 兵を罷む高宗即位		
			永徽六年 程名振、蘇定方を 遣はして高句麗を 伐つ、褚遂良卒		

丙辰	六五七 丁巳	第四回遣唐使 (伊吉博徳)			
	六五八 戊午				
	六五九 己未				
	六六〇 庚申	齊明天皇六年 百濟救援の詔	義慈王二十年 百濟亡ぶ、義慈王 捕はれて唐都に薨 ず	武烈王、百濟を滅 す	顯慶五年 蘇定方ら百濟を滅 す
	六六一 辛酉	齊明天皇七年 天皇朝會宮に崩ず 御年六十八		武烈王七年王薨す 文武王即位	
	六六二 壬戌	中大兄皇子称制	豊彰、福信ら周留 城に抱る		
	六六三 癸亥	天智天皇称制二年 白村江の戦	白村江の戦 豊、高麗に走る	文武王三年 白村江の戦	竜朔三年 白村江の戦
	六六四 甲子				
	六六五 乙丑	四年唐使劉徳高百 濟郭務棕を率 第五回遣唐使	就利山の会盟 (扶余隆、文武王 劉仁願)	文武王五年 扶余隆と就利山に 会盟	麟徳二年 就利山に会盟せし む

六六六 丙寅	称制六年 大津宮に遷都
六六七 丁卯	天智天皇即位
六六八 戊辰	天智天皇八年 藤原鎌足卒 第六回遣唐使
六六九 己巳	天智天皇九年 法隆寺火災
六七〇 庚午	天智天皇十年 天皇崩す 御年四十六
六七一 辛未	壬申の乱 弘文天皇崩す
六七二 壬申	天武天皇即位
六七三 癸酉	
六七四 甲戌	
六七五 乙亥	
六七六	

蓋蘇文卒

宝蔵王二十七年  
高句麗滅ぶ

高句麗の安勝を助 けて唐と戦ふ	文武王十一年 大唐總管薛仁貴寄 書、文武王答書	金庾信卒す	唐を退けて朝鮮を 統一す
乾封元年 泰山の封	蘇定方卒	總章元年 李勣ら平壤を抜く 李勣卒す	帝を天皇、后を天 后と称す

丙子 六七七  
丁丑 六七八  
戊寅 六七九  
己卯 六八〇  
庚辰 六八一  
辛巳 六八二  
壬午 六八三  
癸未 六八四  
甲申 六八五  
乙酉 六八六  
丙戌 六八七

朱鳥元年  
天武天皇崩す

扶余隆を帶方王とす  
(唐)

高藏を朝鮮王とす  
(唐)

王妹を安勝に嫁す

文武王二十年王薨す、神文王即位

儀鳳三年、則天武后に朝す

高宗薨す、中宗即位、薛仁貴卒

睿宗即位

劉仁軌卒

太后(武后)称制



持統天皇御年五十五  
稱制

六八七  
丁亥

六八八  
戊子

六八九  
己丑

草壁皇子薨于  
(柿木人麿挽歌)

六九〇  
庚寅

持統天皇即位

六九一  
辛卯

六九二  
壬辰

六九三  
癸巳

持統天皇四年  
大伴部博麻呂還

六九四  
甲午

六九五  
乙未

六九六  
丙申

金仁問卒

六九七 丁酉	持統天皇讓位 文武天皇即位	六九八 戊戌	六九九 己亥	七〇〇 庚子	七〇一 辛丑	七〇二 壬寅	七〇三 癸卯	七〇四 甲辰	七〇五 乙巳	粟田真人歸国	大宝元年 粟田真人を遣唐使 とす	持統天皇崩す 遣唐使長安に入る	粟田真人歸国	粟田真人則天武后 に謁し宴を賜はる	則天武后薨す
-----------	------------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	--------	------------------------	--------------------	--------	----------------------	--------



著者略歴

夜久正雄

一、大正四年東京部渋谷区に生れる。

一、東京府立一中・第一高等学校を経て東京帝国大学文学部国文学科卒業。

一、現職 亜細亜大学教授・教養部長

一、著書『三条実美歌集』(梨のかたえ)とその研究(昭和十九年)、『ホイットマン草の葉抄』(昭和二十五年、松田福松先生と共著)、『歌人・今上天皇』(昭和三十五年)、『古事記のいのち』(初版・昭和四十一年、改訂版・四十九年)、『日本文学における魂の行方』(昭和四十八年編著)、『詩と政治・明治の詩魂』(昭和四十九年刊行予定) ▲自選歌集『流星』、『戦後』、『武蔵野』、『いのちありて』 ▲共編『三井甲之歌集』、『三井甲之存稿』、『川出麻須美遺稿集』、『天地四方』 ▲共著『天皇と天皇制についての基本的思考』(昭和四十年、小田村寅二郎氏と共著)、『短歌のすすめ』、『短歌のあゆみ』(昭和四十六年、山田輝彦氏と共著) ▲共編『日本思想の系譜』(国民文化研究会版・時事通信社版昭和四十七年)、『明治天皇詔勅選解』(講談社昭和四十八年) ▲英訳書 THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (Walter Robinson 氏訳、昭和四十四年初版、四十八年再版)

白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱—

国文研叢書 No. 15

昭和四十九年一月十日 資料二、〇〇〇部  
昭和四十九年三月十日 第二刷

頒価 七〇〇円

著者 夜久正雄

発行所 社団法人 国民文化研究会  
理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七—一〇—一八柳瀬ビル  
電話(五三三) 一五二六、七番  
振替 東京六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一—一—四

落丁乱丁のものは、お取り替えいたします











